表３－９　縄文土器観察表(199～223)

番号	挿図番号	写真図版	整理番号	出土地点	時期	器種	残存部位	色調		胎土類型	文様要素	備考
								内面	外面			
199	26	28	190－01	06－1区第8層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR5/3	10YR6/2	F3類	【胴部】垂下沈線2条、横走沈線1条、	
200	26	28	192－02	06－1区第8層	中期末		胴部(ⅱ類)	2.5Y6/1	10YR8/2	F2類	【胴部】渦巻文?、縄文(LR?)	沈線は破線状を呈する。
201	26	28	154－02	06－1区第8層	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR6/2	10YR6/2	F2類	【胴部】連弧状沈線3条	
202	26	28	162－01	06－1区第8層	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR7/1	10YR8/3	F2類	【胴部】連弧状沈線3条	
203	26	28	176－01	06－1区第8層	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR7/2	2.5Y7/1	F3類	【胴部】連弧状沈線5条	垂下沈線の可能性もある。
204	26	28	005－01	06－1区第8層	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR6/4	10YR6/3	F2類	【胴部】連弧状沈線5条	
205	26	28	006－01	06－1区第8層	中期末		胴部(ⅱ類)	2.5Y5/1	2.5Y8/2	F2類	【胴部】連弧状沈線7条、垂下沈線1条、縄文(RL)	
206	26	28	006－02	06－1区第8層	中期末		胴部(ⅲ類)	7.5YR6/4	7.5YR6/4	F2類	【胴部】横走沈線1条	連弧文の一部である可能性もある。
207	26	28	007－02	06－1区第8層	中期末		胴部(ⅲ類)	7.5YR6/4	7.5YR6/4	F2類	【胴部】横走沈線2条	
208	26	28	195－01	06－1区第8層	中期末		胴部(ⅲ類)	2.5Y7/2	10YR7/2	F3類	【胴部】横走沈線1条、斜行沈線1条	
209	26	28	193－01	06－1区第8層	中期末		胴部(ⅲ類)	10YR6/3	7.5YR7/4	B3類	【胴部】斜行短沈線5条	縦方向の羽状沈線となる可能性もある。
210	26	28	008－01	06－1区第8層	中期末	浅鉢A1類	口縁部～体部	10YR8/2	10YR8/3	F2類	【口縁部】横走沈線3条、縄文(LR?)	
211	26	28	180－05	06－1区第8層	中期末	浅鉢A3類	口縁部	10YR8/3	2.5Y6/1	F1類	【口縁部】刺突	他器種の可能性もある。
212	26	28	190－14	06－1区第8層	中期末		底部(平底)	2.5Y5/2	10YR4/3	AB1類		
213	26		003－02	06－1区第8層	中期末		底部(平底)	2.5Y6/3	2.5Y7/2	F3類		
214	26		006－03	06－1区第8層	中期末		底部(平底)	10YR5/2	10YR6/3	F3類		
215	26		008－09	06－1区第8層	中期末		底部(平底)	2.5Y6/2	2.5Y5/2	F2類		
216	26		190－12	06－1区第8層	中期末		底部(平底)	7.5YR7/4	7.5YR7/6	F3類		
217	27	29	274－01	06－1区SX10	中期末	深鉢A1類	口縁部～胴部	10YR8/4	10YR7/3	F3類	【口縁部】区画文 【胴部】垂下沈線1条、縄文(LR)	
218	27	29	260－02	06－1区SX10	中期末	深鉢A1類	口縁部～胴部	10YR6/3	2.5Y7/2	F3類	【口縁部】区画文(羽状沈線充填)	波状口縁。 明確な隆帯はもたない。 浅鉢A2類の可能性もある。
219	27	29	260－03	06－1区SX10	中期末	深鉢C3類	口縁部	2.5Y6/1	10YR7/2	F1類	【口縁部】平行沈線2条	
220	27	29	260－05	06－1区SX10	中期末		胴部(ⅰ類)	2.5Y7/2	10YR7/3	F2類	【胴部】縄文(LR)	
221	27	29	260－01	06－1区SX10	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR4/3	10YR5/3	F2類	【胴部】渦巻文、縄文(LR)	
222	27	29	269－01	06－1区SX10	中期末		胴部(ⅲ類)	10YR7/4	10YR5/2	F1類	【胴部】縄文原体?押圧、擦痕	
223	27	29	260－07	06－1区SX10	中期末	浅鉢C3類	口縁部	10YR6/3	10YR6/2	F3類	【口縁部】沈線(曲)1条	

表３－10　縄文土器観察表(224～248)

番号	挿図番号	写真図版	整理番号	出土地点	時期	器種	残存部位	色調		胎土類型	文様要素	備考
								内面	外面			
224	27	29	260－08	06－1区 SX10	中期末	浅鉢 D類	口縁部	10YR8/4	7.5YR6/3	F3類		
225	27	29	226－01	06－1区 北西部 炭集積2	中期末	深鉢 A、B類	区画文部	2.5Y3/1	2.5Y3/1	F3類	【区画文部】短沈線充填	区画文部の下位に横走沈線?
226	27	29	360－01	06－1区 北西部 炭集積2	中期末		胴部 (ⅰ類)	10YR8/3	10YR7/3	F2類	【胴部】縄文(LR)	
227	28	30	418－01	06－1区 SK30	中期末	深鉢 A1類b	口縁部	2.5Y8/2	10YR6/2	F3類	【口縁部】渦巻区画文(刺突充填)	波状口縁
228	28	30	398－01	06－1区 SK30	中期末	深鉢 A1類d	口縁部	10YR4/2	10YR5/2	F3類	【口縁部】区画文(主文様:渦巻文、つなぎ文:羽状沈線充填)、縄文(LR?)	主文様部が波状を呈する。
229	28	30	367－07	06－1区 SK30	中期末	深鉢 A1類?	口縁部	2.5Y8/2	10YR7/3	F1類	【口縁部】区画文(短沈線充填)	波状口縁の可能性もある。
230	28	30	405－01	06－1区 SK30	中期末	深鉢 A4類	口縁部～胴部	2.5Y8/2	2.5Y7/3	F3類	【口端】縄文(LR) 【口縁部】平行沈線2条、渦巻文、区画文(区画内無文)、連弧状沈線6条、縄文	波状口縁
231	28	30	418－02	06－1区 SK30	中期末	深鉢 A6類	口縁部	10YR8/3	10YR7/2	F2類	【口縁部】横走沈線1条、縄文(無節)	
232	28	30	418－03	06－1区 SK30	中期末	深鉢 A6類	口縁部	2.5Y5/1	2.5Y8/2	F2類	【口縁部】横走沈線2条、縄文(LR)	
233	28	30	367－01	06－1区 SK30	中期末	深鉢 A6類	口縁部	10YR5/2	N3/0	F2類	【口縁部】沈線(曲)2条、縄文(LR?)	波状口縁。242と同一個体か。
234	28	30	418－04	06－1区 SK30	中期末	深鉢 A6類	頸部	2.5Y7/3	10YR7/2	F1類	【口縁部】横走沈線2条、縄文(LR)	
235	28	30	367－03	06－1区 SK30	中期末	深鉢 A、B類	区画文部	10YR6/3	10YR6/4	F3類	【区画文部】横走沈線1条	深鉢A1類頸部の可能性もある。
236	28	30	418－05	06－1区 SK30	中期末	深鉢 C2類	口縁部	2.5Y5/1	2.5Y5/1	F3類	【口端】短沈線 【口縁部】平行沈線1条	
237	28	30	405－10	06－1区 SK30	中期末		胴部 (ⅰ類)	10YR5/2	2.5Y8/3	F2類	【胴部】縄文(LR)	
238	28	30	405－04	06－1区 SK30	中期末		胴部 (ⅰ類)	2.5Y5/3	2.5Y4/2	F1類	【胴部】垂下沈線2条	
239	28		405－04	06－1区 SK30	中期末		胴部 (ⅰ類)	2.5Y7/4	7.5YR6/4	F0類	【胴部】垂下沈線1条、縄文(LR)	縄文原体は異なる太さの撚糸を撚り合わせたもの。
240	28		386－01	06－1区 SK30	中期末		胴部 (ⅰ類)	10YR4/2	10YR5/3	F1類	【胴部】垂下沈線1条、縄文(LR?)	
241	28		367－08	06－1区 SK30	中期末		胴部 (ⅰ類)	10YR7/2	10YR4/2	F3類	【胴部】垂下沈線1条、縄文(LR)	
242	28	30	405－09	06－1区 SK30	中期末		胴部 (ⅰ類)	10YR5/1	N3/0	F2類	【胴部】垂下沈線2条、縄文(LR?)	233と同一個体か。
243	28	30	367－02	06－1区 SK30	中期末		胴部 (ⅱ類)	10YR5/2	10YR4/2	F2類	【胴部】渦巻文	
244	28	30	367－09	06－1区 SK30	中期末		胴部 (ⅱ類)	10YR6/4	10YR6/4	F1類	【胴部】連弧状沈線3条	
245	28	30	367－06	06－1区 SK30	中期末	浅鉢 A類	頸部	2.5Y8/2	2.5Y8/3	F2類	【口縁部】横走沈線2条	
246	28		418－06	06－1区 SK30	中期末		底部 (平底)	2.5Y7/3	10YR7/3	F2類		
247	28		418－07	06－1区 SK30	中期末		底部 (平底)	10YR7/3	10YR8/3	F2類		
248	28		405－02	06－1区 SK30	中期末		底部 (平底)	10YR6/2	10YR7/2	F2類		

表３－11　縄文土器観察表(249～271)

番号	挿図番号	写真図版	整理番号	出土地点	時期	器種	残存部位	色調		胎土類型	文様要素	備考
								内面	外面			
249	29	31	414－R	06－1区 SU51	中期末	深鉢 A1類	口縁部～胴部	10YR5/3	10YR6/3	F2類	【口縁部】区画文(主文様:逆凹字状文) 【胴部】垂下沈線2条	
250	29		357－10	06－1区 SU51	中期末	深鉢 A1類	頸部	10YR5/3	10YR6/2	F2類	【口縁部】区画文(刺突充填) 【胴部】垂下沈線2条、蛇行沈線1条?	
251	29	31	414－0	06－1区 SU51	中期末	深鉢 A6類	口縁部～胴部	2.5Y7/3	10YR7/3	F3類	【口縁部】横走沈線2(3)条、沈線(曲)2条、縄文(LR)	連弧文を描いている可能性もある。
252	29	31	414－K	06－1区 SU51	中期末	深鉢 B類	口縁部	5Y5/1	2.5Y5/1	F2類	【口縁部】横走沈線1条、区画文(刺突充填)	区画外周は隆帯のみ。
253	29	31	357－01	06－1区 SU51	中期末	深鉢 B1類	口縁部	10YR4/1	10YR8/3	F3類	【口縁部】橋状把手、区画文(区画内無文)	橋状把手内面に沈線状の凹みあり。
254	29		357－06	06－1区 SU51	中期末	深鉢 A、B類	区画文部	7.5YR6/4	7.5YR4/2	F1類	【区画文部】羽状沈線充填	
255	29	31	414－B	06－1区 SU51	中期末	深鉢 C3類	口縁部	10YR6/3	2.5Y7/3	F3類	【口端】縄文(LR) 【口縁部】半円形区画文(区画内無文)、同心円文、垂下沈線2条	
256	29	31	414－F	06－1区 SU51	中期末	深鉢 C3類	口縁部	10YR6/2	10YR6/2	F2類	【口縁部】平行沈線2条	
257	29	31	414－A	06－1区 SU51	中期末	深鉢 C3類	口縁部～胴部	2.5Y6/2	10YR6/2	F3類	【口端】縄文(LR) 【口縁部】垂下沈線、平行沈線、縄文 【胴部】隆帯1条、縄文	垂下沈線は3条1単位、下端で連結。平行沈線は4条1単位。
258	29	31	414－T	06－1区 SU51	中期末		胴部(ⅰ類)	2.5Y6/1	10YR5/2	F3類	【胴部】縄文(LR)	
259	29		414－N	06－1区 SU51	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR7/2	N2/0	F2類	【胴部】縄文(LR)	
260	29	31	414－V	06－1区 SU51	中期末		胴部(ⅰ類)	2.5Y8/2	N3/0	F3類	【胴部】蛇行沈線1条	
261	29		414－M	06－1区 SU51	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR3/1	10YR4/2	F2類	【胴部】押引沈線1条、縄文(LR)	
262	29	31	414－C	06－1区 SU51	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR7/3	2.5Y4/1	B2類	【胴部】垂下隆帯2条(隆帯間刺突列、垂下沈線1条)、垂下沈線4条	深鉢C類に伴うものか。
263	29		357－09	06－1区 SU51	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR5/2	N2/0	F2類	【胴部】沈線(曲)3条、縄文(LR)	
264	29	31	414－S	06－1区 SU51	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR7/3	7.5YR4/2	F3類	【胴部】渦巻文(または同心円文)、横走沈線7条、縄文(LR)	
265	30	31	414－U	06－1区 SU51	中期末	浅鉢 E類	口縁部	2.5Y8/2	2.5Y8/2	F2類	【口縁部】横走沈線1条	
266	30		414－P	06－1区 SU51	中期末	浅鉢 E類	口縁部	5YR6/6	10YR4/1	F2類	【口縁部】弧状沈線1条	他器種の可能性もある。
267	30		414－H	06－1区 SU51	中期末		底部(凹底)	10YR8/1	10YR8/3	F3類		
268	30		414－G	06－1区 SU51	中期末		底部(平底)	10YR6/3	10YR6/3	F3類		
269	30		414－α	06－1区 SU51	中期末		底部(平底)	10YR7/4	2.5Y6/1	F3類		
270	30		414－J	06－1区 SU51	中期末		底部(平底)	2.5Y7/3	10YR6/3	E2類		
271	31	32	469－02	06－1区 SU52	中期末	深鉢 A1類?	口縁部～胴部	2.5Y6/3	2.5Y8/2	F2類	【口端】縄文(RL) 【口縁部】区画文(区画内無文) 【胴部】沈線e字文	波状口縁

表３－12　縄文土器観察表(272～295)

番号	挿図番号	写真図版	整理番号	出土地点	時期	器種	残存部位	色調		胎土類型	文様要素	備考
								内面	外面			
272	31	32	469－01	06－1区 SU52	中期末	深鉢 A1類g	口縁部～胴部	10YR7/2	10YR5/2	F2類	【口縁部】蛇行隆帯、縄文(RL) 【胴部】蛇行沈線2条、垂下沈線1条	隆帯上に縄文
273	31	32	462－01	06－1区 SU52	中期末		胴部(ⅰ類)	5Y5/1	2.5Y5/1	F2類	【胴部】垂下沈線、連弧状沈線2条、縄文(RL?)	垂下沈線は3条1単位、下端で曲がる。 胴部区画文を描くものか?
274	31	32	462－B	06－1区 SU52	中期末		胴部(ⅰ類)	2.5Y4/1	2.5Y6/2	B2類	【胴部】区画文(垂下沈線、弧状沈線)、縄文(LR)	垂下沈線は3条1単位
275	31	32	462－02	06－1区 SU52	中期末		胴部(ⅰ類)	2.5Y6/1	2.5Y4/1	B2類	【胴部】横走沈線1条、区画文、沈線(曲)2条	
276	31	32	469－03	06－1区 SU52	中期末		胴部(ⅱ類)	2.5Y7/2	2.5Y4/1	F3類	【胴部】連弧状沈線4条	
277	31	32	462－G	06－1区 SU52	中期末	浅鉢 A2類	口縁部～底部	2.5Y6/2	2.5Y5/2	F2類	【口端】縄文(LR) 【口縁部】区画文(主文様:渦巻文、つなぎ文:二重区画文)、縄文 【胴部】垂下沈線、縄文	波状口縁。隆帯上に縄文。 垂下沈線は3条1単位。 上端を連結させる沈線束が1つある。
278	31	32	473－01	06－1区 SU52	中期末	浅鉢 B2類	口縁部～体部	7.5YR8/4	5YR7/6	F2類	【口端】小突起 【体部】区画文(区画内無文)	
279	31		473－02	06－1区 SU52	中期末		底部(凹底?)	2.5Y5/2	7.5YR5/4	F1類		
280	32		278－01	02－4区	中期末	深鉢 A1類	口縁部	10YR6/3	10YR6/3	F3類	【口縁部】区画文	主文様部が波状を呈する可能性がある。
281	32	26	280－02	02－4区	中期末	深鉢 A1類	口縁部	10YR7/2	2.5Y8/2	F3類	【口縁部】区画文(羽状沈線充填)	
282	32		280－07	02－4区	中期末	深鉢 A1類	頸部	10YR7/2	2.5Y8/2	F3類	【口縁部】区画文	
283	32		262－01	02－4区	中期末	深鉢 A6類?	口縁部	2.5Y6/2	2.5Y6/2	B3類	【口縁部】横走沈線1条、沈線(曲)1条	
284	32	26	279－02	02－4区	中期末	深鉢 C3類	口縁部	10YR5/2	10YR4/2	F2類	【口縁部】平行沈線2条	
285	32	26	280－03	02－4区	中期末	深鉢 C3類	口縁部～胴部	2.5Y8/2	10YR8/2	F3類	【口縁部】平行沈線2条	
286	32		278－05	02－4区	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR6/3	10YR6/2	F3類	【胴部】垂下沈線3条	
287	32		270－01	02－4区	中期末		胴部(ⅰ類)	2.5Y7/3	2.5Y4/1	F2類	【胴部】垂下沈線2条、縄文(原体不明)?	
288	32	26	279－01	02－4区	中期末		胴部(ⅰ類)	2.5Y7/2	2.5Y6/2	F1類	【胴部】垂下沈線2条、縄文(RL?)	
289	32	26	273－01	02－4区	中期末		胴部(ⅰ類)	2.5Y6/3	10YR5/3	F2類	【胴部】垂下沈線2条、蛇行沈線1条、縄文(LR?)	
290	32		276－01	02－4区	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR3/2	7.5YR5/4	F1類	【胴部】渦巻文、沈線(曲)2条	
291	32	26	280－01	02－4区	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR6/2	10YR4/2	F3類	【胴部】沈線(曲)3条、縄文(LR)	
292	32		278－02	02－4区	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR7/2	10YR8/2	F2類	【胴部】連弧状沈線3条	
293	32		248－01	02－4区	後期後葉		胴部(ⅲ類)	2.5Y4/1	2.5Y4/1	F2類	【胴部】凹線2条	
294	32		286－02	02－4区	中期末	浅鉢 C3類	口縁部	10YR5/2	5YR6/4	F2類	【口縁部】内面肥厚帯	
295	32		286－01	02－4区	中期末		底部(平底)	10YR4/1	2.5Y7/2	F3類		

表３－13　縄文土器観察表(296～318)

番号	挿図番号	写真図版	整理番号	出土地点	時期	器種	残存部位	色調		胎土類型	文様要素	備考
								内面	外面			
296	32		273－03	02－4区	中期末		底部(平底)	2.5Y8/3	2.5Y6/2	F2類		
297	32		279－04	02－4区	中期末		底部(平底)	10YR5/2	5YR6/8	F3類		
298	33	33	279－01	06－1区第8'層	中期末	深鉢A1類b	口縁部～胴部	2.5Y5/1	7.5YR7/6	F3類	【口縁部】渦巻区画文(刺突充填) 【胴部】垂下沈線3条	上端が屈曲する垂下沈線が1条
299	33	33	334－01	06－1区第8'層	中期末	深鉢A1類b?	口縁部	2.5Y8/2	10YR6/3	F2類	【口縁部】渦巻区画文?、隆帯上に刺突?	300と同一個体か。
300	33	33	334－02	06－1区第8'層	中期末	深鉢A1類b?	頸部(区画文部)	10YR8/2	10YR6/3	F2類	【口縁部】渦巻区画文(刺突充填)	299と同一個体か。
301	33	33	332－01	06－1区第8'層	中期末	深鉢A1類d	口縁部	2.5Y5/2	2.5Y8/2	F3類	【口縁部】渦巻文	302と同一個体の可能性あり。
302	33	33	314－01	06－1区第8'層	中期末	深鉢A1類d	口縁部	2.5Y8/2	2.5Y7/2	F3類	【口縁部】渦巻文 【胴部】沈線(曲)1条	隆帯上に縄文(RL?)、301と同一個体の可能性あり。
303	33	33	339－03	06－1区第8'層	中期末	深鉢A1類d	口縁部～胴部	10YR5/2	10YR4/2	F3類	【口縁部】渦巻文(の字状)	渦巻文を押引沈線で描く。
304	33	33	353－01	06－1区第8'層	中期末	深鉢A1類d	口縁部	10YR5/1	10YR4/2	F3類	【口縁部】渦巻文?	
305	33	33	347－01	06－1区第8'層	中期末	深鉢A1類e?	口縁部	10YR8/2	10YR8/3	F2類	【口縁部】隆帯上押圧	
306	33	33	327－01	06－1区第8'層	中期末	深鉢A1類e	口縁部～胴部	10YR6/3	10YR4/3	B1類	【口縁部】区画文(区画内無文)、縄文(LR)、隆帯上押圧 【胴部】垂下沈線、縄文	逆T字形隆帯、隆帯上に縄文、垂下沈線は3条1単位
307	33	33	325－01	06－1区第8'層	中期末	深鉢A1類e	口縁部～胴部	10YR5/3	10YR5/3	B2類	【口縁部】区画文(区画内無文)、隆帯上押圧 【胴部】垂下沈線3条	
308	33	33	194－01	06－1区第8'層	中期末	深鉢A1類	口縁部～胴部	10YR7/3	10YR7/3	F2類	【口縁部】区画文(羽状沈線充填)、縄文(LR) 【胴部】横走沈線1条、縄文	隆帯上に縄文
309	33	33	334－07	06－1区第8'層	中期末	深鉢A1類	口縁部	10YR8/2	10YR6/3	F2類	【口縁部】区画文(羽状沈線充填)	下方を隆帯のみ、上方を沈線のみで区画文をつくる。
310	33	33	295－01	06－1区第8'層	中期末	深鉢A1類	口縁部～胴部	10YR6/3	5YR5/6	F3類	【口縁部】区画文(短沈線充填) 【胴部】垂下沈線4条	
311	33	33	342－02	06－1区第8'層	中期末	深鉢A1類	口縁部～胴部	2.5Y5/1	2.5Y5/1	F2類	【口縁部】区画文(二重区画文)	
312	33	33	375－01	06－1区第8'層	中期末	深鉢A1類	口縁部～胴部	2.5Y7/2	2.5Y6/2	F3類	【口縁部】区画文(二重区画文) 【胴部】垂下沈線2条	垂下沈線を上端で連結する。
313	33	33	346－01	06－1区第8'層	中期末	深鉢A1類	頸部(区画文部)	10YR7/3	10YR6/2	F2類	【口縁部】区画文(刺突充填)(または押印沈線) 【胴部】横走沈線1条	
314	33	33	330－02	06－1区第8'層	中期末	深鉢A1類	頸部(区画文部)	10YR5/2	10YR6/3	F3類	【胴部】斜行沈線3条	
315	33	33	325－02	06－1区第8'層	中期末	深鉢A1類	頸部(区画文部)	10YR8/1	2.5Y8/1	F2類	【口縁部】区画文(渦巻文または二重区画文) 【胴部】垂下沈線3条	垂下沈線のうち2条の上端を弧状沈線で連結
316	33	33	452－01	06－1区第8'層	中期末	深鉢A1類?	口縁部	10YR5/2	10YR4/1	F1類	【口縁部】区画文	隆帯上に縄文(LR?)
317	33	37	332－07	06－1区第8'層	中期末	深鉢A1類?	頸部	10YR8/3	10YR7/3	F3類	【口縁部】区画文?	
318	33	35	332－02	06－1区第8'層	中期末	深鉢A1類?	口縁部	N4/0	N3/0	F2類	【口縁部】横走沈線1条、楕円形区画文?	

表３－14　縄文土器観察表(319～343)

番号	挿図番号	写真図版	整理番号	出土地点	時期	器種	残存部位	色調		胎土類型	文様要素	備考
								内面	外面			
319	33	35	346－03	06－1区第8'層	中期末	深鉢A1類?	口縁部	2.5Y6/2	N3/0	F2類	【口縁部】横走沈線1条、縄文(RL?)	
320	33		333－02	06－1区第8'層	中期末	深鉢A1類?	口縁部	10YR7/3	10YR6/3	F1類	【口縁部】横走沈線1条、縄文(LR)	
321	33	35	329－06	06－1区第8'層	中期末	深鉢A1類?	口縁部	2.5Y7/3	10YR4/1	F2類	【口縁部】横走沈線1条	
322	33		342－03	06－1区第8'層	中期末	深鉢A1類?	口縁部	2.5Y4/1	10YR6/3	F1類	【口縁部】横走沈線1条、沈線(曲)1条	
323	33	35	303－01	06－1区第8'層	中期末	深鉢A1類?	口縁部	2.5Y8/2	2.5Y5/1	F2類	【口縁部】横走沈線1条、沈線(曲)2条、縄文(LR)	
324	33	34	320－01	06－1区第8'層	中期末	深鉢A1類g	口縁部	10YR7/2	10YR5/2	F2類	【口縁部】蛇行隆帯	
325	33	34	314－02	06－1区第8'層	中期末	深鉢A1類g	口縁部	10YR6/2	2.5Y4/1	F3類	【口縁部】蛇行隆帯	
326	33	34	374－10	06－1区第8'層	中期末	深鉢A1類g	口縁部	10YR5/2	2.5Y6/1	F2類	【口縁部】蛇行隆帯	
327	33	34	374－01	06－1区第8'層	中期末	深鉢A1類g	口縁部～胴部	10YR6/2	10YR6/2	F2類	【口縁部】蛇行隆帯	
328	33	35	194－02	06－1区第8'層	中期末	深鉢A4類	口縁部	2.5Y5/2	2.5Y4/1	F1類	【口縁部】楕円形区画文(縄文(LR)充填)、連弧状沈線3条、縄文	
329	33	35	325－05	06－1区第8'層	中期末	深鉢A6類	口縁部	2.5Y7/2	10YR7/3	F2類	【口縁部】横走沈線1条、縄文(LR?)	ゆるい波状口縁
330	33	35	346－04	06－1区第8'層	中期末	深鉢A6類	口縁部	10YR7/3	10YR7/4	F2類	【口縁部】横走沈線1条、縄文(LR)	
331	33	35	347－02	06－1区第8'層	中期末	深鉢A6類	口縁部	10YR7/3	2.5Y4/1	F3類	【口縁部】横走沈線2条、縄文(LR)	
332	33	36	194－06	06－1区第8'層	中期末	深鉢A6類	口縁部	2.5Y8/2	7.5YR7/4	F1類	【口縁部】沈線(曲)2条、垂下沈線 1条	
333	33	35	347－05	06－1区第8'層	中期末	深鉢A6類	口縁部	2.5Y3/1	2.5Y3/1	F2類	【口縁部】沈線(曲)1条	
334	33	35	295－02	06－1区第8'層	中期末	深鉢A6類	口縁部	N2/0	10YR4/3	F1類	【口縁部】横走沈線2条	
335	34	35	329－02	06－1区第8'層	中期末	深鉢B1類	区画文部～胴部	2.5Y4/1	N3/0	F3類	【区画文部】橋状把手、区画内無文 【胴部】沈線(曲)3条	336と同一個体か。
336	34	35	330－04	06－1区第8'層	中期末	深鉢B1類	区画文部	2.5Y4/1	2.5Y4/1	F2類	【区画文部】区画内無文	335と同一個体か。
337	34	35	353－02	06－1区第8'層	中期末	深鉢A、B類	区画文部～胴部	2.5Y6/2	2.5Y6/3	F2類	【区画文部】羽状沈線充填	
338	34	35	374－04	06－1区第8'層	中期末	深鉢A、B類	区画文部	2.5Y8/1	2.5Y8/1	F2類	【区画文部】羽状沈線充填	
339	34	35	314－03	06－1区第8'層	中期末	深鉢A、B類	区画文部	2.5Y8/2	10YR8/2	F2類	【区画文部】刺突充填	
340	34	34	347－08	06－1区第8'層	中期末	深鉢A、B類	区画文部	10YR5/4	2.5Y4/1	A1類	【区画文部】刺突充填	
341	34	37	320－03	06－1区第8'層	中期末	深鉢A、B類	区画文部	2.5Y8/2	10YR7/2	F1類	【区画文部】区画内詳細不明	
342	34	35	295－03	06－1区第8'層	中期末	深鉢C2類	口縁部	10YR4/1	10YR4/1	F2類	【口端】沈線1条 【口縁部】平行沈線2条	
343	34	35	334－04	06－1区第8'層	中期末	深鉢C2類	口縁部	10YR8/2	2.5Y6/1	F2類	【口端】沈線1条 【口縁部】平行沈線2(3?)条	

表３－15　縄文土器観察表(344～368)

番号	挿図番号	写真図版	整理番号	出土地点	時期	器種	残存部位	色調		胎土類型	文様要素	備考
								内面	外面			
344	34	35	375－02	06－1区第8'層	中期末	深鉢C3類	口縁部	10YR7/4	10YR7/4	F2類	【口縁部】区画文?、垂下沈線2条、垂下隆帯1条	
345	34	35	329－01	06－1区第8'層	中期末	深鉢C3類	口縁部	10YR6/2	10YR5/2	F2類	【口端】縄文(RL) 【口縁部】平行沈線4条、縄文	
346	34	35	355－01	06－1区第8'層	中期末	深鉢C3類	口縁部	2.5Y7/1	10YR5/2	F2類	【口縁部】渦巻文、平行沈線5条	平行沈線のうちの1条は垂下沈線か。
347	34	35	381－01	06－1区第8'層	中期末	深鉢C3類	口縁部	2.5Y6/2	2.5Y5/2	F3類	【口縁部】平行沈線2条	
348	34	36	326－03	06－1区第8'層	中期末	深鉢C3類?	口縁部	10YR4/2	10YR3/1	F2類	【口縁部】平行押引沈線2条、縄文(LR)	
349	34	34	355－02	06－1区第8'層	中期末	深鉢C3類?	口縁部	2.5Y5/1	10YR5/2	B3類	【口縁部】平行沈線1条	
350	34	35	309－01	06－1区第8'層	中期末	深鉢C3類	口縁部	10YR5/2	10YR5/2	F2類	【口縁部】平行沈線2条、連弧状沈線2条、縄文(LR)	口端面取り
351	34	35	371－01	06－1区第8'層	中期末	深鉢C3類	口縁部	2.5Y6/1	2.5Y4/1	F3類	【口縁部】渦巻文、平行沈線2条、縄文(LR?)	隆帯上に縄文
352	34	35	248－01	06－1区第8'層	中期末	深鉢C3類	口縁部	10YR7/2	2.5Y7/2	F2類	【口端(内面)】縄文(LR?) 【口縁部】平行沈線2条、渦巻文	
353	34	34	310－06	06－1区第8'層	中期末	深鉢F類	口縁部～胴部	10YR6/3	10YR6/2	F3類	【口縁部】横走沈線1条	
354	35	34	331－01	06－1区第8'層	中期末		胴部(ｉ類)	10YR7/2	10YR8/3	F1類	【胴部】縄文(LR?)	
355	35	37	334－03	06－1区第8'層	中期末		胴部(ｉ類)	10YR4/2	10YR7/3	F1類	【胴部】縄文(LR)	
356	35		325－10	06－1区第8'層	中期末		胴部(ｉ類)	10YR5/3	10YR6/3	F2類	【胴部】縄文(LR)	
357	35	34	329－04	06－1区第8'層	中期末		胴部(ｉ類)	10YR5/2	10YR5/2	F2類	【胴部】縄文(LR)	
358	35	34	355－04	06－1区第8'層	中期末		胴部(ｉ類)	10YR5/2	10YR5/2	F3類	【胴部】縄文(LR?)	
359	35	34	194－03	06－1区第8'層	中期末		胴部(ｉ類)	10YR7/3	10YR5/2	F1類	【胴部】縄文(LR?)	
360	35		375－09	06－1区第8'層	中期末		胴部(ｉ類)	2.5Y8/2	2.5Y6/2	F2類	【胴部】縄文(LR)	
361	35		353－03	06－1区第8'層	中期末		胴部(ｉ類)	2.5Y6/2	10YR6/2	F2類	【胴部】縄文(LR)	
362	35	34	339－01	06－1区第8'層	中期末		胴部(ｉ類)	10YR7/3	10YR6/3	F2類	【胴部】縄文(LR)	
363	35		347－09	06－1区第8'層	中期末		胴部(ｉ類)	10YR6/3	10YR5/2	F3類	【胴部】縄文(LR?)	
364	35	34	314－08	06－1区第8'層	中期末		胴部(ｉ類)	10YR7/2	10YR6/2	F2類	【胴部】縄文(LR)	
365	35	34	330－01	06－1区第8'層	中期末		胴部(ｉ類)	2.5Y6/1	10YR5/1	F2類	【胴部】縄文(LR)	
366	35	34	374－06	06－1区第8'層	中期末		胴部(ｉ類)	10YR7/2	2.5Y6/1	F3類	【胴部】縄文(LR)	
367	35	37	325－07	06－1区第8'層	中期末		胴部(ｉ類)	10YR8/2	10YR7/2	F2類	【胴部】縄文(LR)	
368	35	37	329－07	06－1区第8'層	中期末		胴部(ｉ類)	10YR6/3	10YR5/2	F3類	【胴部】縄文(LR)	

表３－16　縄文土器観察表(369～393)

番号	挿図番号	写真図版	整理番号	出土地点	時期	器種	残存部位	色調		胎土類型	文様要素	備考
								内面	外面			
369	35	37	431－01	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR6/2	10YR6/2	F2類	【胴部】縄文(LR)	
370	35	34	314－06	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	2.5Y8/2	10YR5/1	F1類	【胴部】縄文(RL?)	
371	35		351－03	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	2.5Y5/2	10YR3/1	F2類	【胴部】縄文(LR)	
372	35		333－08	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	7.5YR7/4	7.5YR5/4	F1類	【胴部】垂下沈線1条	左側に蛇行沈線1条を伴う?
373	35		333－01	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR7/3	10YR7/3	F2類	【胴部】垂下沈線1条	
374	35	36	375－06	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	2.5Y7/2	N3/0	F2類	【胴部】垂下沈線1(2?)条	
375	35		329－05	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR5/2	10YR4/2	F2類	【胴部】垂下沈線1条	沈線下端部になる可能性がある。
376	35		178－01	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR5/4	10YR4/2	A1類	【胴部】垂下沈線2条	垂下沈線は2条1単位
377	35		353－07	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR3/2	10YR6/3	F2類	【胴部】垂下沈線2条	垂下沈線は2条1単位
378	35	36	334－06	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	2.5Y5/2	2.5Y7/2	F2類	【胴部】垂下沈線2条	胴部区画文をつくる可能性もある。 縄文を伴う可能性もある。
379	35		245－01	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR8/2	10YR5/2	F1類	【胴部】垂下沈線2条	
380	35		320－02	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	2.5Y5/1	2.5Y5/2	B2類	【胴部】垂下沈線2条	
381	35	36	322－01	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	2.5Y8/2	2.5Y6/1	F2類	【胴部】垂下沈線2条	縄文を伴う可能性もある。
382	35		333－04	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR7/3	2.5Y5/3	F1類	【胴部】垂下沈線3条	垂下沈線は3条1単位
383	35	36	342－01	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR7/3	10YR7/3	F3類	【胴部】垂下沈線3条	垂下沈線は3条1単位
384	35		315－02	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR5/2	10YR7/3	F2類	【胴部】垂下沈線3条	
385	35	36	308－01	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR7/4	10YR7/4	F2類	【胴部】垂下沈線4条	
386	35	36	333－06	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR7/3	10YR6/3	F2類	【胴部】蛇行沈線1条	
387	35		374－07	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR8/2	10YR5/3	F2類	【胴部】蛇行沈線1条	曲線的な文様を描く可能性もある。
388	35	36	306－01	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR7/3	10YR5/2	F2類	【胴部】蛇行沈線1条、垂下沈線2条	
389	35		332－04	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR8/3	10YR6/2	F1類	【胴部】垂下沈線1条、縄文(原体不明)	
390	35		332－03	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	5YR5/6	N3/0	F1類	【胴部】垂下沈線1条、縄文(LR)	
391	35		334－09	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR6/3	10YR5/2	F1類	【胴部】垂下沈線1条、縄文(LR?)	
392	35		370－02	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	7.5YR5/4	7.5YR4/3	F2類	【胴部】垂下沈線1条、縄文(LR?)	
393	35		308－02	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	2.5Y8/2	2.5Y8/2	F3類	【胴部】垂下沈線1条、縄文(RL)	

表３－17　縄文土器観察表(394～418)

番号	挿図番号	写真図版	整理番号	出土地点	時期	器種	残存部位	色調		胎土類型	文様要素	備考
								内面	外面			
394	35	34	374－09	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	2.5Y8/2	2.5Y6/1	F3類	【胴部】垂下沈線1条、縄文(LR)	
395	35	36	314－04	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR8/2	10YR6/2	F2類	【胴部】垂下沈線1条、縄文(LR)	沈線を伴わない縄文帯も存在?
396	35	36	375－04	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	2.5Y8/1	2.5Y8/1	F1類	【胴部】垂下沈線2条、縄文(LR?)	
397	35		329－09	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR7/3	10YR7/3	F2類	【胴部】垂下沈線2条、縄文(LR)	
398	35	36	346－05	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR6/3	10YR5/2	F2類	【胴部】垂下沈線2条、縄文(LR)	
399	35	36	374－02	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	2.5Y8/2	2.5Y8/1	F3類	【胴部】垂下沈線2条、縄文(LR)	
400	35		333－07	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅰ類)	2.5Y4/1	10YR4/2	F1類	【胴部】垂下沈線3条、縄文(LR?)	
401	36	36	381－02	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR3/1	10YR5/2	F2類	【胴部】沈線(曲)1条、刺突	隆帯が存在?頸部直下の可能性がある。
402	36	36	343－01	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR6/3	10YR5/2	F2類	【胴部】沈線(曲)3条	縄文を伴う可能性もある。
403	36		310－05	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅱ類)	2.5Y5/2	2.5YR4/6	F1類	【胴部】沈線(曲)2条	
404	36	36	333－10	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR8/3	10YR6/3	F3類	【胴部】沈線(曲)1条	蛇行沈線の可能性もある。
405	36		310－02	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR5/2	10YR5/2	F2類	【胴部】沈線(曲)1条	蛇行沈線の可能性もある。
406	36		375－05	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR7/3	10YR6/3	F2類	【胴部】沈線(曲)1条	
407	36	36	369－01	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅱ類)	2.5Y6/2	10YR6/3	F1類	【胴部】平行沈線1条、沈線(曲)2条	深鉢C類に伴う可能性がある。
408	36	36	326－02	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR5/2	10YR5/1	F2類	【胴部】沈線3(曲)条、縄文(LR)	深鉢C類に伴う可能性がある。
409	36	36	352－01	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅱ類)	2.5Y8/2	10YR8/4	F2類	【胴部】平行沈線3条	深鉢C類に伴う可能性がある。
410	36		326－01	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅱ類)	N3/0	N4/0	F3類	【胴部】平行沈線4条、縄文(LR)	深鉢C類に伴う可能性がある。
411	36	36	374－03	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR4/1	2.5Y4/1	F2類	【胴部】平行沈線3条、垂下沈線3条、横走沈線1条	深鉢C類に伴う可能性がある。
412	36	36	314－05	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅱ類)	2.5Y6/2	2.5Y5/2	B2類	【胴部】渦巻文、沈線(曲)3条	
413	36	36	315－01	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR5/2	10YR5/2	F2類	【胴部】弧状沈線2条、渦巻文、垂下沈線1(2?)条、横走沈線1条	垂下沈線の上端が渦巻文をつくる。胴部区画文をつくる可能性がある。施文により、内面に凹凸が生じている。
414	36		382－02	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅱ類)	2.5Y5/1	2.5Y5/2	F2類	【胴部】連弧状沈線1条、縄文(LR?)	
415	36		297－04	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅱ類)	7.5YR6/6	5YR5/6	F2類	【胴部】連弧状沈線?1条	
416	36	36	346－02	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR4/1	10YR6/3	F2類	【胴部】連弧状沈線2条	
417	36	36	368－01	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR3/2	10YR4/3	F3類	【胴部】連弧状沈線2条	
418	36		320－04	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅱ類)	2.5Y6/2	2.5Y7/2	F2類	【胴部】連弧状沈線3?条	横走沈線の可能性もある。

表３－18　縄文土器観察表(419～443)

番号	挿図番号	写真図版	整理番号	出土地点	時期	器種	残存部位	色調		胎土類型	文様要素	備考
								内面	外面			
419	36	36	310－01	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR6/3	10YR4/1	F2類	【胴部】連弧状沈線2条、胴部区画文	胴部ⅰ類とすべきか。
420	36	36	333－03	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR4/2	10YR5/2	F1類	【胴部】連弧状沈線2条、横走沈線4条、縄文(LR)	
421	36		383－02	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR5/1	2.5Y8/2	F2類	【胴部】連弧状沈線5条	
422	36	36	306－03	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅲ類)	10YR5/3	10YR5/4	AB3類	【胴部】渦巻文?、垂下沈線3条?	
423	36	36	346－06	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅲ類)	10YR7/3	10YR6/3	F2類	【胴部】横走沈線5条、縄文(LR)	壺の可能性がある。
424	36		331－03	06－1区第8'層	中期末		胴部(ⅲ類)	10YR6/3	10YR6/2	F2類	【胴部】擦痕	
425	36	37	374－05	06－1区第8'層	後期中葉		胴部(ⅲ類)	2.5Y8/2	10YR7/2	F2類	【胴部】横走沈線2条、斜行沈線2条、縄文(LR)、蛇行沈線1条	
426	36	37	353－05	06－1区第8'層	中期末	浅鉢A1類	口縁部	10YR8/3	10YR5/2	F2類	【口縁部】多条沈線	
427	36	37	383－01	06－1区第8'層	中期末	浅鉢A1類	口縁部	10YR7/3	10YR5/3	E2類	【口縁部】多条沈線	ゆるい波状口縁
428	36	37	351－01	06－1区第8'層	中期末	浅鉢A4類	口縁部	10YR8/2	10YR8/1	F2類	【口縁部】垂下隆帯、垂下沈線1条	
429	36	37	325－04	06－1区第8'層	中期末	浅鉢B2類	口縁部	10YR8/2	10YR8/2	F2類	【胴部】凸帯状肥厚	
430	36	37	308－03	06－1区第8'層	中期末	浅鉢B3類	口縁部	2.5Y8/1	2.5Y8/1	F2類		
431	36	37	382－01	06－1区第8'層	中期末	浅鉢B3類	口縁部	10YR7/2	10YR7/1	F1類		
432	36		354－01	06－1区第8'層	中期末	浅鉢A、B類	屈曲部	2.5Y5/3	2.5Y5/2	A3類	【口縁部】縄文(LR?)	
433	36	37	334－05	06－1区第8'層	中期末	浅鉢C3類	口縁部	2.5Y5/1	10YR6/3	F2類	【口縁部】内面肥厚帯	
434	36	37	370－01	06－1区第8'層	中期末	浅鉢C3類	口縁部	7.5YR7/4	10YR6/3	E2類	【口縁部】内面肥厚帯	
435	36	37	297－02	06－1区第8'層	中期末	浅鉢C3類	口縁部	7.5YR7/4	5YR6/4	B2類	【口縁部】内面肥厚帯	
436	36	37	310－03	06－1区第8'層	中期末	浅鉢C3類	口縁部	2.5Y7/2	10YR6/2	F2類	【口縁部】内面肥厚帯	
437	36	37	304－01	06－1区第8'層	中期末	浅鉢D類	口縁部	2.5Y8/2	2.5Y8/2	F2類		
438	36	37	334－08	06－1区第8'層	中期末	浅鉢E類	口縁部	10YR8/3	10YR8/3	E2類	【口縁部】横走沈線2条	
439	36	37	371－02	06－1区第8'層	中期末	浅鉢E類	口縁部	10YR6/3	7.5YR6/3	A3類	【口縁部】平行沈線1条	波状口縁
440	36	37	374－08	06－1区第8'層	中期末	浅鉢E類	口縁部	5YR7/6	5YR7/4	F1類		
441	36	37	378－01	06－1区第8'層	中期末			10YR7/3	10YR6/3	F1類	粘土貼り付け	
442	37		351－02	06－1区第8'層	中期末		底部(平底)	2.5Y8/2	2.5Y8/2	F3類		
443	37		249－02	06－1区第8'層	中期末		底部(平底)	10YR3/1	5YR7/4	F2類		

表３－19　縄文土器観察表(444～468)

番号	挿図番号	写真図版	整理番号	出土地点	時期	器種	残存部位	色調		胎土類型	文様要素	備考
								内面	外面			
444	37		329－03	06－1区第8'層	中期末		底部(平底)	10YR7/2	10YR7/3	F3類		
445	37		355－03	06－1区第8'層	中期末		底部(平底)	10YR8/2	2.5Y8/1	F3類		
446	37		330－04	06－1区第8'層	中期末		底部(平底)	N5/0	10YR7/3	F2類		
447	37		314－07	06－1区第8'層	中期末		底部(平底)	2.5Y8/2	2.5Y8/2	F3類		
448	37		381－03	06－1区第8'層	中期末		底部(平底)	10YR4/2	10YR4/2	F1類		
449	37		374－11	06－1区第8'層	中期末		底部(平底)	7.5YR6/4	7.5YR6/4	F2類		
450	37		332－05	06－1区第8'層	中期末		底部(平底)	10YR7/4	10YR6/3	F2類		
451	37		310－04	06－1区第8'層	中期末		底部(平底)	2.5Y6/2	2.5Y5/1	F3類		
452	37		337－01	06－1区第8'層	中期末		底部(平底)	10YR5/3	7.5YR4/3	AB3類		
453	37		194－08	06－1区第8'層	中期末		底部(平底)	10YR4/1	10YR6/2	F1類		
454	37		383－03	06－1区第8'層	中期末		底部(平底)	10YR6/3	10YR6/3	F2類		
455	37		334－10	06－1区第8'層	中期末		底部(平底)	10YR5/2	2.5Y8/2	F1類		
456	37		375－03	06－1区第8'層	中期末		底部(平底)	10YR7/3	10YR6/3	F2類		
457	37		295－05	06－1区第8'層	中期末		底部(平底)	7.5YR4/6	5YR5/6	F1類		
458	37		325－06	06－1区第8'層	中期末		底部(平底)	10YR5/2	10YR5/2	F3類		
459	37		295－04	06－1区第8'層	中期末		底部(平底)	2.5YR4/6	5YR5/4	B3類		
460	37		374－12	06－1区第8'層	中期末		底部(平底)	10YR7/3	10YR7/3	F2類		
461	37		383－04	06－1区第8'層	中期末		底部(平底)	2.5Y7/4	7.5YR7/4	F2類		
462	37		339－02	06－1区第8'層	中期末		底部(平底)	2.5Y5/2	10YR7/3	F2類		
463	37		194－07	06－1区第8'層	中期末		底部(平底)	10YR5/2	10YR6/2	F2類		
464	38	38	401－01	06－1区第9層	中期末	深鉢A1類e	口縁部～胴部	7.5YR6/6	5YR6/6	F2類	【口端】縄文(LR?) 【口縁部】区画文(羽状沈線充填)、縄文 【胴部】垂下沈線1条、縄文	逆T字形隆帯、隆帯上に縄文、468と同一個体か。
465	38	38	407－06	06－1区第9層	中期末	深鉢A1類	口縁部	2.5Y5/1	2.5Y5/1	F2類	【口縁部】区画文(区画内詳細不明)	
466	38	38	407－02	06－1区第9層	中期末	深鉢A1類	口縁部	10YR8/2	10YR8/2	E3類	【口縁部】区画文(区画内無文?)	
467	38	38	408－01	06－1区第9層	中期末	深鉢A1類	口縁部	10YR6/3	N3/0	F2類	【口縁部】区画文(横走沈線2条充填)	逆T字形隆帯
468	38	38	403－03	06－1区第9層	中期末	深鉢A1類	口縁部	7.5YR6/4	10YR5/2	F2類	【口端】縄文(LR) 【口縁部】区画文(羽状沈線充填)	464と同一個体か。

表３－20　縄文土器観察表(469～492)

番号	挿図番号	写真図版	整理番号	出土地点	時期	器種	残存部位	色調		胎土類型	文様要素	備考
								内面	外面			
469	38	38	403－02	06－1区第9層	中期末	深鉢A1類	口縁部～胴部	7.5YR6/3	10YR6/3	F3類	【口縁部】区画文(羽状沈線充填)	
470	38	38	403－01	06－1区第9層	中期末	深鉢A1類	口縁部～胴部	7.5YR6/4	7.5YR5/4	F2類	【口縁部】区画文(羽状沈線充填)	隆帯上に縄文(LR)
471	38	38	376－01	06－1区第9層	中期末	深鉢A1類	口縁部～胴部	2.5Y5/3	10YR5/2	F3類	【口縁部】区画文(二重区画文?)【胴部】垂下沈線3条	
472	38	38	408－09	06－1区第9層	中期末	深鉢A1類	頸部	10YR7/3	10YR5/2	F2類	【口縁部】区画文(縄文(LR)充填)【胴部】垂下沈線1条	隆帯上に縄文
473	38	38	335－01	06－1区第9層	中期末	深鉢A1類	頸部	10YR7/2	2.5Y7/1	F1類	【口縁部】区画文?、斜行沈線1条【胴部】垂下沈線2条、縄文(LR)	区画文を隆帯のみでつくる?
474	38	38	423－02	06－1区第9層	中期末	深鉢A6類	口縁部	7.5YR8/6	10YR8/3	F2類	【口縁部】沈線(曲)2条	
475	38	38	404－01	06－1区第9層	中期末	深鉢A6類	口縁部～胴部	10YR6/3	10YR6/3	F3類	【口縁部】沈線(曲)2条、縄文(LR)【胴部】斜行沈線2条、縄文	ゆるい波状口縁。中津式直前の段階か。
476	38		335－04	06－1区第9層	中期末	深鉢A、B類	区画文部?	N2/0	N2/0	F1類		
477	38		422－05	06－1区第9層	中期末	深鉢A、B類	区画文部?	2.5Y4/1	10YR7/3	F2類		
478	38	39	415－02	06－1区第9層	中期末	深鉢C2類	口縁部	N2/0	N3/0	F3類	【口端】沈線1条【口縁部】平行沈線1条、弧状沈線4条	
479	38	38	406－04	06－1区第9層	中期末	深鉢C2類	口縁部	10YR6/3	10YR6/2	F2類	【口端】沈線1条【口縁部】平行沈線1条	
480	38	38	406－06	06－1区第9層	中期末	深鉢C3類	口縁部	10YR7/2	10YR6/2	F2類	【口縁部】平行沈線1条	
481	38	38	335－03	06－1区第9層	中期末	深鉢C3類	口縁部	10YR8/2	10YR7/3	F2類	【口端】縄文?【口縁部】平行沈線3条	浅鉢A1類の可能性あり。
482	38	38	335－02	06－1区第9層	中期末	深鉢C3類	口縁部	7.5YR7/3	5YR6/4	E2類	【口縁部】平行沈線3条	
483	38	38	403－04	06－1区第9層	中期末	深鉢C3類	口縁部	10YR5/2	10YR5/2	F3類	【口縁部】平行沈線3条	
484	38	38	416－03	06－1区第9層	中期末	深鉢C3類	口縁部	5Y5/1	5Y5/1	F2類	【口縁部】平行沈線2条、押圧、楕円形区画文	524と同一個体の可能性もある。
485	38	38	417－09	06－1区第9層	中期末	深鉢D1類	口縁部～胴部	2.5Y5/1	10YR6/2	F3類	【口縁部～胴部】縄文(LR)	
486	38	38	415－01	06－1区第9層	中期末	深鉢F類	口縁部	2.5Y6/1	10YR3/1	B2類		
487	38		408－07	06－1区第9層	中期末		胴部(ｉ類)	2.5Y6/1	10YR7/2	F2類	【胴部】縄文(RL)	
488	38		420－03	06－1区第9層	中期末		胴部(ｉ類)	7.5YR6/3	10YR4/2	F2類	【胴部】縄文(RL)	縄文帯にはならない可能性もある。
489	38		403－07	06－1区第9層	中期末		胴部(ｉ類)	10YR8/3	10YR6/3	F3類	【胴部】縄文(RL?)	
490	38		417－02	06－1区第9層	中期末		胴部(ｉ類)	10YR5/1	10YR4/2	F2類	【胴部】縄文(RL)	
491	38		432－02	06－1区第9層	中期末		胴部(ｉ類)	10YR7/3	N3/0	F1類	【胴部】縄文(LR?)	
492	38		434－02	06－1区第9層	中期末		胴部(ｉ類)	10YR7/4	10YR4/1	F2類	【胴部】縄文(LR?)	

表３－21　縄文土器観察表(493～518)

番号	挿図番号	写真図版	整理番号	出土地点	時期	器種	残存部位	色調		胎土類型	文様要素	備考
								内面	外面			
493	38		417－03	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR5/2	10YR5/2	F2類	【胴部】縄文(LR?)	縄文原体が当たった痕跡?もみられる。
494	38		387－01	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR5/1	10YR7/2	F2類	【胴部】縄文(LR?)	
495	38		408－08	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅰ類)	7.5YR6/3	10YR5/2	E2類	【胴部】縄文(LR)	
496	38	39	417－07	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅰ類)	N4/0	2.5Y7/2	F3類	【胴部】縄文(LR)	
497	38		417－13	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR7/2	N3/0	F2類	【胴部】縄文(LR)	
498	38	39	416－04	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR3/1	10YR3/2	F3類	【胴部】縄文(LR)	
499	38		422－02	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅰ類)	2.5Y7/3	N2/0	F1類	【胴部】縄文(LR)	横方向にも縄文帯
500	38		416－11	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR7/3	7.5YR4/2	F1類	【胴部】縄文(LR)	横方向にも縄文帯
501	39		408－06	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR6/3	10YR4/1	F2類	【胴部】垂下沈線2条	
502	39	39	407－03	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR7/3	10YR7/2	F2類	【胴部】垂下沈線2条	
503	39		407－01	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR6/3	7.5YR7/4	E3類	【胴部】垂下沈線2条	縄文を施した可能性もある。
504	39	39	250－01	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅰ類)	2.5Y7/2	N2/0	F3類	【胴部】垂下沈線2条	沈線が上方で屈曲
505	39	38	417－12	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅰ類)	2.5Y5/1	2.5Y6/1	F2類	【胴部】垂下沈線3?条	深鉢C類口縁部の可能性もあり。
506	39	39	403－05	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR7/3	7.5YR5/3	F1類	【胴部】垂下沈線3条	
507	39		417－05	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅰ類)	2.5Y5/1	10YR4/2	F3類	【胴部】蛇行沈線1条	
508	39	39	404－02	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅰ類)	5YR6/6	7.5YR5/2	F2類	【胴部】垂下沈線2条、縄文(LR)	
509	39		434－01	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR8/2	10YR3/2	E2類	【胴部】垂下沈線2条、縄文(LR?)	
510	39	39	408－04	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅰ類)	2.5Y5/1	2.5Y5/2	B2類	【胴部】垂下沈線2条、縄文(LR?)	
511	39	39	408－02	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR5/2	N3/0	B3類	【胴部】垂下沈線1条、縄文(LR)	
512	39	39	403－13	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅱ類)	7.5YR7/3	7.5YR4/2	F2類	【胴部】沈線(曲)2条、縄文(LR?)	
513	39	39	433－01	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR6/3	10YR3/2	F2類	【胴部】沈線(曲)3条、縄文(LR?)	中津式的
514	39	39	406－01	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅱ類)	7.5YR7/6	10YR7/3	F1類	【胴部】沈線(曲)1条、縄文(LR)	
515	39	39	422－01	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅱ類)	5YR6/6	10YR8/2	F2類	【胴部】沈線(曲)3条	深鉢C類に伴う可能性あり。
516	39	39	416－02	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR6/3	10YR5/2	F2類	【胴部】渦巻文、平行沈線?1条、沈線(曲)1条	深鉢C類に伴う可能性あり。
517	39		406－05	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅱ類)	7.5YR7/4	7.5YR7/4	F2類	【胴部】連弧状沈線1条?	
518	39		403－14	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅱ類)	7.5YR6/4	10YR5/3	F1類	【胴部】連弧状沈線2条	

表３－22　縄文土器観察表(519～548)

番号	挿図番号	写真図版	整理番号	出土地点	時期	器種	残存部位	色調		胎土類型	文様要素	備考
								内面	外面			
519	39	39	436－03	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR7/3	2.5Y8/2	F2類	【胴部】連弧状沈線2条?	
520	39	39	403－11	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅱ類)	5YR6/6	10YR6/3	F2類	【胴部】連弧状沈線3条	
521	39	39	421－01	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR8/2	2.5Y8/2	F3類	【胴部】連弧状沈線4条	
522	39	39	415－04	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR5/2	10YR7/2	F2類	【胴部】連弧状沈線5条	
523	39	39	423－01	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR7/3	10YR4/2	F2類	【胴部】連弧状沈線6条	
524	39	39	417－04	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅲ類)	2.5Y5/1	2.5Y5/1	F2類	【胴部】横走沈線1条、刺突	484と同一個体の可能性がある。
525	39		397－01	06－1区第9層	中期末		胴部(ⅲ類)	5YR5/4	10YR5/4	F1類	【胴部】横走沈線2条、縄文(原体不明)	
526	39	39	416－01	06－1区第9層	中期末	浅鉢A類	口縁部～体部	10YR4/2	10YR3/1	F2類	【口縁部】沈線(曲)2条、縄文(RL)	
527	39	39	406－03	06－1区第9層	中期末	浅鉢B3類	口縁部	10YR5/4	2.5Y5/2	A3類		
528	39	39	420－02	06－1区第9層	中期末	浅鉢B3類	口縁部	10YR5/3	10YR6/3	F3類		
529	39		430－01	06－1区第9層	中期末		底部(平底)	2.5Y6/2	10YR6/2	F3類		
530	39		416－06	06－1区第9層	中期末		底部(平底)	2.5Y6/1	2.5Y8/2	F2類		
531	39		432－01	06－1区第9層	中期末		底部(平底)	2.5Y8/2	10YR6/2	F2類		
532	39		316－01	06－1区第9層	中期末		底部(平底)	2.5Y4/1	10YR5/2	F3類		
533	39		416－10	06－1区第9層	中期末		底部(平底)	2.5Y7/2	10YR7/4	F2類		
534	39		399－01	06－1区第9層	中期末		底部(平底)	10YR4/3	7.5YR4/4	A3類		
535	39		436－02	06－1区第9層	中期末		底部(平底)	2.5Y7/2	2.5Y8/2	F2類		
536	39		420－01	06－1区第9層	中期末		底部(平底)	10YR5/2	10YR7/4	F3類		
537	39		435－01	06－1区第9層	中期末		底部(平底)	7.5YR5/3	10YR7/3	E2類		
538	39		417－01	06－1区第9層	中期末		底部(平底)	N5/0	2.5Y8/2	F2類		
539	40	30	165－02	06－1区第8'or9層	中期末	深鉢A1類	頸部	2.5Y8/2	2.5Y8/2	F2類	【口縁部】区画文(羽状沈線充填?)【胴部】垂下沈線?	
540	40	30	172－01	06－1区攪乱	中期末	深鉢A1類	頸部	2.5Y6/2	2.5Y7/3	F2類	【口縁部】ノ字状隆帯	
541	40	30	170－01	06－1区第8'or9層	中期末	深鉢A6類	口縁部	2.5Y8/3	2.5Y8/2	F2類	【口端】縄文(LR)【口縁部】横走沈線1条、縄文	
542	40		377－01	06－1区廃土	中期末		胴部(ⅰ類)	2.5Y6/2	10YR6/2	B3類	【胴部】縄文(LR)	
543	40	30	165－03	06－1区第8'or9層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR6/2	10YR6/2	F3類	【胴部】縄文(LR)	

表３－23　縄文土器観察表(544～547)

番号	挿図番号	写真図版	整理番号	出土地点	時期	器種	残存部位	色調 内面	色調 外面	胎土類型	文様要素	備考
544	40		502－01	出土地点不明	中期末		胴部（ⅰ類）	2.5Y6/1	2.5Y8/1	F2類	【胴部】垂下沈線1条、縄文(LR)	
545	40	30	165－01	06－1区第8'or9層	中期末		胴部（ⅰ類）	10YR5/2	10YR4/2	F1類	【胴部】垂下沈線2条、縄文(LR)	
546	40	30	377－02	06－1区廃土	中期末?		胴部（ⅲ類）	2.5Y8/2	2.5Y8/2	F2類	【胴部】横走沈線2条、斜行沈線1条	中期末以外の可能性もある。
547	40		097－01	攪乱	中期末		底部（平底）	5YR6/6	2.5Y6/2	F2類		

※胎土類型について

胎土類型は、土器に含まれている岩石・鉱物の種類とその大きさに基づいて設定した。以下の表で示すように、種類についてＡ～Ｆ類、大きさについて０～３類と分類を設け、この２つの分類を組み合わせたものを胎土類型としている。

例えば、Ａ2類とは、角閃石を一定量含み、2.0㎜以上の砂粒も一定量含まれているものを表す。ただし、この際、必ずしも角閃石が2.0㎜以上の大きさであるとは限らない。角閃石の大きさが1.0㎜前後であっても、その他無色鉱物などに、2.0㎜以上の大きさがあれば、A2類となっている。

尚、胎土を観察する際には、倍率20倍のルーペを使用した。色調は農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修の新版標準土色帖による。

砂粒の種類による分類

分類	特徴
Ａ類	角閃石を一定量含む土器。雲母は含まない。
AB類	角閃石および0.5㎜以上の雲母をともに一定量含む土器。
Ｂ類	0.5㎜以上の雲母を一定量含む土器。角閃石は含まない。
Ｃ類	赤色チャートを一定量含む土器。
Ｅ類	クサリ礫を一定量含む土器。
Ｆ類	以上に挙げたような特徴的な鉱物が含まれていない土器を一括。

※一定量とは、観察した土器片中にその岩石・鉱物が不偏的に含有されており、少なくとも２㎠中に１粒はその存在が認められる量を指す。

砂粒の大きさによる分類

分類	特徴
３類	3.0㎜以上の砂粒を一定量有する土器。
２類	2.0～3.0㎜以上の砂粒を一定量有する土器。3.0㎜以上の粒はほとんど含まれていない。
１類	1.0～2.0㎜の砂粒を一定量有する土器。2.0㎜以上の粒はほとんど含まれていない。
０類	1.0㎜未満の砂粒で構成されている、及び肉眼では砂粒を確認できない土器。

【参考文献】

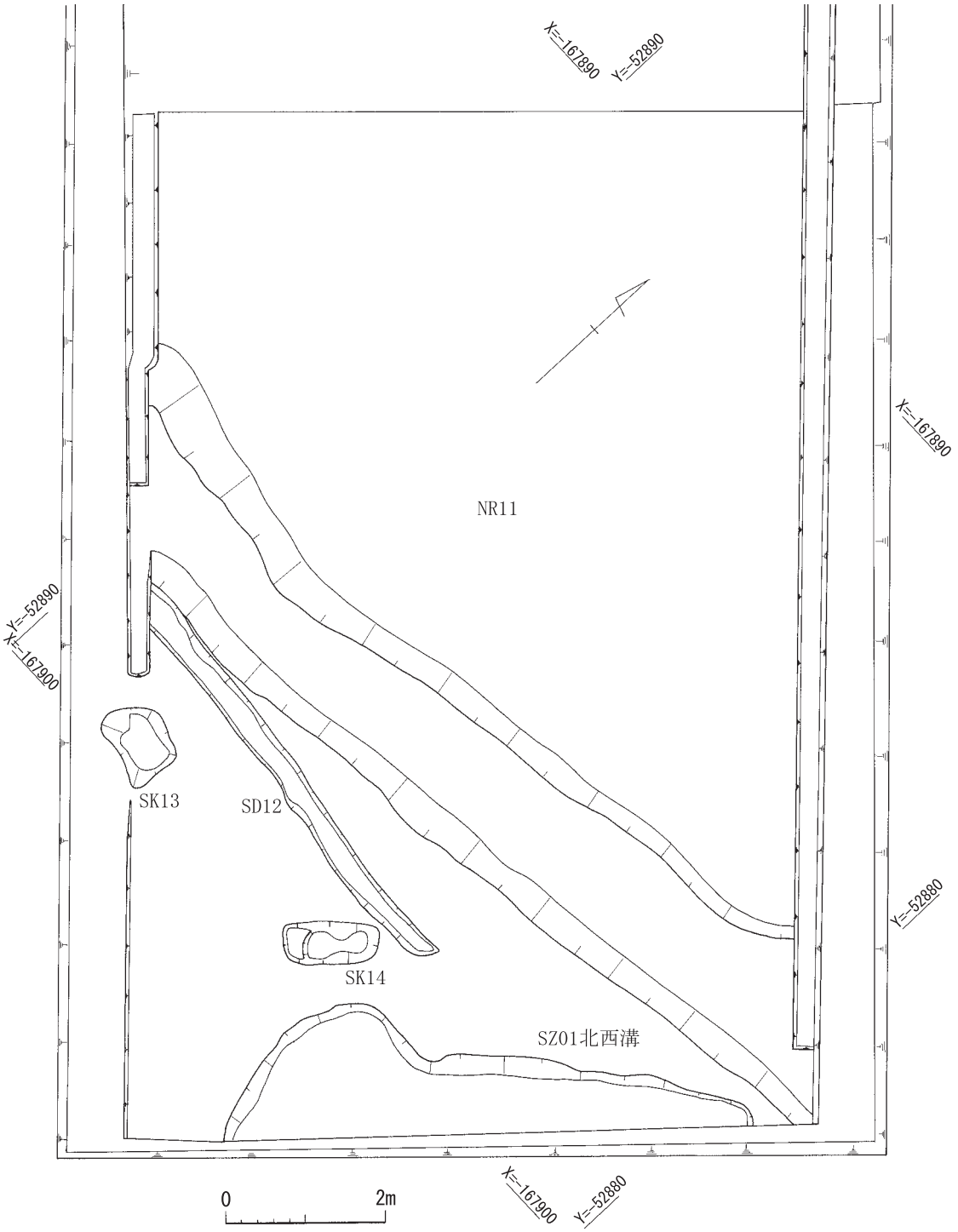
泉　拓良　1985「中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』
京都大学埋蔵文化財研究センター

第３節　弥生時代前期の遺構

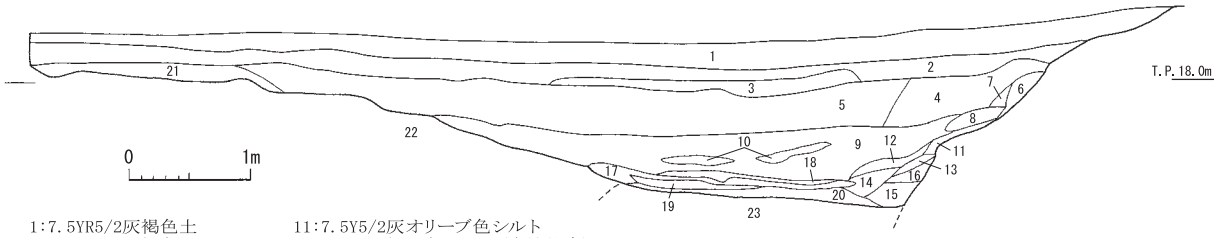
今回の調査では02020－３区で縄文時代晩期の遺構は確認されているが、これに続く弥生時代前期の土器は出土していない。しかし、出土木材の炭素14年代測定や他の遺構との相対関係から、弥生時代前期と考えられる河道を検出した。

NR11（第41、42図）

03017－７区で河川の左岸肩を確認した川で、幅が広く２区～６区はすべて河道内の中に入っ



第41図　03017－７区　遺構平面図



1:7.5YR5/2灰褐色土
2:7.5YR4/2灰褐色土
3:7.5YR4/1褐灰色土
4:10YR5/3にぶい黄褐色土
(5よりも多く遺物を含む)
5:10YR6/3にぶい黄橙色土
6:10YR6/4にぶい黄橙色土
7:10YR5/2灰黄褐色土
8:10YR5/5褐灰色土
9:5Y5/2灰オリーブ色シルト
10:7.5Y6/2灰オリーブ色砂礫
11:7.5Y5/2灰オリーブ色シルト
12:10YR5/1褐灰色シルト(有機物含)
13:10YR6/1褐灰色シルト
14:10YR4/1褐灰色粘土
15:2.5Y5/1黄灰色砂混じりシルト
16:2.5Y5/2暗灰黄色シルト
17:10YR4/2灰黄褐色粘土(シルト混じり、有機物含有)
18:2.5Y6/3にぶい黄色砂質土
19:5Y6/2灰オリーブ色砂質土
20:7.5Y5/3灰オリーブ色粗砂
21:5Y6/3オリーブ黄色シルト
22:5Y5/1灰色砂礫(5cm程度の礫多く含む)
23:7.5Y6/3オリーブ黄色砂礫(22より歴が少なく小さい)

第42図　03017－７区　NR11土層断面図

ていた。次回報告になるが、08年度調査で左岸肩を確認し、河道は西から北に大きく弧を描く様に湾曲し、１区で再び左岸肩が現れることがわかった。この河川はさらに02020－２区でも左岸肩が確認されており、北から北西に緩く蛇行していることがわかった。

河道の深さや堆積土は場所によって異なっているが、ここでは03017－７区の断面図を掲げておく。表土、耕作土を除去すると１の灰色～灰褐色粘質土であるが、この層の上面で現条里地割りに対応する杭列が観察される。

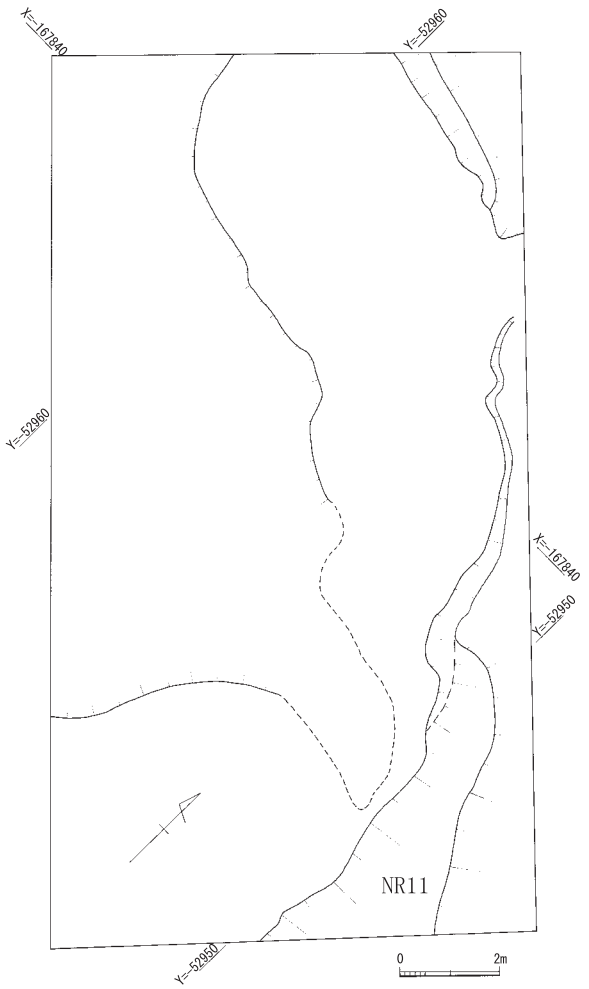
この灰褐色土は0.1 ～ 0.2mの厚さで、土師器や須恵器の小片を含んでいる。地山と同じ高さまで堆積が進む前に流路が変わり、北方向に緩く傾斜していたと考えている。

この下は、灰褐色土、にぶい黄褐色土、にぶい黄橙色土となっているが、肩口に近い層では縄文時代晩期の土器片が出土している。器表面の摩耗は少ないが細片ばかりである。上層は砂礫の含有が少ないので、流路が変わり湿地に近い環境下で堆積したものか。下層はシルトや砂礫層のブロックで、比較的緩やかな流れの下で堆積したのであろう。

22、23は砂礫層で西北に盛り上がっていた。

この砂礫層は地山の灰黄色土の下に延びており、縄文時代中期以前に段丘面を流れていた河川の堆積物と考えられる。

02020－２区では南東側から北西側に緩く湾曲しており、調査区内では肩部しか検出できなかったが、褐灰色土の堆積が確認されている。



第43図　02020－２区　弥生時代前期の遺構(河川)平面図

第４節　弥生時代

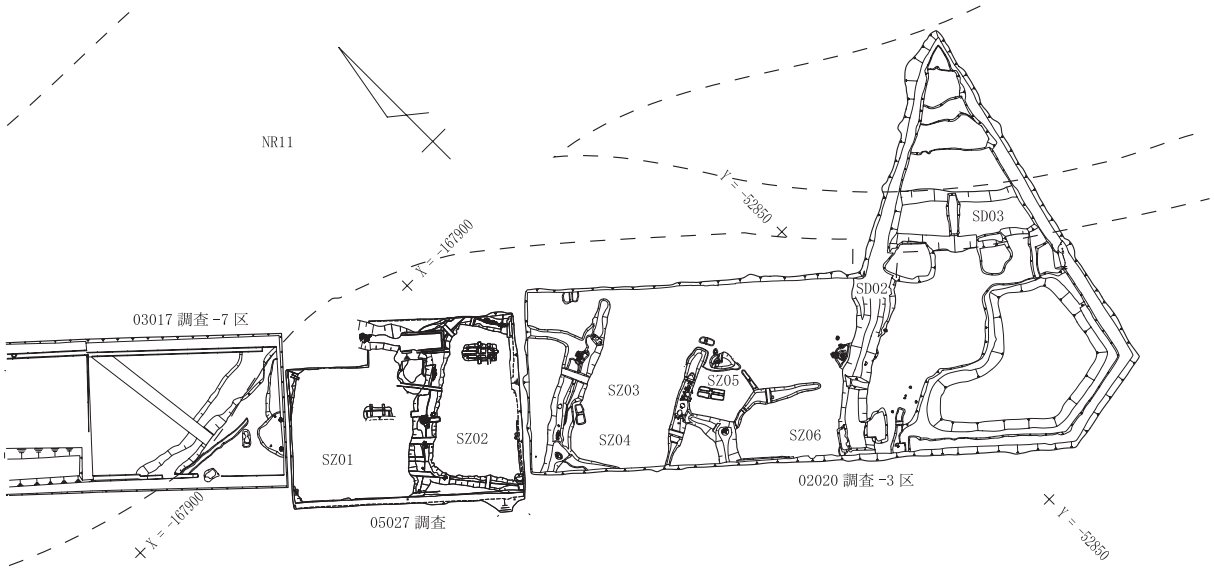
調査区中央で１条の川が検出され、東南端で大規模な溝と方形周溝墓、西北端で小規模な溝を検出した。方形周溝墓は、確実なものが３基、可能性のあるものが３基、合計６基を認定し、確実なものから番号をつけた。遺構検出面の高さは、東南部でT.P.+18.7m、西北部でT.P.+17.3mを測る。方形周溝墓は調査範囲の東南部で検出したため、検出面の高さはT.P.+18.6 ～ 18.7mである。

NR11は東南から調査区に流れ込み、緩やかに蛇行しながら西北方向へ流れる川である。今回報告範囲の大半をしめている。検出川幅は10mを測り、実際には15～20mを超えると考えられる。調査範囲の東北から方形周溝墓群の北側を通って西へ流れ、北方向へ蛇行し、02020－１区から北方向に伸び調査区外に出て行く。埋土中から弥生土器、最上層からは土師器片が出土した。

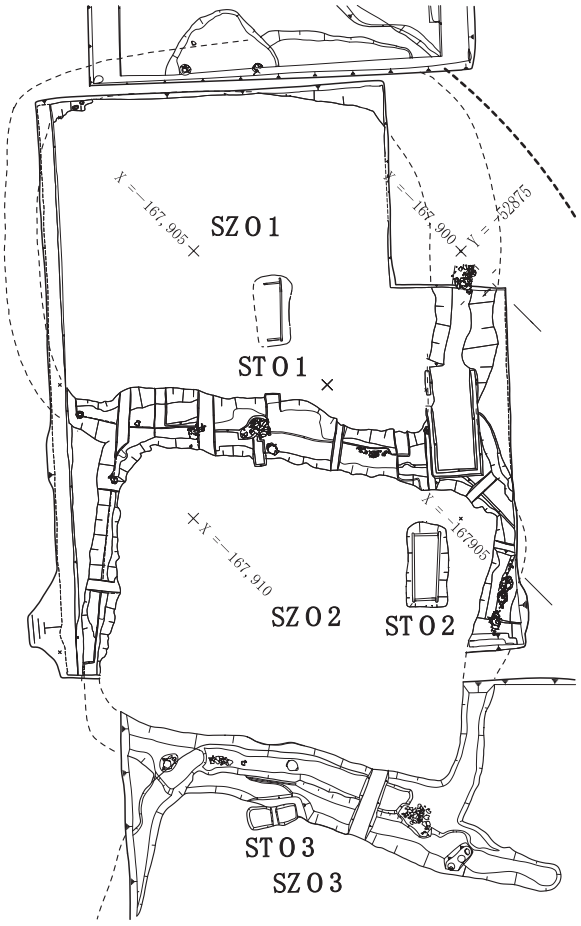
SD02は方形周溝墓群の東、調査区の中央近くを西南から東北方向に横断する幅約２mの溝である。この溝から東は、構造物の基礎工事のため大きく掘りこまれていて、遺構の有無は不明だが、周りの状況から遺構は希薄とみられる。

SD03は東端部を東南から西北方向へ延びる幅約３～４mの溝である。位置と方向からNR11に合流するものと考えられる。埋土最上層で土師器片が少量出土したのみで、他に遺物は出土しなかった。調査区の東、道路を隔てた以前の調査で検出された古墳時代後期の大溝に繋がると考えられる。

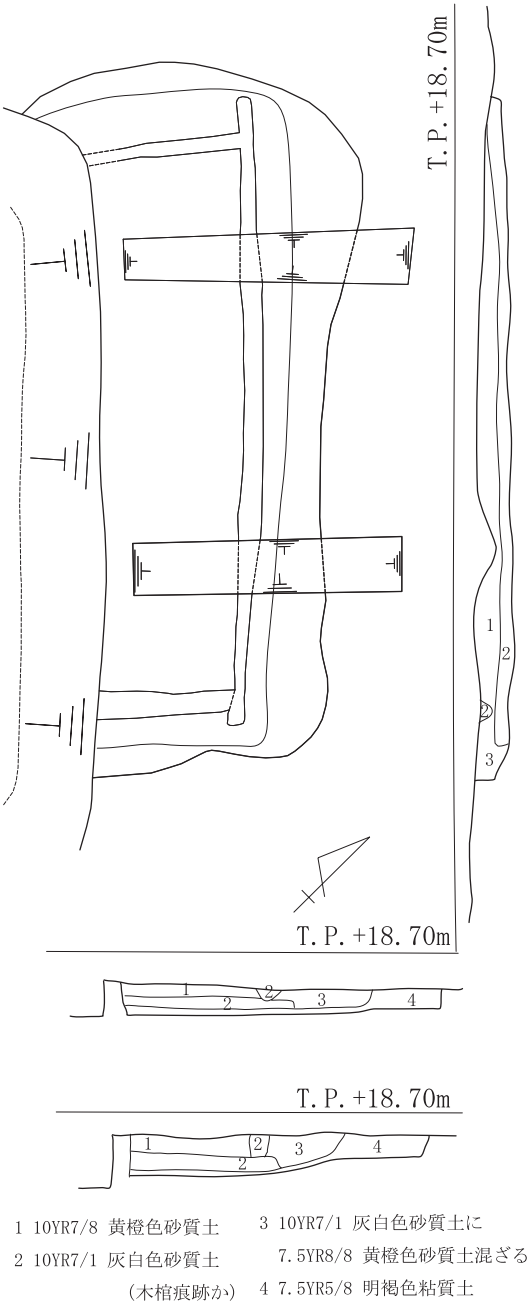
SZ01は最も北西に位置している方形周溝墓である。長軸11.2m、短軸8.6m、形状は隅丸長方形で溝は一部未調査であるが、全周していると考えられる。長軸はN45°Eを指す。東北溝幅1.5m、東南溝幅0.9m、西南溝幅0.6m、西北溝幅0.7mを測り、長軸溝外端長は13.4m、短軸溝外端長は10.3mとなる。中央部で短軸に平行した主体部を１基検出した。



第44図　SZ01 ～ SZ06（S=1/500）



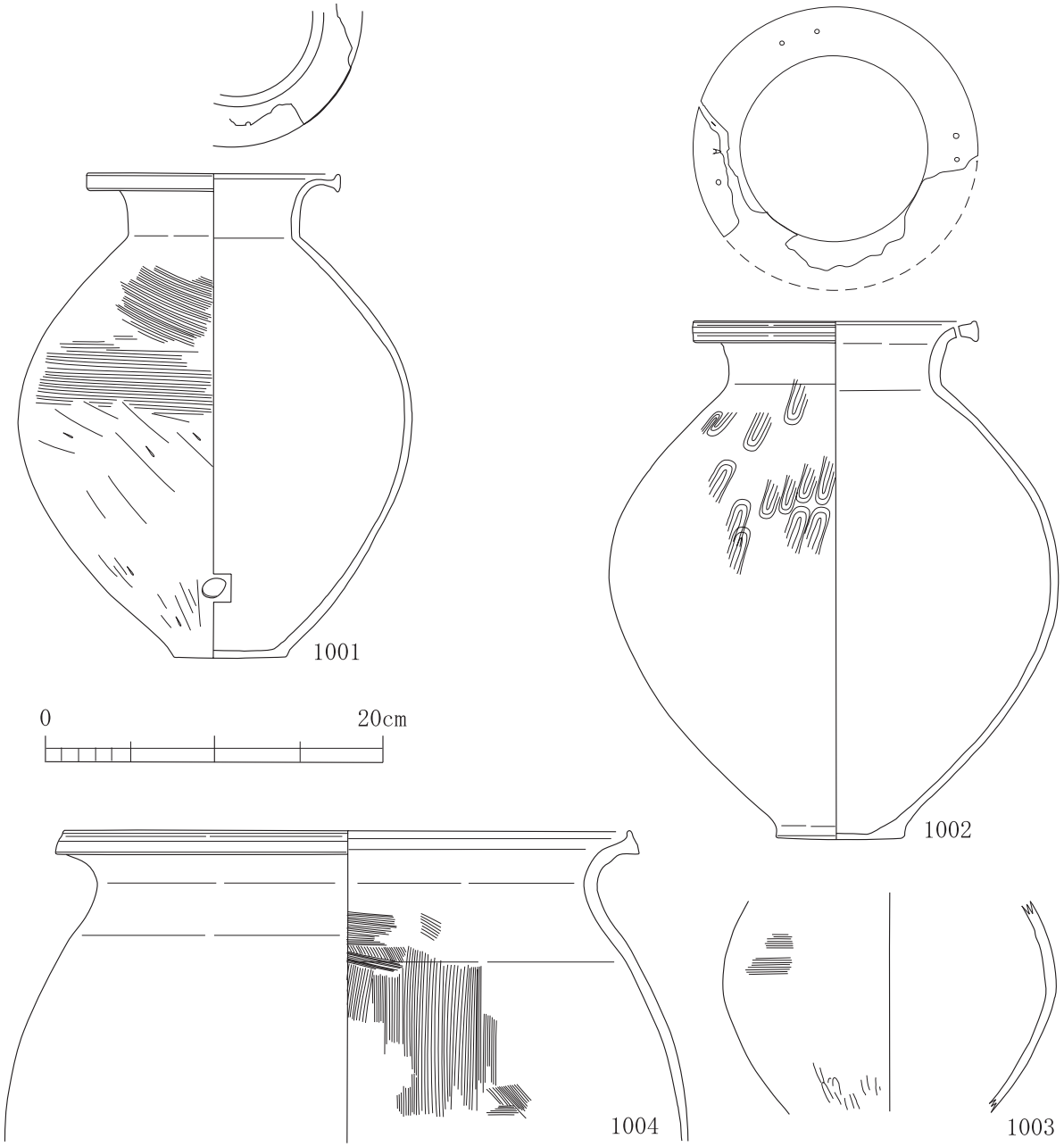
第45図　SZ01、SZ02（S=1/200）



第46図　SZ01－ST01 平・断面図（1/20）

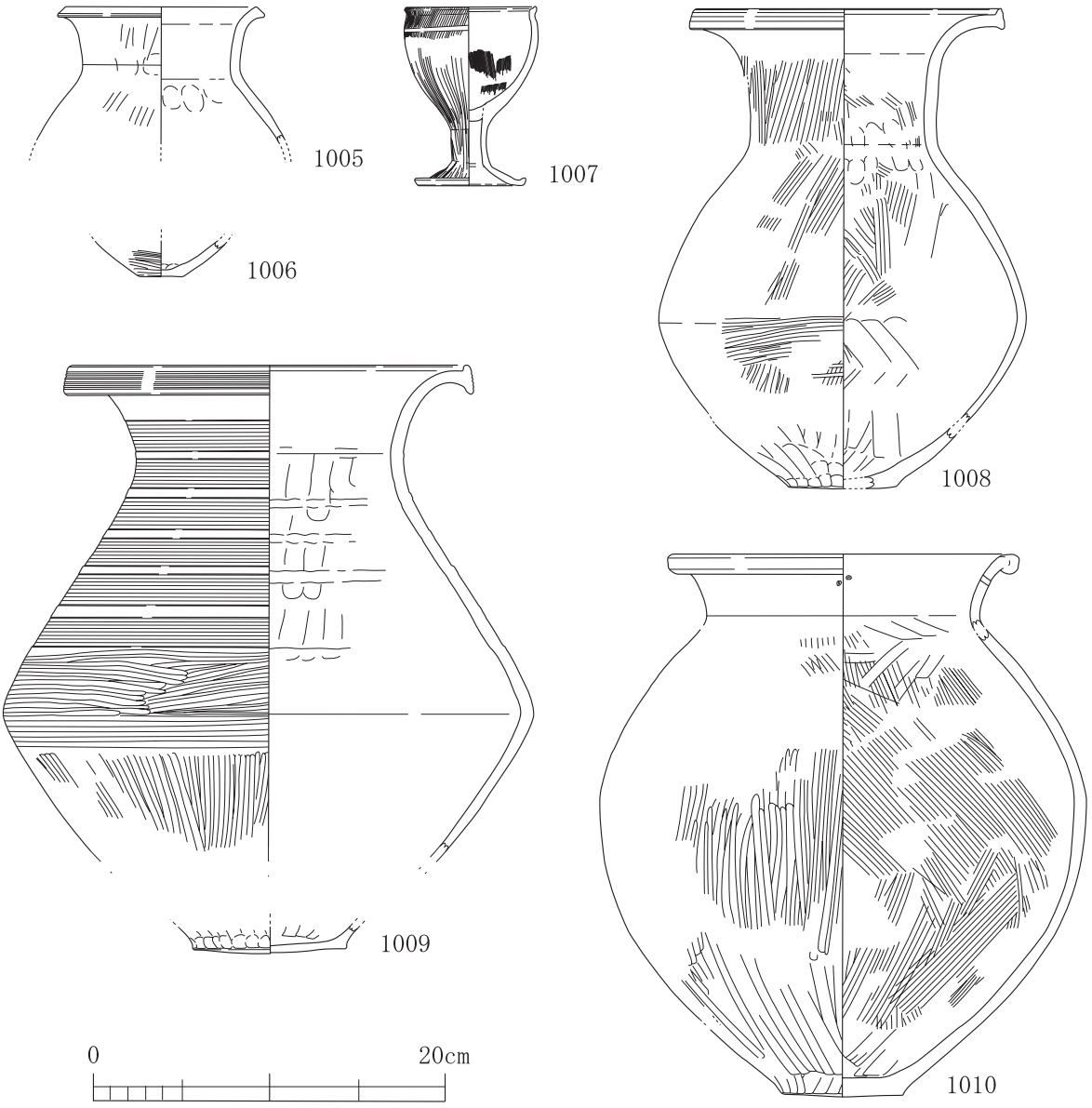
ST01は隅丸長方形を呈する主体部である。東北溝から約４m、東南溝から約２mの点が主体部の中心である。長軸はN45°Wを指し、方形周溝墓の短辺にほぼ並行している。墓壙は長さ1.96m、幅0.75m以上の隅丸方形を呈し、深さは５～10cm残存する。木質は一切なく、木棺の痕跡のみを確認した。底板は長さ1.74m以上、幅0.51m以上の長方形を呈すると考えられ、厚さ２～４cmをはかる。北東の側板は長さ1.75m、厚さ３～５cm、北西の小口板は長さ0.35m以上、厚さ４cm、南東の小口板は、長さ0.37m以上、厚さ６～７cmを測る。西南の側板は撹乱により滅失している。構造は底板の上に側板と小口板が乗るもので、側板が小口板をはさんで固定している。副葬品はなく、人骨も残っていなかった。

遺物は溝の中から多量に検出された。SZ01に伴うことが明確な土器は東北・西北溝から出土した土器である。西北溝からは1001 ～ 1010（第47・48図）が出土した。1001、1002は短頸の広口壺。ともに口縁部に２孔１対の紐孔を穿つ。1002は肩～体部にハケメの上から縦方向の流水文のタタキ目をのこす。1003は壺の胴部である。胴部は丸く膨らむが口頸部と底部が失われており、くわしい器形は不明である。外面の胴部上半はハケ調整、下半はケズリ調整であり、内面はナデ



第47図　SZ01 西北溝出土遺物１（S=1/4）

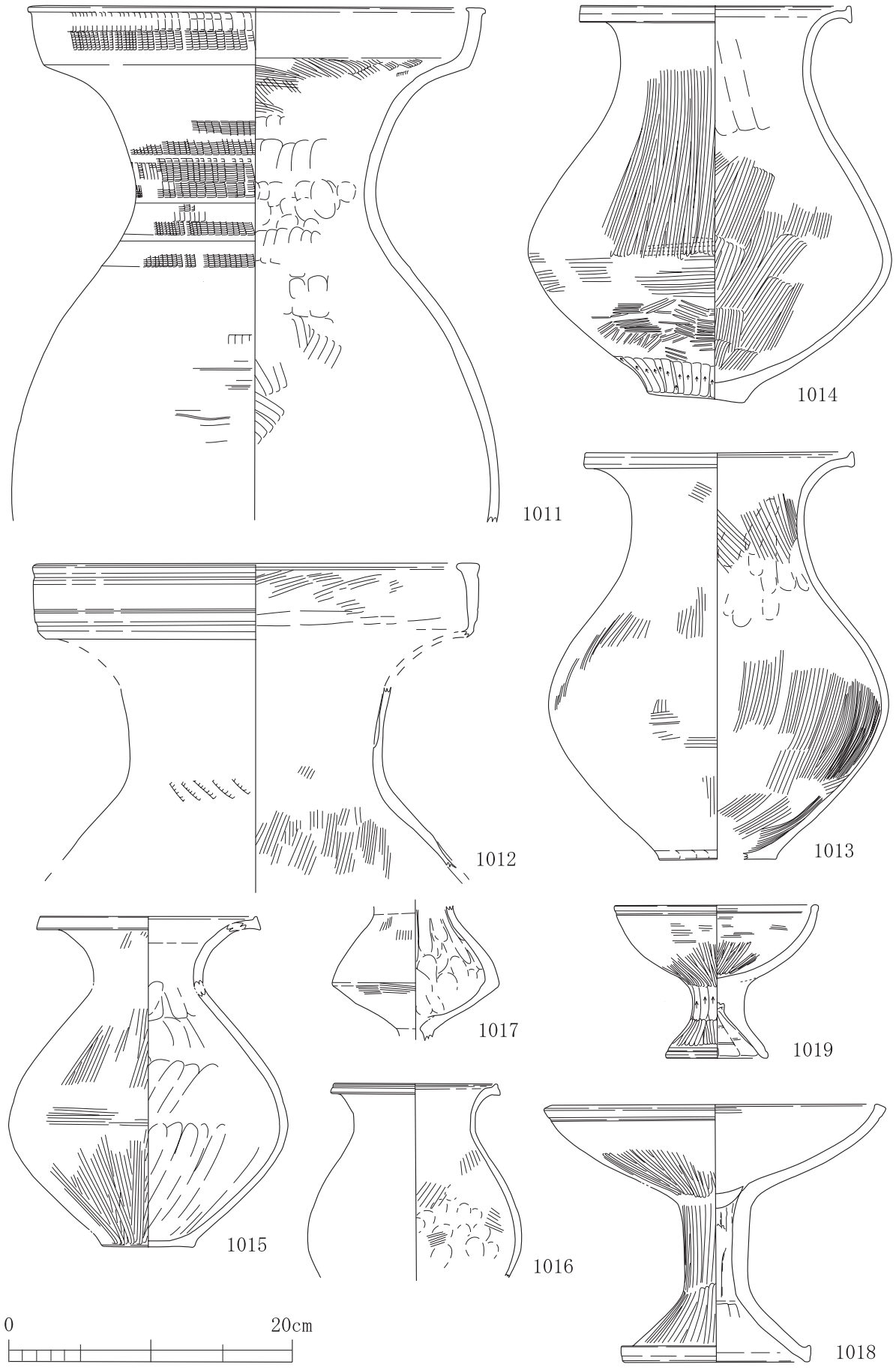
であると思われるが、工具のあたったような痕跡も確認できた。残存器高12.8cmを測る。焼成は良好で胎土は蜜ながら１ｍｍ程度の砂粒を10%含む。色調は外面が7.5YR7/4にぶい橙色、内面が7.5YR5/1褐灰色、断面は7.5YR8/4浅黄橙色で、残存率は３％である。1004は甕である。胴部から底部が遺存しないため器形は詳細には不明であるが、口径から考えると比較的大型の甕となろう。胴部からゆるやかに屈曲して口縁部へとつながる。口縁端部は上部につまみあげる。口縁端面に１条のごく弱い凹線文をめぐらす。口縁部下はヨコナデ、胴部はハケメでしあげ、内面はナデで仕上げているようである。復元口径は34.0cm、残存器高は18.7cmで残存率は３％である。焼成は良好で胎土は蜜、色調は内外面・断面のいずれも5YR7/6にぶい橙色である。1005は壺である。胴部からやや外傾気味に頚部がたちあがりそのまま外販して口縁部に続く。口縁部は斜めに端面をもつ。内外面ともに器壁の摩滅が著しく、細かい調整は不明であるがわずかに外面にハ



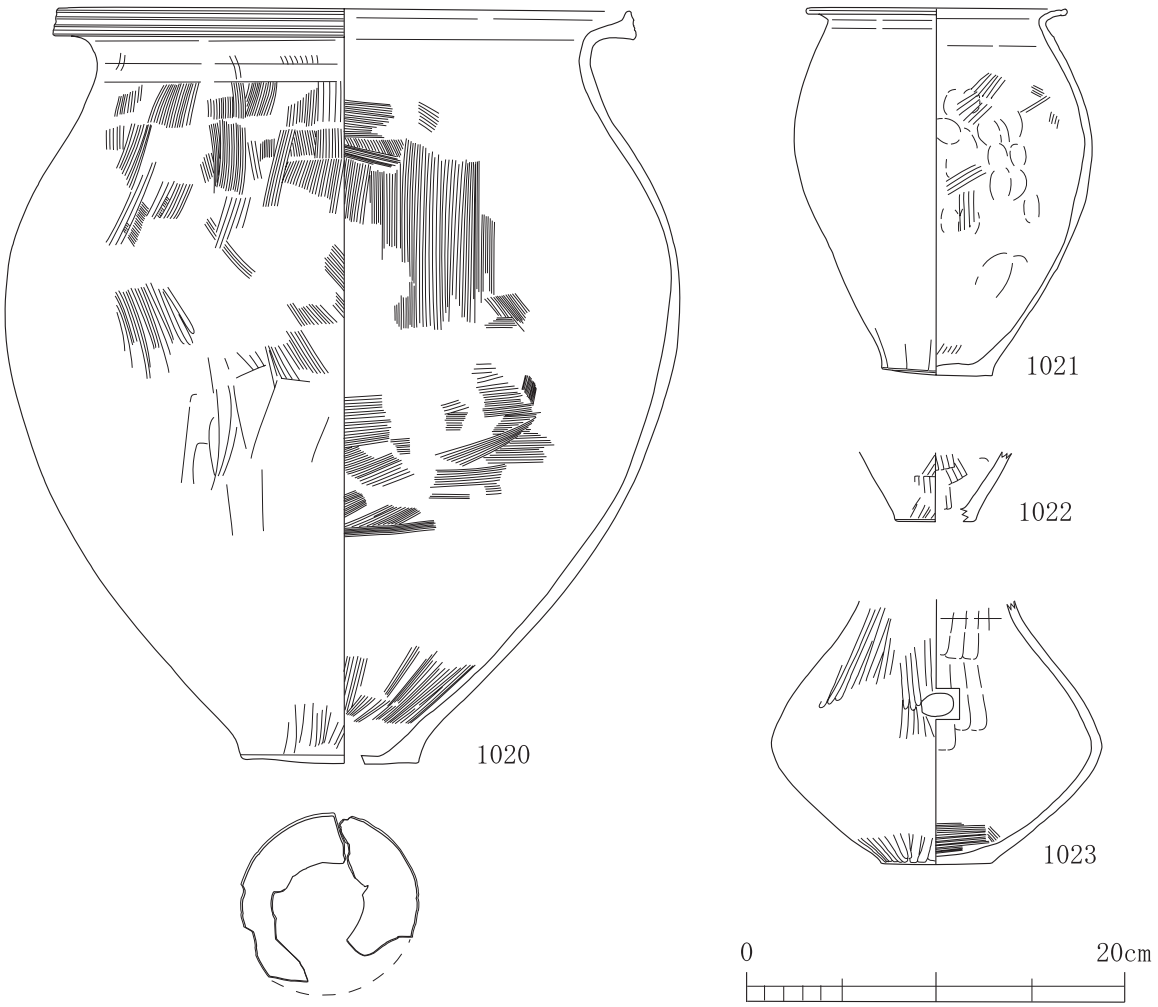
第48図　SZ01 西北溝出土遺物２（S=1/4）

ケと思われる痕跡が、内面ではナデ調整が観察できた。復元口径10.8cm、残存器高は7.8cmを測る。焼成は良好、胎土は密で、色調は外面が5YR8/4淡橙色、内面が7.5YR8/3浅黄橙色、断面が5YR7/1明褐灰色である。遺存状態はわるく、残存率は３％である。1006は壺の底部である。外面は底部まで丁寧なヘラミガキを施す。復元底径2.4cmと非常に小さく、ミニチュア土器の可能性がある。残存器高2.0cmを測る。焼成は良好、胎土は蜜で、色調は外面が7.5YR8/2灰白色、内面・断面が7.5YR8/1灰白色である。残存率は５％である。

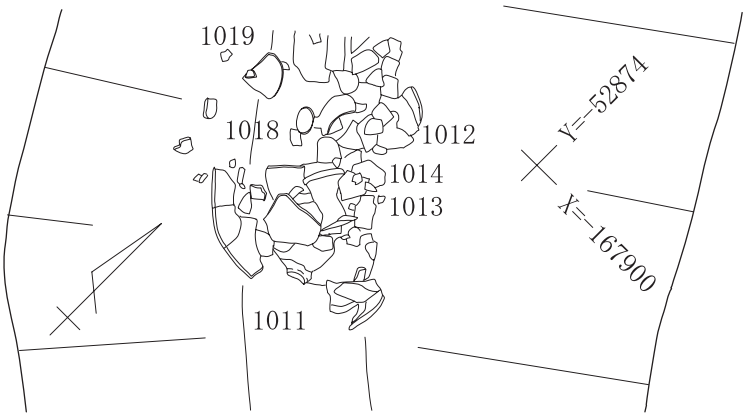
1007は台付鉢である。ハの字にひらく底部から筒状の脚部に続き、杯部はやや深い鉢状を呈して、全体としてはワイングラス状を呈する。口縁部はやや外側にひらいて、端部は丸くおさめる。外面の口縁部直下に、ヨコナデで調整した後、２段の刺突文を細かくめぐらす。２段の間は施文後に横方向のヘラミガキをする。杯部から底部までは丁寧なヘラミガキを行い、底部の端部はヨコナデで仕上げる。内面は、杯部は細かいハケもしくはナデで調整していると思われるが、



第49図　SZ01 東北溝出土遺物１（S=1/4）

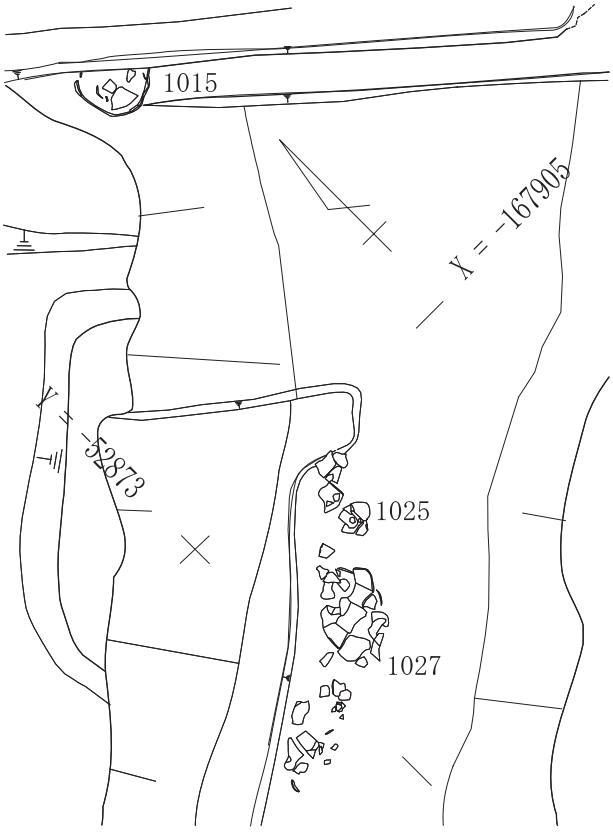


第50図　SZ01 東北溝出土遺物２（S=1/4）



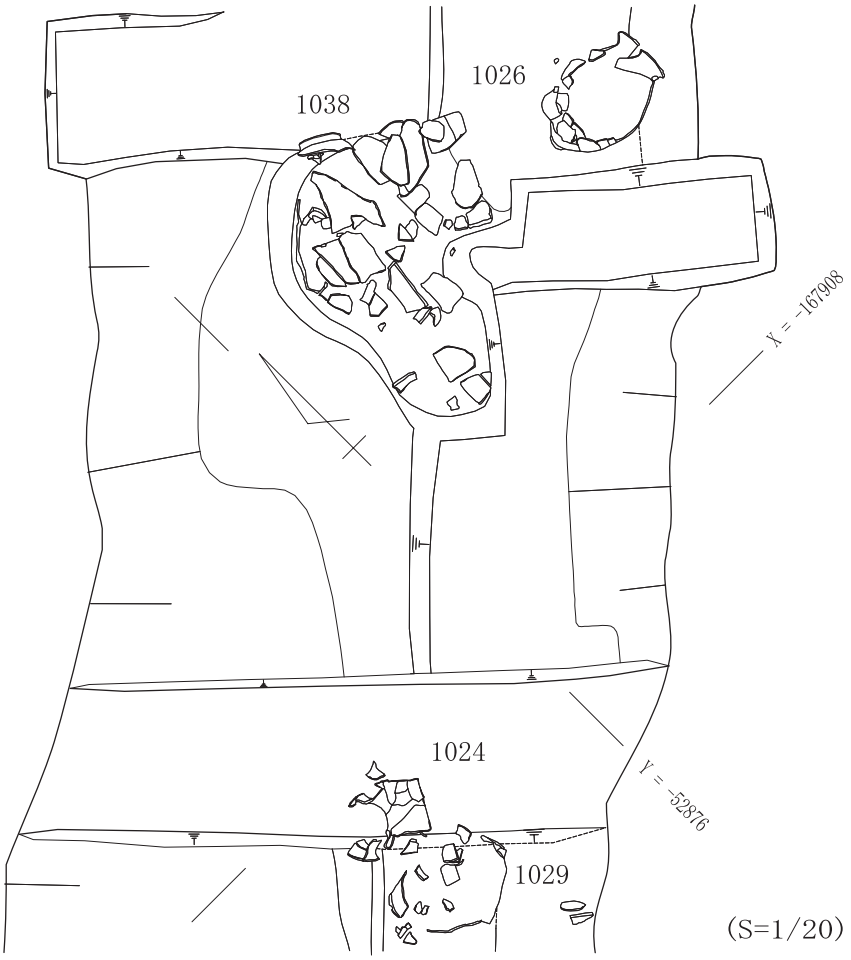
第51図　SZ01 東北溝遺物出土状況（S=1/20）

器壁の剥離のために詳細は不明である。杯部の底部は粘土を充填しているが、杯部の調整は丁寧で、脚部内面側からの観察によって知ることが出来る。脚部内面もナデ調整であろう。口径7.45cm、底径6.1cm、器高10.3cmを測る。焼成は良好で胎土は蜜、色調は外面2.5YR5/8明赤褐色、内面は2.5YR5/6明赤褐色、断面は5YR2/1黒褐色。ほぼ完存している土器である。1008は壺である。胴中央部が強く張り、垂直に伸びる頚部は外反して口縁部へと続く。口縁端部つまみあげ、端面にごく弱い２条の沈線をめぐらす。外面は口縁部下はヨコナデで仕上げ、頚部から胴部上半にかけてはハケのあとナデで調整しているように観察できた。胴部中央には横方向のヘラミガキ､底部付近はナデで仕上げている。内面は口縁部はナデ調整だが、胴部はハケもしくはナデで仕上げている。残存器高は17.7cm、底径6.15cm、推定器高は27.7cmを測る。焼成は良好、胎土は密で、色調は外面が5YR7/4にぶい橙



第52図　SZ01 東南溝・SZ02 西北溝
遺物出土状況１（S=1/20）

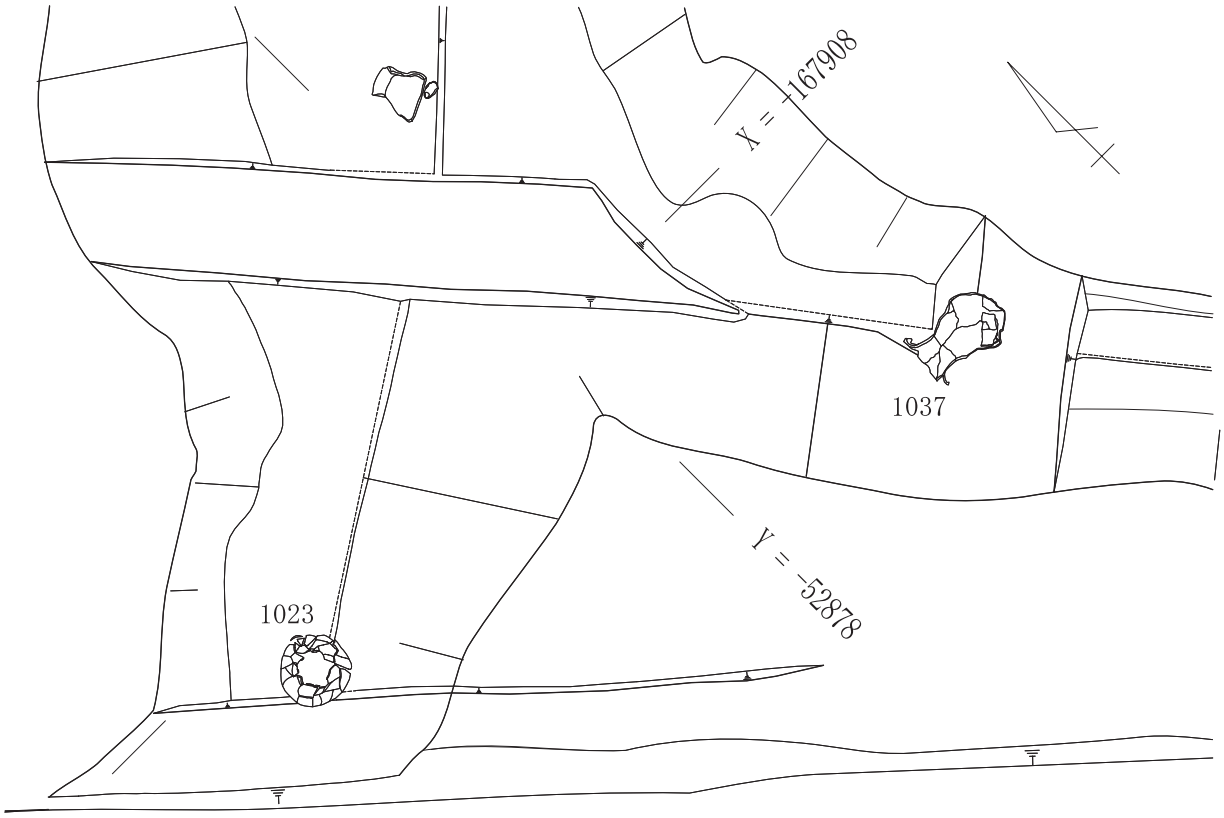
色、内面が5YR8/3淡橙色、断面が5YR8/2灰白色である。残存率は20％である。1009は壺である。胴部が強く張り、太い頚部は外反して口縁部へと続く。口縁端部は粘土を貼り上下に広げ、端面に櫛描直線文を施す。頚部から胴部上反にかけては櫛描直線文を６条施し胴部中央から胴下半にかけては丁寧なヘラミガキを施す。口縁部内面はナデ調整であるようだが、ヘラミガキをしている可能性もある。頚部から胴部にかけては縦方向のナデであり、外面の櫛描文と対応する位置に弱い横方向のくぼみが走る。復元口径22.6cm、残存器高は28.1cmを測る。焼成は良好、胎土は密で、色調は内外面・断面のいずれも7.5YR8/2灰白色である。底部は欠損するが口縁部は完存しており、残存率は50％である。1010は壺である。球形の胴部に外反する頚部が取り付きが、口縁部へと続く。口縁端部は粘土を貼り折り曲げて分厚くしあげる。外面は胴上半の一部でハケメが観察できるが、なでて消していると思われる。胴中央はヘラミガキを施し、下半はナデで仕上げる。内面はあらいハケメ仕上げである。復元口径20.2cm、底径７cm、推定器高は31.3cmを測る。焼成は良好、胎土は密で、色調は外面が5YR8/3淡橙色、内面が7.5YR8/1灰白色、断面が5YR7/6橙色である。破片は多いが遺物の遺存状況は悪く、残存率は50%程



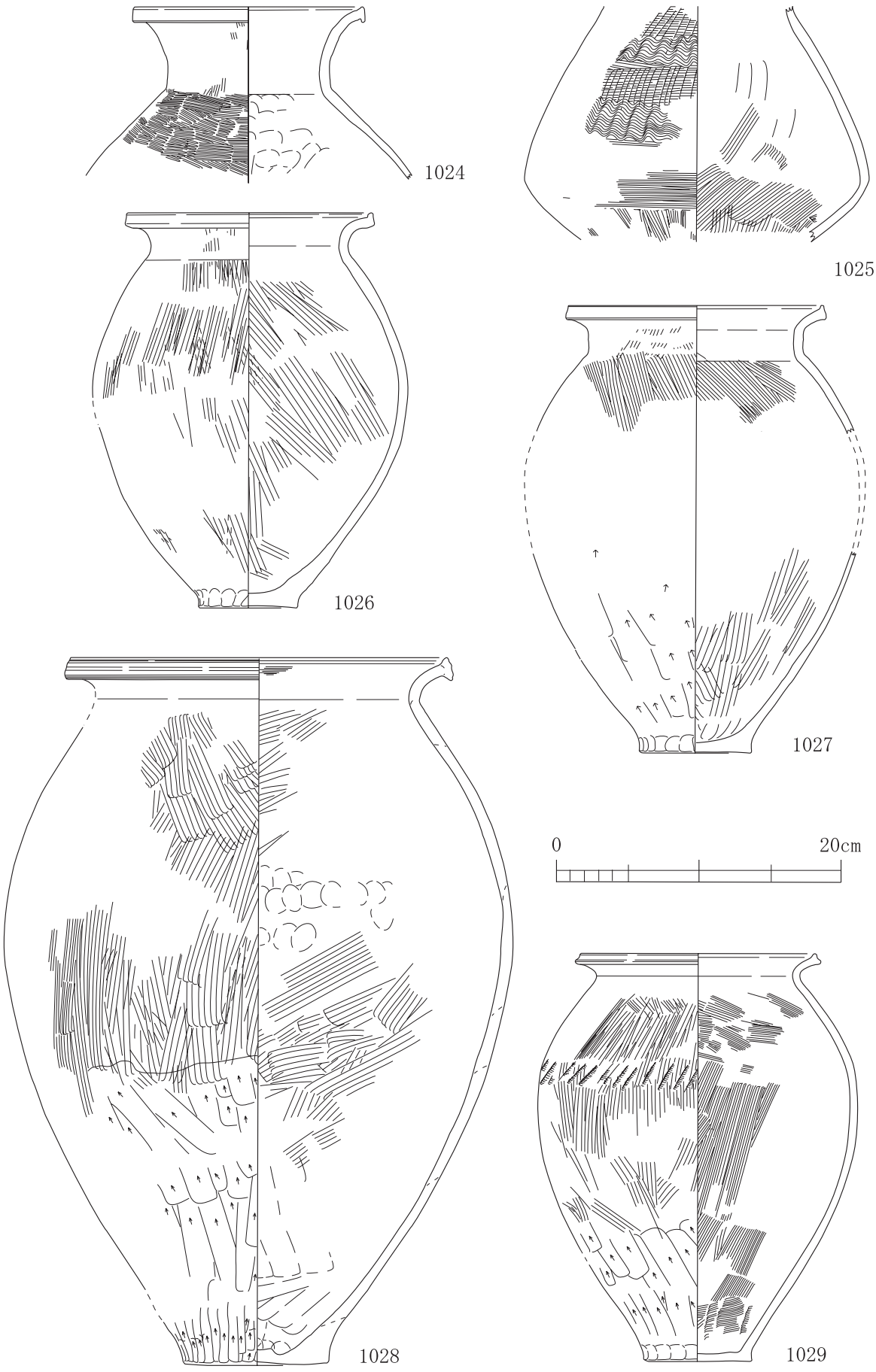
第53図　SZ01 東南溝・SZ02 西北溝遺物出土状況２

度になろう。

東北溝からは1011 ～ 1023（第49・50図）が出土した。1011は壺である。胴部から口縁部にかけて遺存する。あまりはらない胴部から太い頚部にかけてゆるやかにつながり、擬口縁上に粘土を貼り付けて受口状の口縁部を作り出す。口縁端部は左右に張り出して上面を広く作り、口縁部外面には２条の廉状文を施す。頚部から胴部にかけては２条で１組の廉状文を施す。頚部で４組が確認できたが、胴部については器壁の残りが悪くはっきりしない。ただ、直線文もしくは廉状文の痕跡が認められるほか、胴の最大径付近では波状文も確認できた。復元口径30.2cm、胴部最大径34.8cm、残存器高は36.8cmを測る。焼成は良好、胎土は密で、色調は外面が5YR7/6橙色、内面が5YR8/4淡橙色、断面が7.5YR8/3浅黄橙色である。残存率は20%である。1012は壺である。頚部の一部と口縁部が遺存するだけであるが、焼成や胎土から同一固体であると認識できた。口縁部は受口状を呈し、口縁端部は内側に張り出して上面を広く作る。口縁部外面には弱いながら４条の凹線を施す。口縁部の内面には荒いハケメが認められる。頚部と胴部の境界付近に刺突文が認められた。復元口径31.8cmを測る。焼成は良好、胎土は密で、色調は外面が5YR8/4淡橙色、内面が7.5YR8/2灰白色、断面が7.5YR6/1褐灰色である。残存率は３%である。1013は壺である。胴部下半に最大径があり、太い頚部はまっすぐ立ち上がった後外反して口縁部へと続く。口縁端部は上下に広げる。外面は口縁部から頚部までがナデ調整、胴部上半が縦方向のミガキ調整で、胴最大径付近は横方向のミガキ調整である。さらに胴部の下部にはタタキが観察でき、底部付近はケズリ調整が施されている。文様はない。内面は口縁部から頚部はナデ、胴部はハケ調整であ



第54図　SZ01 東南溝・SZ02 西南溝遺物出土状況（S=1/20）



第55図　SZ01 東南溝・SZ02 西北溝出土遺物（S=1/4）

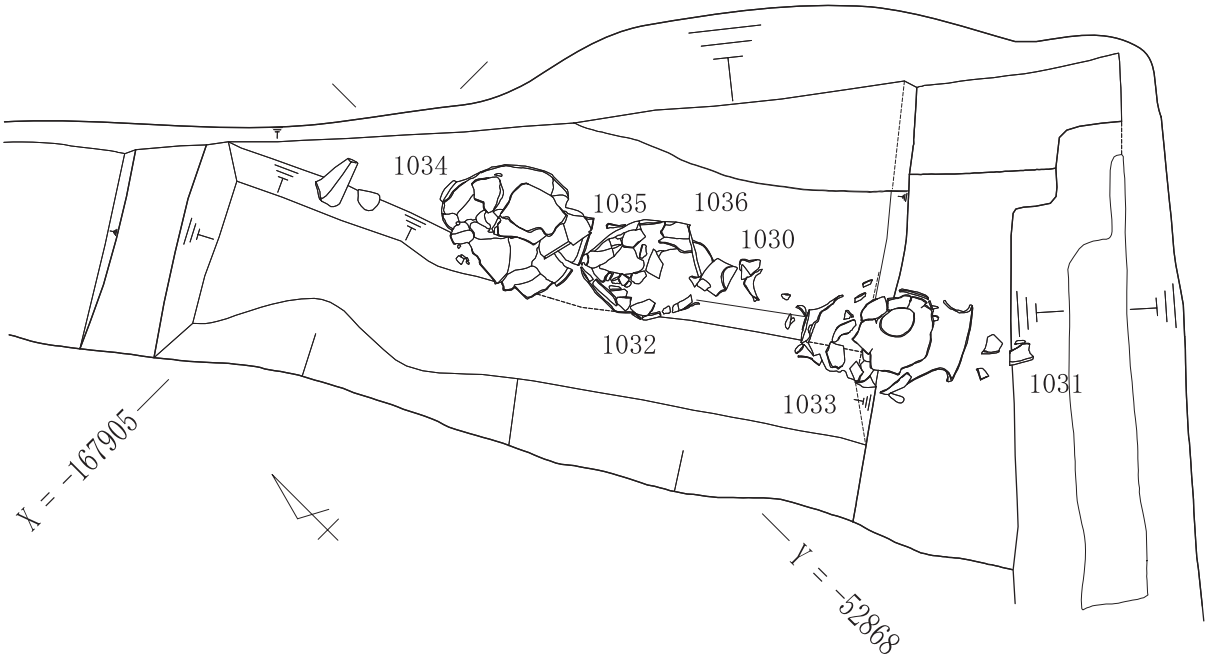
る。口径19.15cm、低径7.0cm、器高は28.5cmを測る。焼成は良好、胎土は密で、色調は内外面・断面のいずれも7.5YR8/3浅黄橙色。ほぼ完存しており、残存率は95％である。胴部下半と口縁部のかえりの部分に二次被熱による煤の付着が認められた。1014は壺である。胴部中央付近に最大径があり、太い頚部はまっすぐ立ち上がった後外反して口縁部へと続く。口縁端部は上下に広げる。外面は器壁の荒れが著しく観察は困難であるが、頚部にはハケメかと思われる痕跡が、胴部にはミガキかと思われる痕跡が認められた。内面はナデの上にハケメが認められる。口径18.9cm、低径8.3cm、器高は29.2cmを測る。焼成は良好、胎土は密で、色調は外面と断面が7.5YR7/3にぶい橙色、内面が7.5YR4/1褐灰色である。残存率は40％である。1015は壺である。遺存状態が悪く、口縁部・頚部・胴部はそれぞれ接合しなかったが、出土位置や胎土などから同一固体と判断した。胴部中央付近に最大径があり、頚部で細くすぼまってから大きく外反して口縁部へと続く。口縁端部は上につまみあげる。外面は頚部にはハケメのあとヨコナデしたかと思われる痕跡が認められ、胴部上半と下半には縦方向の、胴部中央には横方向のヘラミガキはわずかに観察できたが、器壁の表面ののこりは悪い。内面はナデで仕上げる。復元口径15.4cm、低径6.6cm、推定器高は23.7cmを測る。焼成は良好、胎土は密で、残存率は30％である。胴部下半に煤の付着が認められた。1016は壺である。球状の胴部からまっすぐに短く頚部がたちあがり、斜め上方に広がって口縁部へと続く。口縁部はつまみ上げて端面をつくり、端面には１条の沈線をめぐらす。外面は器壁の摩滅が著しく、細かい調整は不明である。内面には胴部付近にわずかにハケメが観察できた。口径10.5cm、胴部最大径15.2cm、残存器高は13.7cmを測る。焼成は良好、胎土は密で、色調は外面が5YR7/4にぶい橙色、内面が5YR7/2明褐灰色、断面が7.5YR8/3浅黄橙色を呈する。残存率は20％である。1017は脚付壺であるが、口縁部と脚部を欠損する。胴は算盤球状に強く膨らむ。器壁が著しく荒れており、調整はほとんど観察できないが、外面にはミガキと思われる痕跡が認められ、内面はナデ調整である。胴部最大径12cm、残存器高は9.2cmを測る。焼成は良好、胎土は密で、色調は外面と断面が7.5YR8/3浅黄橙色、内面が7.5YR8/1灰白色である。残存率は20%である。1018は高杯である。大きくひらく杯部に筒状の脚部が続き、底部はハの字状に広がる。杯部の口縁端部は斜め方向に平たく端面を持ち、口縁直下には１条の沈線をめぐらす。外面の調整はヘラミガキを施す。杯部内面は口縁部付近はヨコナデで、そのほかはヘラミガキのようにも観察できるが、器壁の荒れが著しく、図化はしえない。脚部の筒状部分の内面には絞り痕が観察できるが、指の届く範囲は丁寧にナデて、その痕跡を消している。またハの字状にひらく部分はナデで調整を行っているが、何らかの工具が横方向に当たっている様子も観察できる。復元口径24.6cm、底径13.1cm、器高18.4cmを測る。焼成は良好で胎土は蜜、色調は内外面・断面ともに5YR8/4淡橙色、残存率は75%である。1019は高杯である。小さい伏せた碗状の底部は緩やかに脚部につながり、碗状の杯部へと続く。杯部の口縁端部は丸くおさめ、口縁直下には１条の沈線をめぐらす。外面の調整は、口縁部直下は横方向、杯部から底部までは縦方向のヘラミガキで、脚部にはケズリで面を整えている部分も見られる。杯部内面は、口縁部はヨコナデで、その

ほかは横方向、底の付近は縦方向のヘラミガキである。口径14.5cm、底径7.1cm、器高10.85cmを測る。焼成は良好で胎土は蜜、色調は内外面・断面ともに7.5YR8/4浅黄橙色、残存率は80%である。1020は壺である。胴部中央よりやや上方が最も膨らむ胴部をもち、ごく短くたちあがる頚部からほぼ水平にひらく口縁部へと続く。口縁端部をつまみあげて端面をつくり、３条の沈線をめぐらす。外面の口縁部直下はヨコナデ、胴部上半はハケメ、胴部下半はミガキ調整であるが一部にケズリ調整の痕跡も認められる。口径30.4cm、低径9.4cm、器高は40.5cmを測る。焼成は良好、胎土は密で、色調は内外面・断面のいずれも7.5YR8/1 灰白色である。残存率は50%である。底部を円形に打ち欠いている。1021は甕である。胴の中央付近よりもやや上がもっとも膨らみ、口縁端部は丸くおさめる。全体に器壁の荒れが著しく、外面は調整を観察し得ない。内面はハケ調整がわずかに観察できた。復元口径は14.0cm、底径は6.0 cm、器高は19.6cmで、残存率は50%である。焼成は良好で胎土は蜜、色調は外面が5YR7/6橙色、内面と断面が7.5YR8/2灰白色である。煤の付着は認められない。

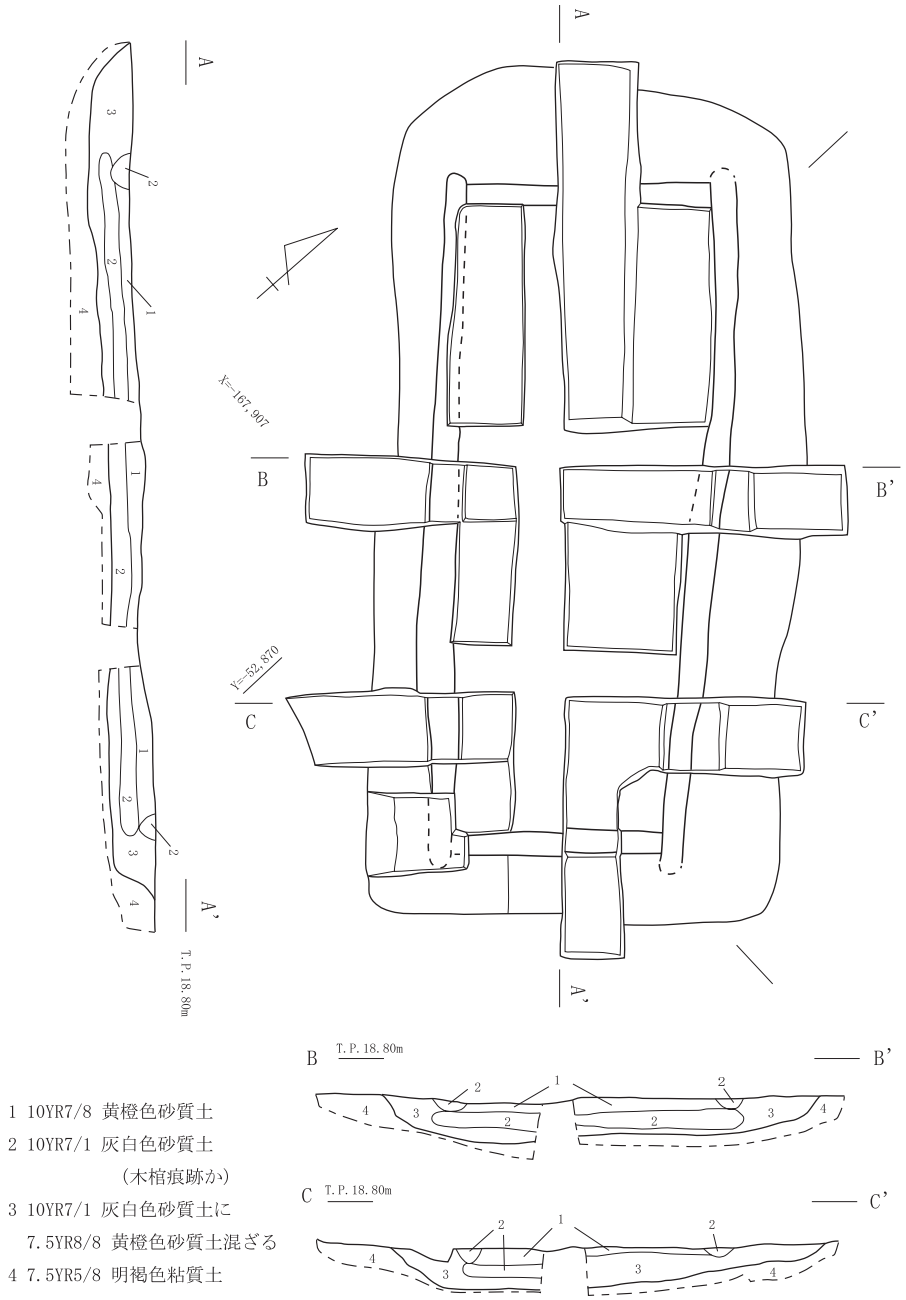
東南溝はSZ02と溝を共有することからどちらに伴うか不明なものもあるが、1024 ～ 1029（第55図）を検出した。1024は壺である。頚部は口縁部へ向かって外反し、口縁端部は上下につまんでやや広く平坦面つくるが施文はしない。頚部はハケ調整、胴部はタタキ整形である。内面は指頭圧痕が残る。復元口径16.2cm、残存器高は12.2cm。焼成は良好、胎土は密で、色調は内外面・断面ともに7.5YR7/6橙色で、残存率は20%である。1025は壺の胴部である。残存器高16.6cm、復元した胴部最大径は24.4cmを測る。胴部に簾状文と波状文を順に２条ずつ施す。胴部下半外面にはミガキを施し、内面にはハケメを認める。残存率は20%。焼成は良好で胎土は蜜、色調は外面が5YR7/6橙色、内面が10YR7/6褐灰色、断面が7.5YR7/3にぶい橙色である。1026は甕である。胴の中央部がもっとも膨らみ、口縁端部は上方へややつまみ上げる。外面は口縁部はヨコナデ、胴部は中央部までハケメ、下半部はケズリのようにも見えるが、外面の剥落が著しく不明である。内面はハケメで仕上げる。口径は17.1cm、底径は6.8cm、器高は28.2cmで、残存率は60%である。焼成は良好で胎土は蜜、色調は外面が7.5YR7/4にぶい橙色、内面が7.5YR8/4浅黄橙色、断面が7.5YR7/2明褐灰色である。二次被熱の痕跡が顕著で、胴下半と口縁端部とそのかえりの部分に煤の付着が認められ、胴下半は赤変している。1027は壺である。胴上半部と下半部は接合しなかったが、胎土や焼成から同一固体と判断した。胴部最大径付近は残存しないが、あまり張らないラグビーボール状の胴部を持つものと推定できる。胴部から頚部が短く立ち上がり、やがてひらいて口縁部へと続く。口縁端部はつまみあげて端面をつくる。端面にはごく弱い凹線を施すようにも見えるが周回しない。外面は頚部まで強いヨコナデであって、その下にハケメの痕跡が認められる。肩部から胴部にかけてはハケメ、胴下半部はケズリである。内面は口縁部から頚部はヨコナデ、頚部から胴部下半にかけてはハケメである。復元口径17.82cm、底径は7.95cm、推定器高は約32cmを測る。焼成は良好、胎土は密で、色調は外面が7.5YR8/3浅黄橙色、内面がN8/0灰白色、断面が10YR8/2灰白色である。残存率は約20%である。1028は甕である。胴の中央よりやや

上方がもっとも膨らみ、口縁端部は粘土を貼り、上下に広げている。端面に平坦面を持ち、３条の非常に弱い凹線を施す。口縁部内面の一部で横方向のハケメを観察できたが、遺存状態がすこぶる悪く、周回するかどうかは不明である。内面はハケ調整で、胴部と口縁部の境界はヨコナデである。外面の胴下半はケズリ、胴上半はハケメである。口径は26.7cm、底径は10.3cm、器高は50.35cmで、残存率は60％である。焼成は良好で胎土は蜜、色調は内外面・断面共に7.5YR8/8黄橙色である。胴下半に煤の付着が認められる。1029は甕である。胴の中央よりやや上方がもっとも膨らみ、口縁端部は上方へややつまみ上げる。端面に一条の弱い凹線文を施す。外面は口縁部はヨコナデ、胴部は中央部までハケメ、下半部はケズリで仕上げ、胴中央に簾状文状の刺突文を施す。内面はハケメで仕上げる。口径は17.6cm、底径は7.7cm、復元器高は29.1cmで、残存率は60％である。焼成は良好で胎土は蜜、色調は外面が5YR7/4にぶい橙色、内面が2.5Y8/2灰白色、断面が2.5Y6/1黄灰色である。胴下半に煤の付着が認められる。

共有する溝は３層からなり、第３層は最初に掘削した周溝の埋土、第２層は２回目に掘削した周溝の埋土、第１層が３回目に掘削した周溝の埋土と考えられる。このうち、第３層の堀形はSZ02の墳丘部分に沿って屈曲していることから、SZ02の周溝である可能性が高い。この第３層が埋没した後、第２層に相当する周溝が掘削されるが、これもSZ02の墳丘に取り付くように掘削されており、SZ02の周溝と考えられる。第１層は第２層埋没後に掘削されており、このときの掘削はSZ01の造営に伴うものと考えられる。つまり、SZ02の方がSZ01よりも先に造営されたと考えられる。またほとんどの土器は第１層から出土し、第２層、第３層は遺物がほとんど含まれない。共有周溝から出土する土器はSZ01造営以降のものと考えられる。ただ、SZ01が造営されたときにSZ02が機能していなかったと断定はできないので、SZ02とSZ01の共有周溝から出土する土器はいずれの周溝墓にともなうものか特定は出来ない。



第56図　SZ02 東北溝遺物出土状況（S=1/20）

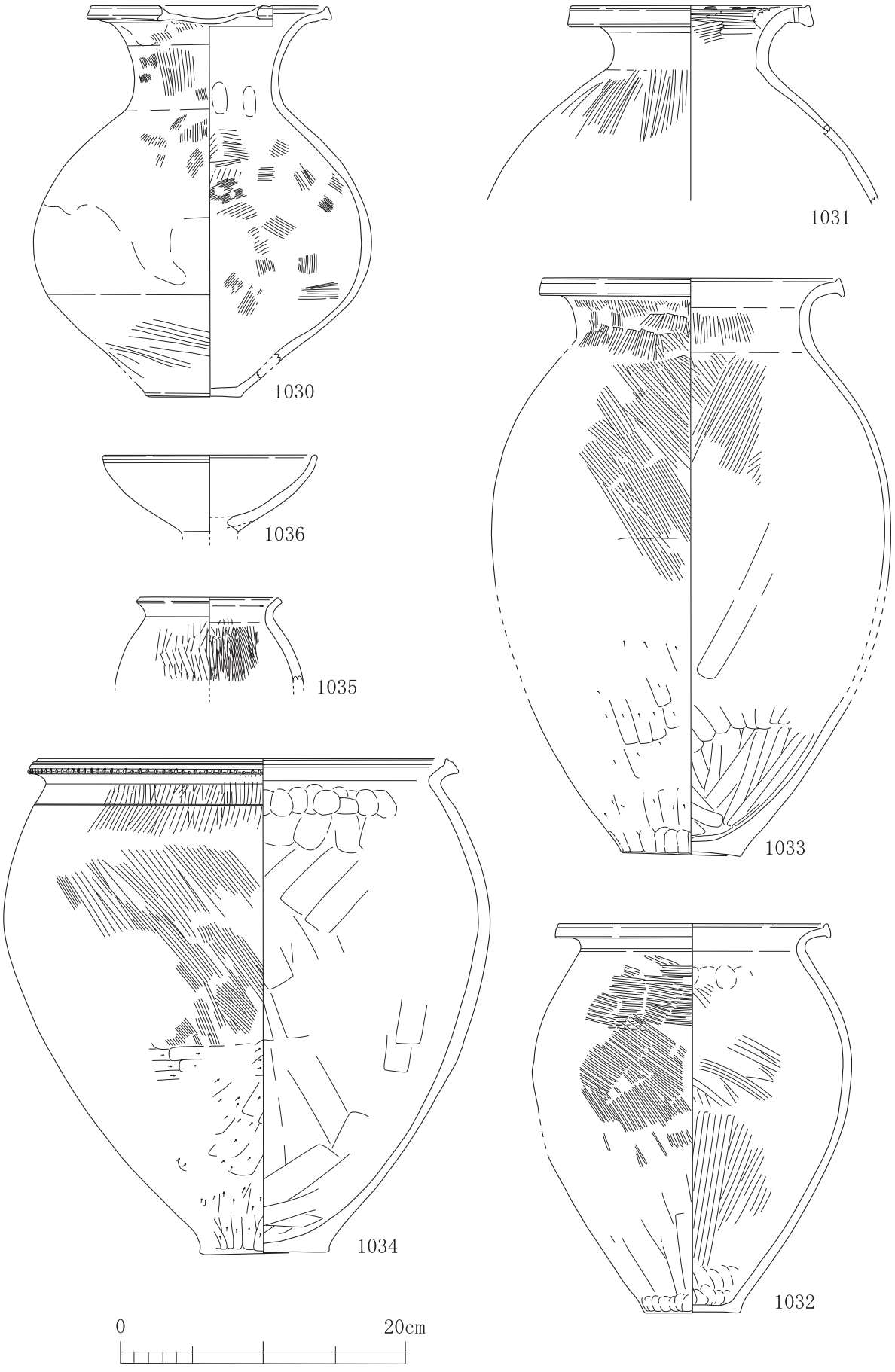


第57図　SZ02－ST02 平・断面図（S=1/20）

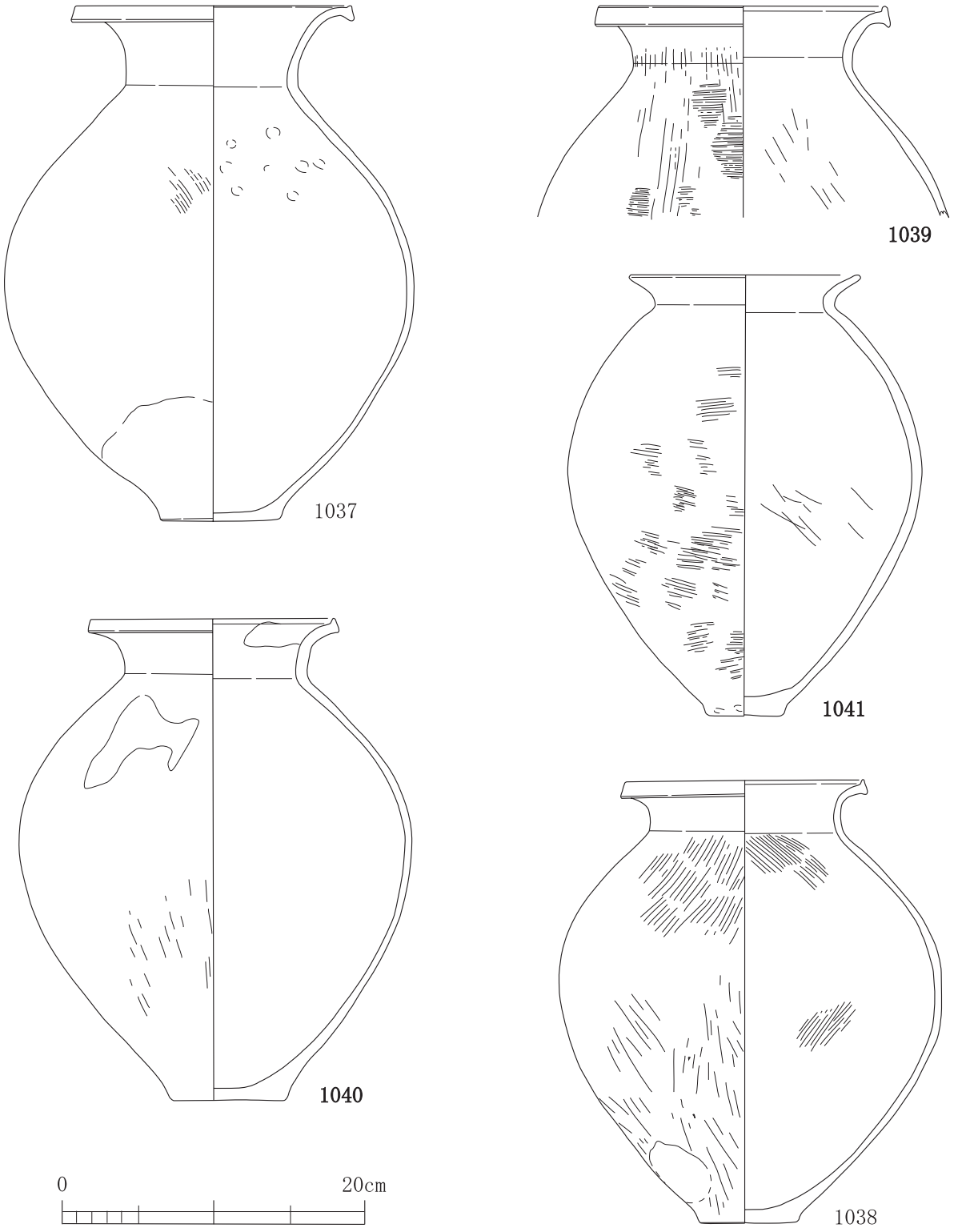
SZ02は長軸9.7m、短軸7.4m、長方形で溝が全周している方形周溝墓である。長軸はN55°Eを指す。東北溝幅1.0m、東南溝幅1.2m、西南溝幅0.7m、西北溝幅1.5m、長軸溝外端長11.2m、短軸溝外端長10.1mを測る。西北溝をSZ01の東南溝と共有しているが、西南溝がSZ01の西南溝よりも約1.5m東北にずれている。北部で短軸に平行した主体部を検出。ST02は隅丸長方形を呈する主体部である。西北溝から約２m、東北溝から約1.5mの点が主体部の中心である。主軸はN45°Wを指す。長軸2.24m、短軸1.12m、深さは0.1m残存する。底板は長さ1.8m、幅0.8mの長方形で、厚さ３～５cmをはかる。北東の側板は長さ1.8m以上、厚さ５～７cm、南西の側板は長さ1.6m以上、厚さ５～10cm、北西の小口板は長さ0.65m、厚さ５～６cm、南東の小口板は、長さ0.51m以上、厚さ６cmを測る。構造は底板の上に側板と小口板が乗るもので、側板が小口板をはさんで固定している。副葬品はなく、人骨も残っていなかった。ST02の中からは遺物が出土しなかった。

遺物は溝の中から多量に検出された。SZ02に伴うことが明確な土器は東北・西南溝から出土した土器である。

東北溝からは1030～1036（第58図）を検出した。1030は壺である。強く張る球状の胴部から外反する頚部が伸び、口縁端部は上下に広げて端面を作る。外面は頚部から胴部にかけてハケメ

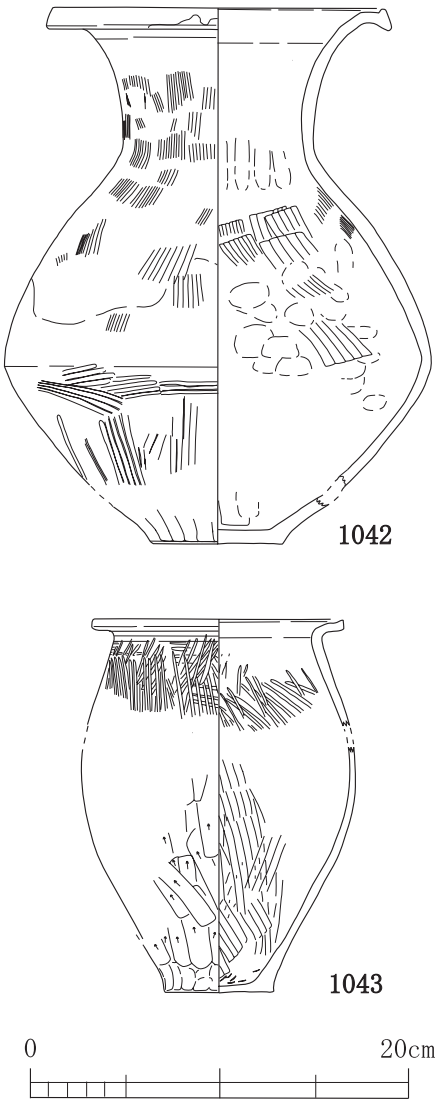


第58図　SZ02 東北溝出土遺物（S=1/4）



第59図　SZ02 東南溝・SZ03 西北溝出土遺物（S=1/4）

で、胴下部の底部付近にミガキが認められる。内面は頚部はナデ、胴部はハケメが認められる。口径16.6cm、底径は6.7cm、器高は28cmを測る。焼成は良好、胎土は密で、色調は外面が7.5YR7/4灰白色、内面が7.5YR7/1明褐灰色、断面が7.5YR7/4にぶい橙色、残存率は約80％である。口縁部の一部を意図的に打ち欠き、胴部下半と口縁端部下半に二次被熱の痕跡を認める。1031は壺である。頚部は口縁部へ向かって外反し、口縁端部は若干上につまみ上げ、平坦な面を持つ。口縁

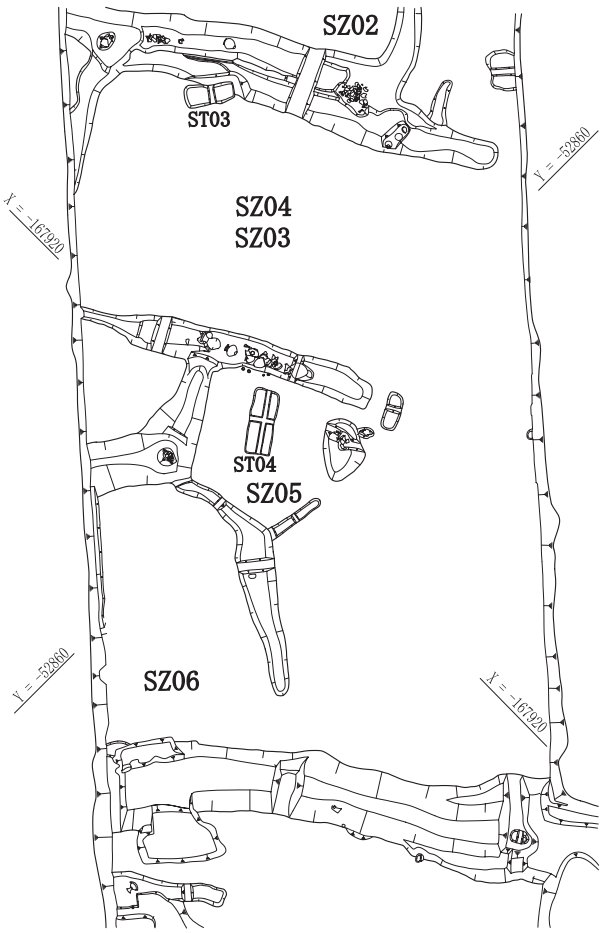


第60図　SZ02 西南溝出土遺物（S=1/4）

部の４ヵ所にそれぞれ２孔の焼成前穿孔を施す。頚部はヨコナデ調整、胴部は肩部までミガキ調整である。内面は口縁部内面に丁寧な横方向のミガキを施す。口径16.8cm、残存器高は14.1cm。焼成は良好、胎土は密で、色調は外面が5YR7/6橙色、内面・断面が10YR5/1褐灰色を呈する。残存率は20%であるが、口縁部から肩部にかけてはほぼ完存する。1032は甕である。胴の中央付近よりもやや上部がもっとも膨らみ、口縁端部は上下に広げる。口縁端面に凹線文状のくぼみが認められるが、不明瞭で一周しない。内面の下部はハケ調整で、胴部と口縁部の境界はユビオサエで仕上げている。外面胴下半はケズリの痕跡があるが、上半はタタキがそのまま残る。復元口径は19.2cm、底径は7.0 cm、器高は27.8cmで残存率は60％である。焼成は良好だが胎土はやや粗く、色調は内外面・断面共に10YR8/3浅黄橙色である。1033は壺である。あまり張らないラグビーボール状の胴部にとりつく頚部は短く立ち上がりやがてひらいて口縁部へと続く。口縁端部は粘土を貼り上下に広げる。外面は口縁部直下までハケメが認められ、胴下半部はケズリである。内面は口縁部はヨコナデ、頚部から胴部上半にかけてはハケメで、底部付近はナデ仕上げとなる。口径21.2cm、底径は8.7cm、推定器高は41.1cmを測る。焼成は良好、胎土は密で、色調は外面が5YR8/3淡橙色、内面･断面が10YR8/1灰白色である。残存率は約30％である。1034は甕である。口径に対して器高が低く寸詰まりで、全体としてひずみが大きい。胴の中央付近よりもやや上部がもっとも膨らみ、短く屈曲する口縁部へとつながる。口縁端部は上部につまみあげる。口縁端面に３条のごく弱い凹線文が回り、端面下端には刻み目を施す。内面はあらいケズリで、胴部と口縁部の境界はユビオサエで仕上げている。外面胴下半はケズリ、上半はハケメで、ハケメは口縁部直下までおよぶ。復元口径は31.9cm、底径は9.3cm、器高は34.7cmで残存率は75％である。焼成は良好で胎土は蜜、色調は外面と断面が10YR8/1灰白色、内面が5YR8/4淡橙色である。二次被熱の痕跡があり、胴下半に煤が付着する。1034は横倒しになった状態で検出され、旧耕土の下面のレベルで半裁された状態になっていた。このことから、水田の造営の際に半裁されたものと考えられた。しかし胴部内から、凹面を上方に向け、重なった状態になっている土器破片を検出し、これら破片は、半裁された上半部分の破片であることが判明した。こ

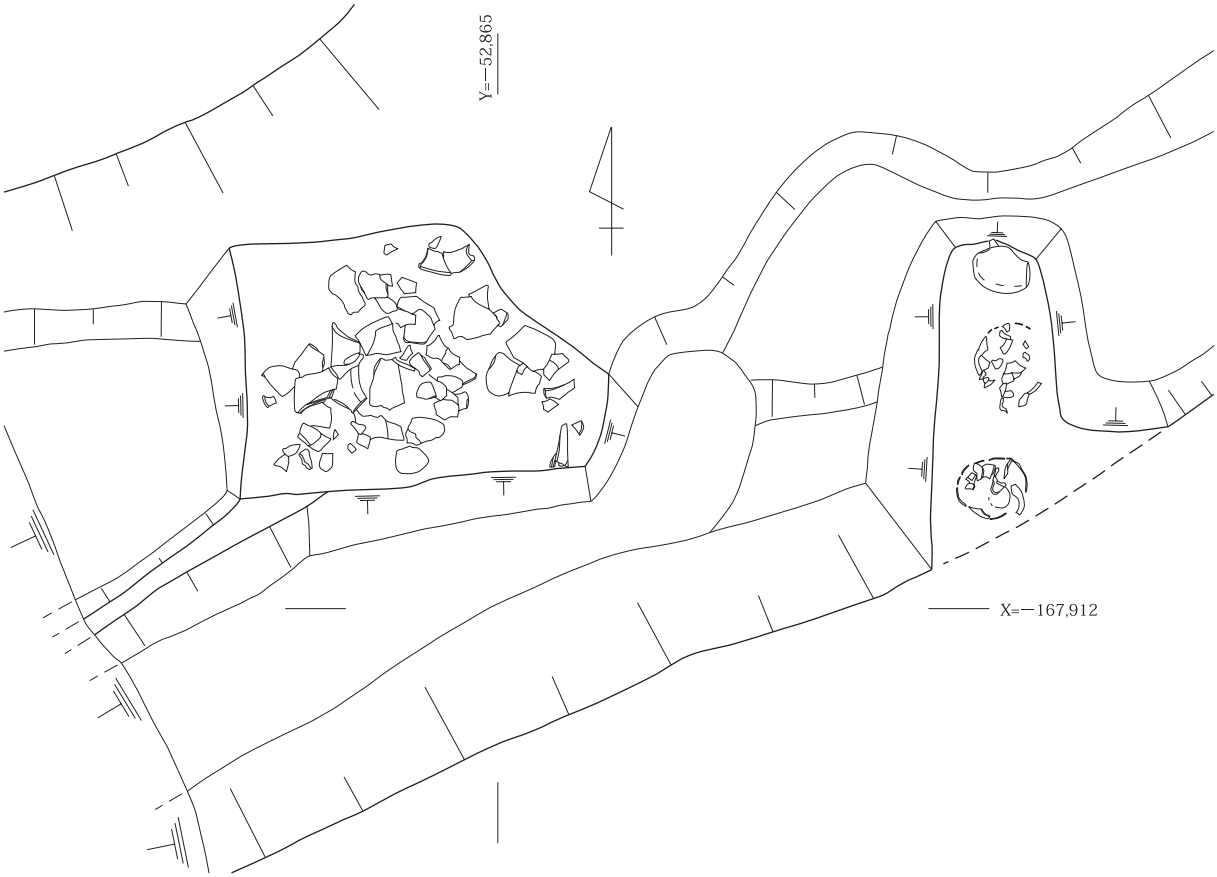
うした埋没状況は自然に起こったとは考えにくく、水田を造成する際に上半が破壊され、その破片を整理して埋められたものと考えるのが自然であろう。1035は甕である。口縁部から肩部の一部が残存するのみで器形は明らかでない。口縁部は胴部から短く外反し、口縁端部に平坦面つくる。外面は粗いハケメ、内面は細かいハケメで仕上げる。復元口径は9.9cm、残存器高は5.95cmで、残存率は５％である。焼成は良好で胎土は蜜、色調は外面と断面が7.5YR8/3浅黄橙色で、内面5YR7/6橙色である。残存率は２％である。1036は高杯で、脚部は欠損する。杯部は緩やかに内湾してたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。外面の口縁部下に一条の沈線をめぐらす。遺存状況が悪く、調整はほとんど観察できないが、外面の一部にミガキと思われる痕跡が認められる。復元口径15cm、残存器高は5.4cmで残存率は10％。焼成は良好で胎土は蜜、色調は内外面が5YR7/6橙色、断面は7.5YR8/1灰白色である。

西南溝からは1042、1043（第60図）を検出した。1042は壺である。胴部中央がまるくふくらみ、頚部は口縁部へ向かって外反し、口縁端部は上につまんで口縁端部に平坦面つくる。外面は頚部はハケ調整、胴部下半はミガキを施す。内面にはごくわずかハケメが観察できたが、指頭圧痕が残るのみである。復元口径17.6cm、底部径7.2cm、推定器高28cmを測る。焼成は良好、胎土は密で、直径１ｍｍ以下の砂粒を１％含む。色調は外面が5YR7/6橙色、内面が7.5YR8/4浅黄橙色で、残存率は40%である。胴部下半と口縁端部のかえりの部分に二次被熱の痕跡を認める。1043は甕である。胴の中央付近がもっとも膨らみ、口縁端部は上にややつまみ上げ、端面に平坦面を持つ。内面はあらいハケ調整で、胴部と口縁部の境界は強いヨコナデで仕上げている。外面胴下半はケズリの痕跡があるが、上半はタタキが薄く残る。復元口径は14.0cm、底径は9.8cm、推定器高は約20cmで、残存率は40％である。焼成は良好で胎土は蜜、色調は内外面・断面共に10YR8/2灰白色である。胴部下半と口縁端部下端に煤の付着が認められる。

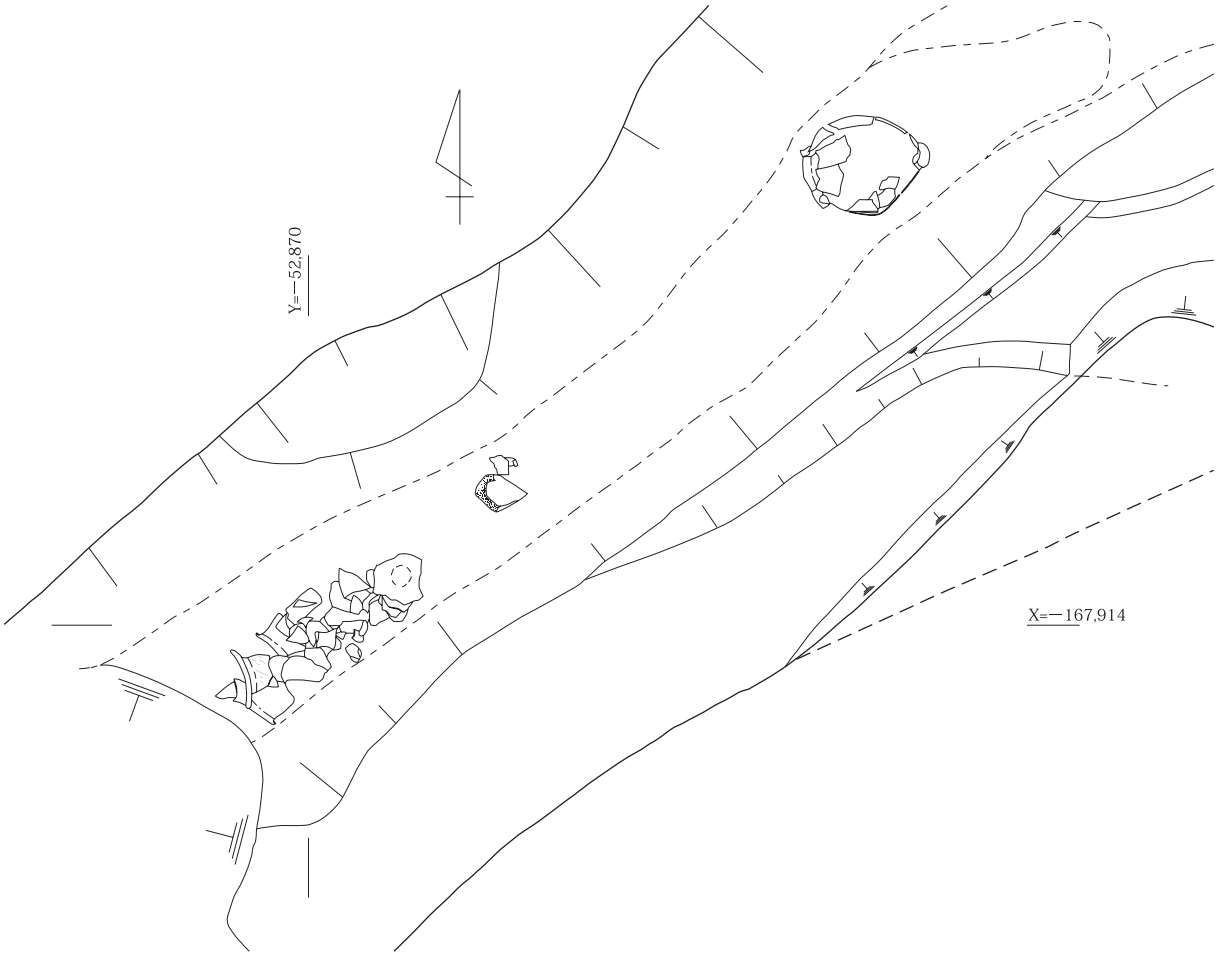


第61図　SZ03、SZ04、SZ05、SZ06（S=1/200）

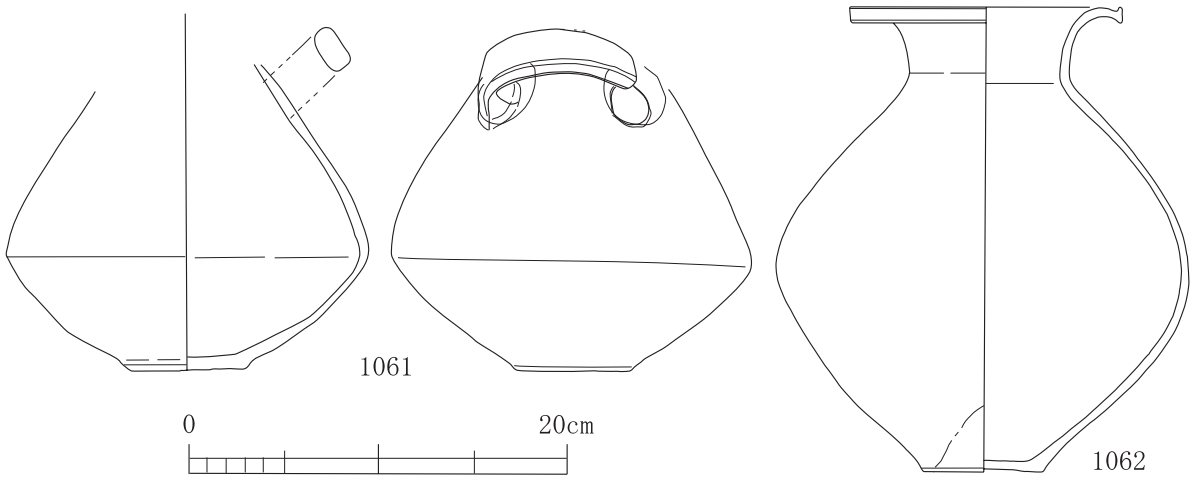
SZ03は長軸10.6m、短軸5.9mを測る方形周溝墓である。形状は長方形であるが、周溝は、東北溝がなく他の３面に存在しており、全周していない。長軸がN60°Eを指す。東南溝幅0.7m、西南溝幅0.7m、西北溝幅0.9m、長軸溝外端長11.3m、短軸溝外端長7.5m、遺物は西北溝、東南溝から多量に出土したが、西北溝はSZ02



第62図　SZ03 西北溝遺物出土状況（S=1/20）



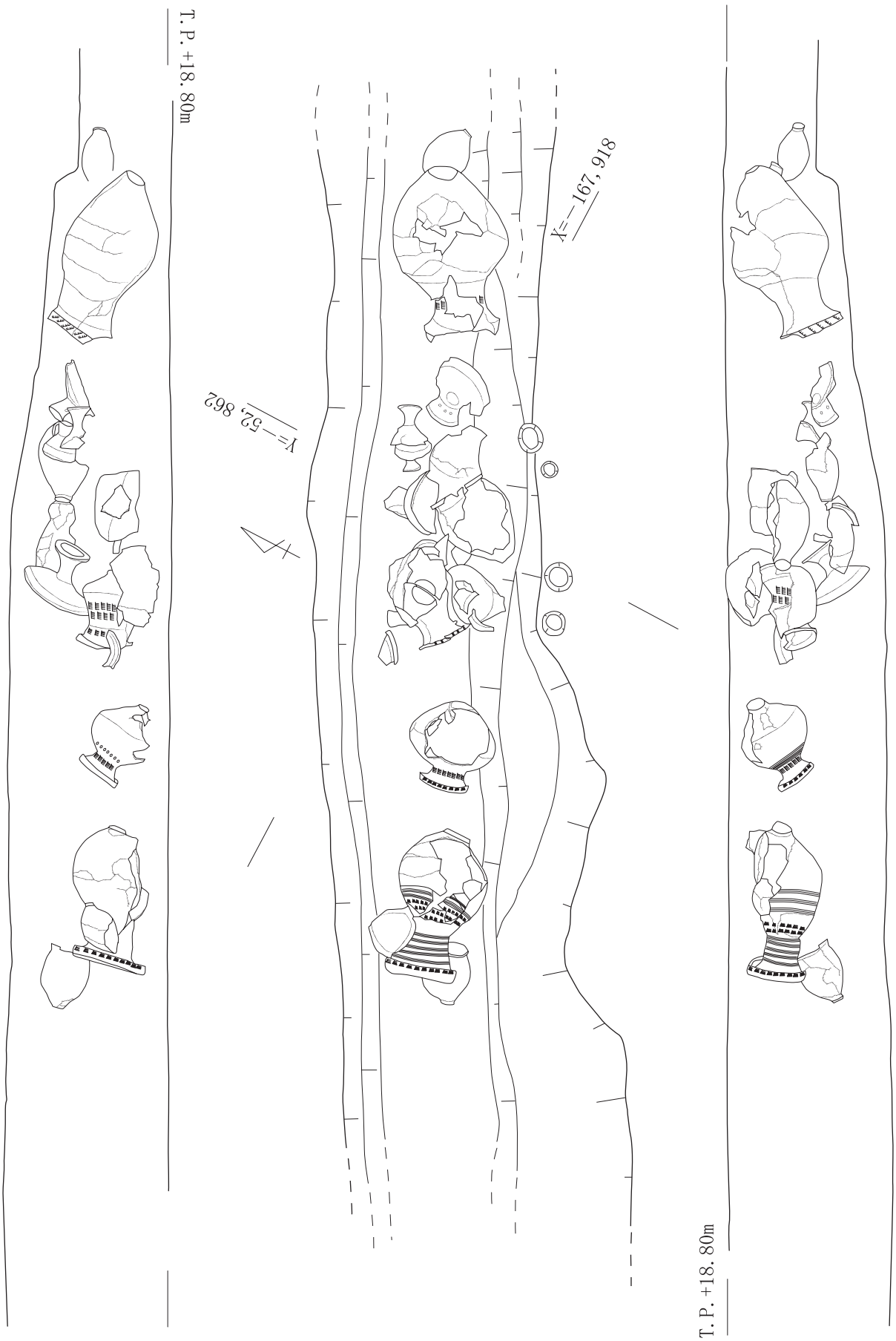
第63図　SZ04 西北溝遺物出土状況（S=1/20）



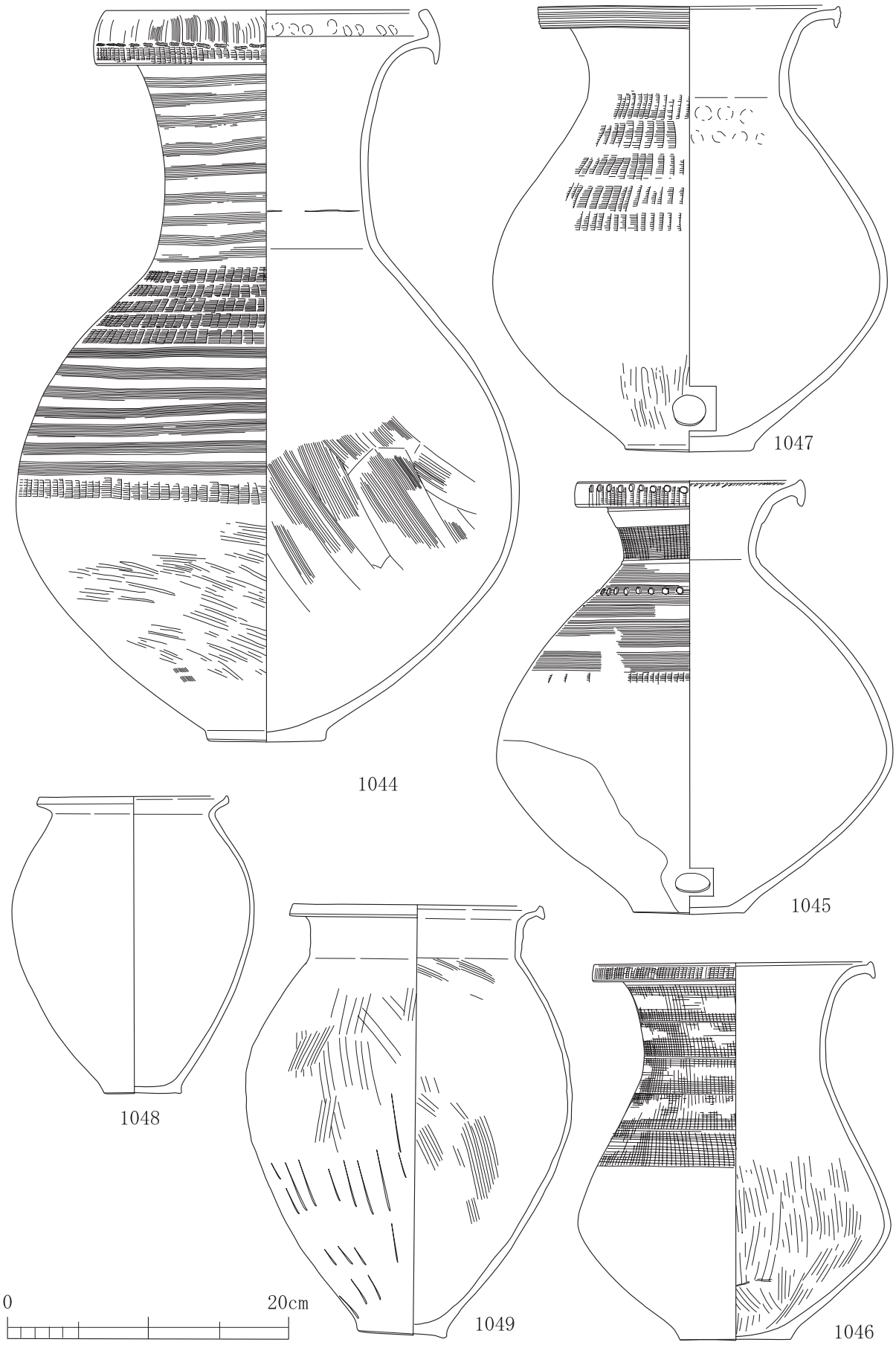
第64図　SZ03 西北溝出土遺物（S=1/4）

の東南溝と、東南溝はSZ05の西北溝と共有しているため、明確に分離できていない状況である。西北溝から出土した土器は1037 ～ 1041（第59図）、1061・1062（第64図）である。1037は短頸の広口壺である。球形の胴部から開いて立ち上がる頸部に水平近くまで外反する口縁部をつくる。口縁端部は下に拡張し、強くヨコナデする。体部は摩耗が進んでいるが、無文で、ハケメが微かに観察される。底部に黒斑がある。口径18.3cm、器高34.5cmを測る。胎土は灰黄色を呈する。1038は壺である。短く立ち上がる頸部から水平近くまで外反する口縁部をつくる。口縁端部は上下に拡張させ、ヨコナデしている。体部はなで肩で、最大径は胴部中央よりやや上にある。底部はヘラケズリ、胴肩部はハケメ、体部内面はハケメで調整する。底部を穿孔する。口径15.8cm、器高29.5cmを測る。1039は短頸の広口壺である。なで肩の胴部に外湾して立ち上がる口頸部をつくる。口縁端部は上下に拡張させてわずかに外傾する面をつくる。胴部はタタキの後ハケで調整する。内面は板ナデである。口径19cmを測る。胎土はにぶい黄橙色を呈する。1040は広口壺である。球形の胴部に短く立ち上がる頸部から外反する口縁部をつくる。口縁端部を上につまみ上げ、外傾する面をつくる。体部は摩耗しているが、無文で底部にヘラケズリが観察される。口縁部と肩部に黒斑が残る。口径16.1cm、器高32.4cmを測る。胎土はにぶい橙色から灰黄褐色を呈する。1041は甕である。胴部、底部から腹部に水平や右下がりのタタキ目が残る。底径5.2cm、器高は約28cmを測る。胎土は黄灰色～橙色を呈する。1061は無文の水差しである。1062は短頸の広口壺。器壁は摩滅している。強く外反させた口縁端部を上に摘み上げている。

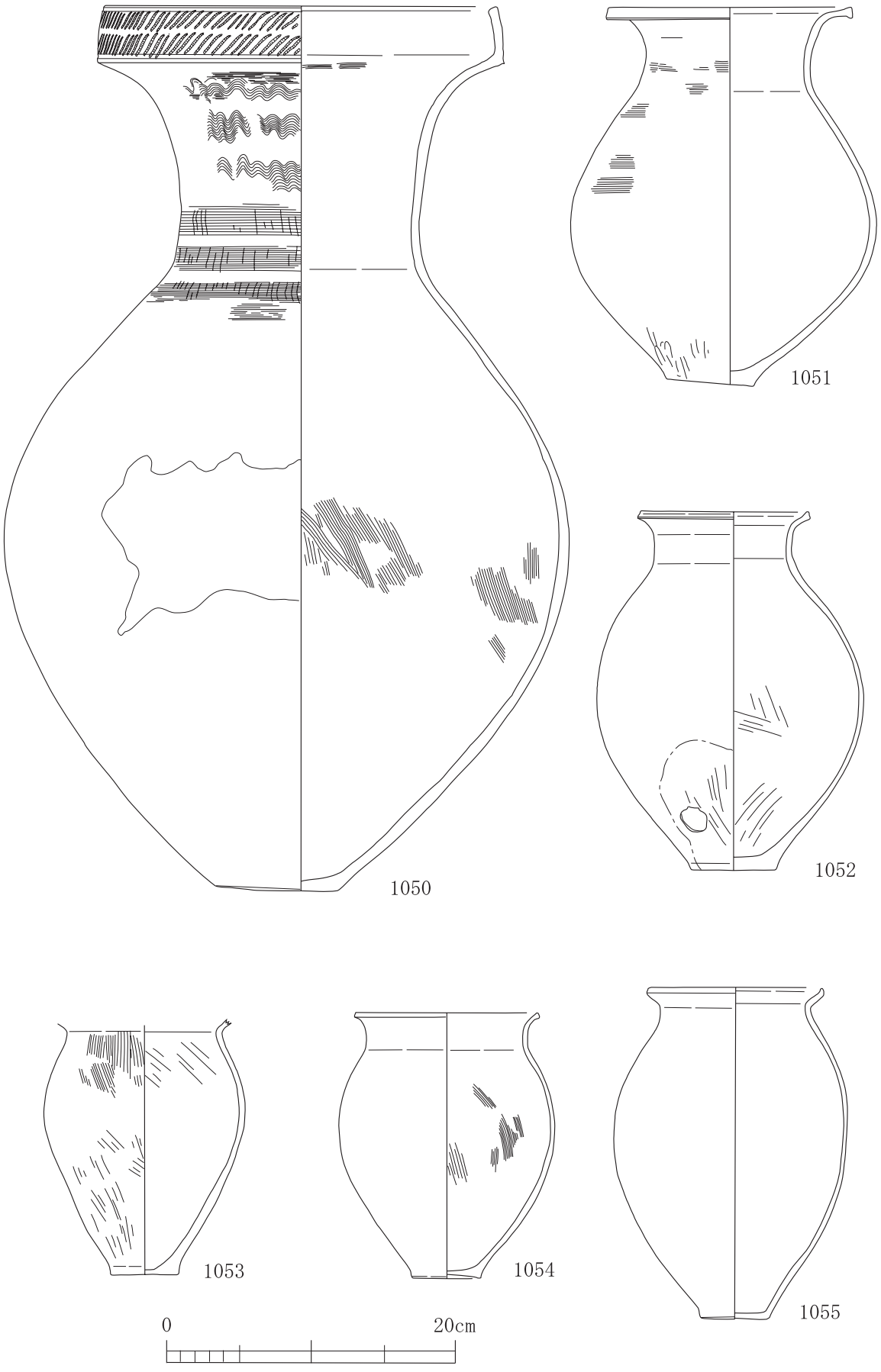
東南溝から出土した土器は1044 ～ 1060（第66 ～ 68図）である。約３ｍの範囲に壷・甕・高杯・台付鉢・水差など16点が横倒しになった状態で検出されており、溝に投棄された状態ではない。周溝墓自体が耕土直下で検出されており、墳丘の存在を考えて墳丘上から落下したことも考えられるが、その場合も土器の多くが口縁を一方向に揃って倒れこんだ状況からも考えにくい。このことから周溝内に土器を立ち並べた後、倒れたあるいは倒した状態で埋没したと推定される。土器の埋没底面の高さに違いが認められる。同一地点で土器が上下していることから、土器を樹立した行為が２度あったと推定することが可能である。これらの諸点を踏まえて土器埋没までの過



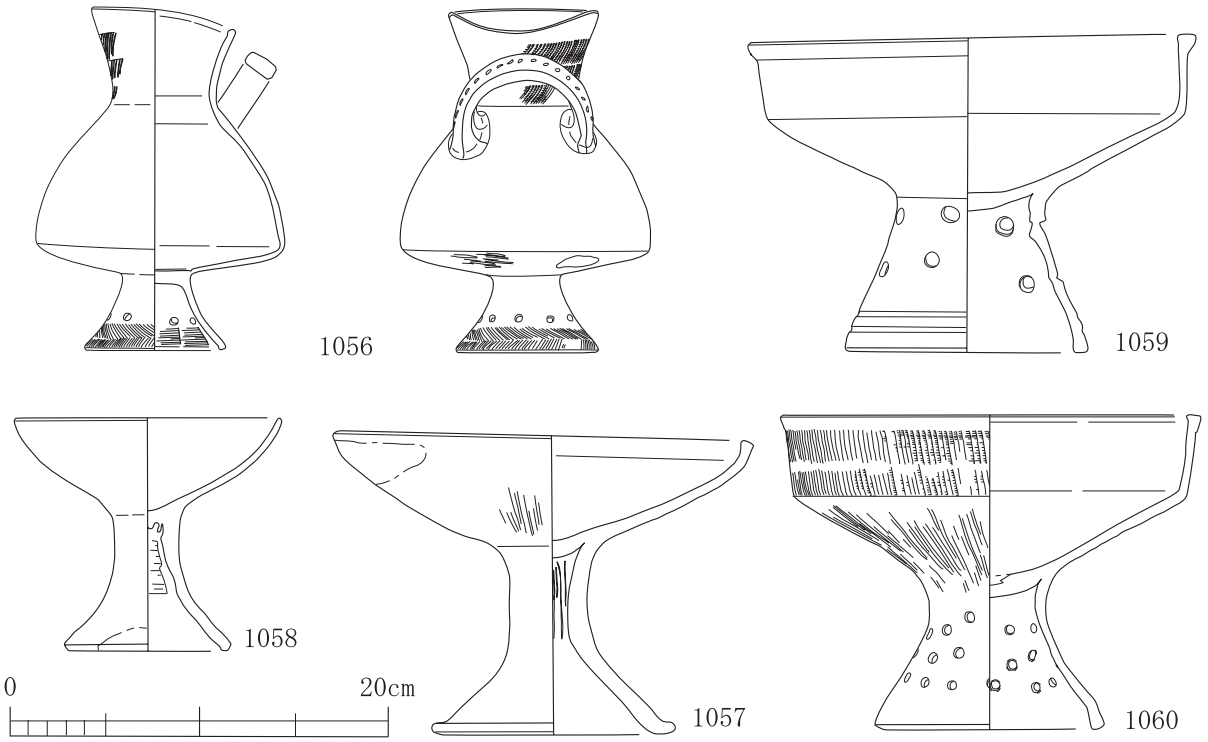
第65図　SZ03・04 東南溝、SZ05 西北溝遺物出土状況（S=1/40）



第66図　SZ03・04 東南溝、SZ05 西北溝出土遺物１（S=1/4）



第67図　SZ03・04 東南溝、SZ05 西北溝出土遺物２（S=1/4）



第68図　SZ03・04 東南溝、SZ05 西北溝出土遺物３（S=1/4）

程を復元すると、①周溝内に大型壷（1050）･壷（1051･1052）･高杯（1057･1058）･台付鉢（1059）･水差（1056）・甕（1053・1054・1055）の10点を樹立して何らかの祭祀的行為を行った。②時間的経過の後、周溝内が一定程度埋没してから、再び大型壷（1044）･壷（1045 ～ 1047）･甕（1048･1049）の６点を樹立して何らかの祭祀的行為を行った。その後、同様の行為が行われたかは分からない。他に周溝墓内で埋葬主体など関連する遺構は確認できなかった。ただし、中央付近でブロック土を含んだ広がりが認められた。墓坑の可能性も考えられるが、明確にできなかった。1044は受口口縁の壺である。球形の胴部に、やや開いて立ち上がる頸部から外反する口縁端部を内弯気味に上下に拡張する。口縁端部は縦描きの直線文と簾状文、頸部は９条の櫛描き直線文、肩部から胴部は櫛描簾状文５条と７条の直線文を巡らせ、最下段に簾状文を１条施している。底部はヘラミガキ、内面はハケメである。口径23cm、器高52.8cmを測る。1045は短頸の広口壺である。算盤玉状に膨らむ胴部から外反して立ち上がる頸部に口縁端部は下方に拡張させる。口縁部外面は簾状文の上に円形浮文を貼り付ける。口縁端部内面に櫛描列点文、頸部から胴部は櫛描の簾状文を５条巡らせているが、摩耗が進み観察が困難である。肩部にも円形浮文を１帯簾状文の上に貼り付けている。底部に穿孔がある。口径16cm、器高31cmを測る。1046は広口壺である。胴部中央で「く」字形に膨らむ胴部に、弱い締まりの頸部から外弯気味に立ち上がる口頸部をつくる。口縁端部は上下に拡張させる。口縁端部外面に１条､頸部から胴部に５条の簾状文を描く。外面は摩耗が進み調整は観察できない。胴部に大きな黒斑がある。底部内面はハケメ、胴部内面はナデで仕上げる。口径19.7cm、器高27.3cmを測る。1047は広口壺である。球形の胴部に開いて立ち上がる頸部から水平近くまで外反させる口頸部をつくる。口縁端部は上下に拡張し、４条

の凹線文を施す。頚部から胴部は、波状文と４条の簾状文を巡らせる。器壁は底部付近にヘラミガキが観察されるが、全体に摩耗している。底部に穿孔がある。口径21.5cm、器高32.2cmを測る。胎土は黄褐色で他地域の土器である。1048は甕である。胴部上半で膨らむ胴部に、「く」字形に外反する口縁の端部を摘み上げてヨコナデする。器壁は摩耗が進み、調整を観察できない。胴部に穿孔がある。口径13.4cm、21.4cmを測る。1049は甕である。やや膨らむ胴部から短く立ち上がり水平近くまで外反する口縁をつくる。口縁端部は上下に拡張させる。口頚部はヨコナデ、口径17.6cm、器高31cmを測る。1050は壺である。外傾して立ち上がる頚部から受け口口縁をつくる。口縁部外面に櫛描の列点文を２条巡らせる。頚部は３条の波状文と、頚部から肩部に３条の簾状文を描く。胴部に大きな黒斑、底部近くに穿孔がある。口径27.4cm、器高61.8cmを測る。1051は短頚の広口壺である。球形の胴部から開いて立ち上がる頚部に外反する口縁をつくる。口縁端部は上下にわずかに拡張している。体部は摩耗が進んでいるが、無文で、胴部上半にハケメが観察できる。口径16.8cm、器高26.7cmを測る。胎土は橙色である。1052は無文の広口壺である。球形に近い胴部から短く立ち上がる頚部を外反させる口縁をつくる。口縁端部をわずかに上につまみ上げ、外傾する面をつくる。器壁は摩耗が進んでいるが、底部外面にヘラケズリが観察できる。内面は炭化物が付着する。底部に穿孔がある。口径11.6cm、器高25.2cmを測る。胎土は黄灰色からにぶい橙色を呈する。1053は甕である。胴部上半に最大径をもつ。口縁部を欠く。胴部上半はハケメ、胴から底部はヘラケズリが観察できる。内面は摩耗している。残存高17.5cmを測る。1054は甕である。緩やかに膨らむ胴部に短く立ち上がる頚部を外反させて口縁をつくる。口縁端部をわずかに肥厚させている。胴部外面に大きな黒斑がある。内面はハケメで仕上げる。口径13.8cm、器高18.4cmを測る。胎土は浅黄色を呈する。1055は甕である。わずかに膨らむ胴部に「く」字形に外反する口縁端部を摘み上げてヨコナデして仕上げる。器壁は全体に摩滅し、調整は観察できない。口径13.4cm、器高21.5cmを測る。胎土はにぶい橙色。1056は台付き水差しである。底部付近で大きく張り出す胴部をもつ。開いて立ち上がる口頚部に櫛描の細かい列点文を３段、胴部は摩滅し、模様を復元できない。把手に刺突文を付ける。脚部は「ハ」字形に広がり透かし孔と裾端部に綾杉文を施す。口径7.8cm、器高18.2cmを測る。 外面はにぶい褐色を呈する。1057は高坏である。椀形の杯部に筒状の脚部から「ハ」字形に開く裾部を持つ。内外面とも摩耗が進んでいるが、杯部外面にヘラミガキを微かに確認できる。口縁部に黒斑がある。脚部内面は絞り痕が残る。裾端部をわずかに折り曲げ、面をつくる。口径22.6cm、器高16.1cmを測る。胎土は橙色から黄橙色を呈する。1058は高坏である。椀型の杯部に内弯気味に開く脚部をつくる高坏。裾端部は内傾し、接地面は小さい。脚部上端に杯接合時の刺突痕が残る。口径14.2cm、器高12.3cmを測る。胎土はにぶい橙色を呈する。1059は台付鉢である。「ハ」字形に開く脚部を持つ。脚端部はわずかに内弯させている。脚は２段の透かし孔と、下端近くに２条の沈線文を巡らせる。杯部は摩耗が進み、模様や調整を観察できない。口径23.5cm、器高17.0cmを測る。1060は台付鉢である。口縁部外面に２条の簾状文、脚部は３段の透し孔を開ける。

SZ04はSZ03の西北溝が埋まった後SZ02東南溝部分を掘り直して西北溝として造り直した方形周溝墓である。溝の位置を変更していることから異なる方形周溝墓と認識し、SZ04とした。長軸の考え方をどうするかで長さが相当に変化する。西北溝がSZ03より短くなっていることから東南溝の長さを長軸とした。その場合は長軸9.1m、短軸7.0mの長方形となるが。周溝は東北溝がなく、全周していない。長軸がN60°Eをさす。東南溝幅1.0m、西南溝幅0.7m、西北溝幅0.6mを測る。長軸溝外端長9.8m、短軸溝外端長8.6mとなる。長軸溝外端長をSZ03の東北端までとすると11.3mを測る。SZ03の西北溝が埋まった部分で主体部を１基検出。ST03は隅丸長方形を呈する土壙である。西北溝から約１m、東北溝から約３mの点が主体部の中心である。主軸はN35°Eを指す。長軸1.3m、短軸0.6mを測る。木棺痕跡はなく、人骨等の検出も無かったため、主体部かどうかは不明であるが、土壙の位置形状から主体部として報告する。遺物はSZ03で説明したとおり西北溝、東南溝から多量に出土したが、西北溝はSZ02の東南溝と、東南溝はSZ05の西北溝と共有しているため、明確に分離できていない状況である。

SZ05は長軸3.3m、短軸3.2mを測るほぼ正方形の方形周溝墓である。溝は東北溝が明確ではなく、２ヵ所で途切れる。西北溝はSZ03・04の東南溝と共有している。長軸がN35°Wを指す。東北溝幅1.0m、東南溝幅0.5m、西南溝幅1.0m、西北溝幅0.8m、長軸溝外端長4.6m、短軸溝外端長5.2mを測る。中央から僅かに西北方向にずれたところで主体部を検出した。ST04は長軸1.7m、短軸0.7mを測る長方形の土壙である。周溝簿の長軸と平行し、長軸がN35°Wを指す。木棺等の痕跡は確認できず、人骨等の検出も無かったため、主体部かどうかは不明であるが、位置と形状から主体部とした。遺物は西北溝から多量に出土したが、西北溝はSZ03の東南溝と共有しているため､明確に分離できていない状況である。南溝からは1063（第70図）を１点出土した。1063は甕である。「く」字形に外反する口縁部をつくる。口縁端部は丸く仕上げる。体部は主に水平方向のタタキ目である。

SZ06は長軸10.4m、短軸検出長4.0mを測る方形周溝墓である。長軸がN50°Wを指す。西南部が調査区域外にのびるため本来の長軸等は不明であるが、検出部分からのみ長軸を決めている。溝は西南溝が不明であり､東北溝と東南溝･西北溝の一部を検出した。東北溝幅1.0m､東南溝幅0.5m、西南溝幅1.0m、長軸溝外端長4.6m、短軸溝外端長5.2mを測る。他の方形周溝墓よりも溝幅が広く、規模も大きいようであるが、全体の規模は不明である。主体部は検出しなかった。東南溝からは1064 ～ 1065（第70図）の土器を出土した。1064は広口壺である。内傾気味に立ち上がる頚部から水平近くまで外反させる口縁を持つ。口縁端部はわずかに上下に拡張させる。器壁は全体に摩耗が進み、調整は観察できない。口径14cmを測る。1065は高坏である。椀形の杯部から水平近くまで伸びる口縁端部を垂下させるもの。口縁部内面の突帯は内傾する。脚部は外弯気味に緩やかに広がり、端部はわずかに肥厚させる。杯部は内外面ともヘラミガキ、脚部は摩耗しているが､内面はヘラケズリである。口径27.7cm､器高22.2cmを測る。胎土はにぶい橙色である。

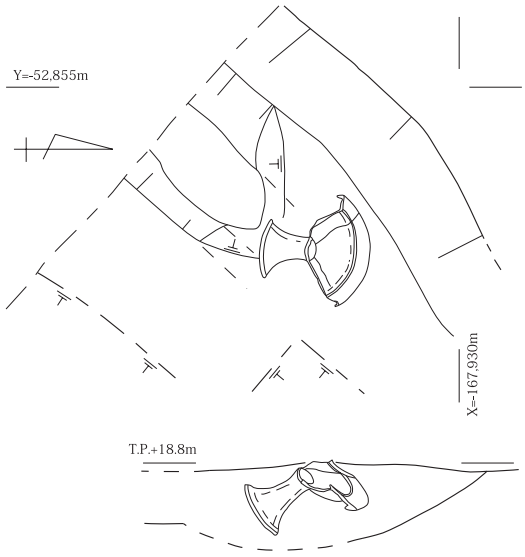
方形周溝墓出土遺物以外にも02020調査で1068 ～ 1073（第70図)、03017調査で1066・1067（第

70図）の土器が出土した。

６基の方形周溝墓は溝を共有して築造されているのであるが、同時に造られたものではなく、順次造られたものである。方形周溝墓の配置から考えると、６基の中ではSZ03が最も古く、SZ02が西側にSZ03の西北溝を共有して造られる。次にSZ01がSZ02の西北溝を共有して、築造していくことがわかる。SZ03、SZ02、SZ01と順に築造していくのであるが、これらの方形周溝墓の東から北側にNR11の川が流れているため、川の蛇行に沿って数mづつ西に、さらに長軸を約５・10度と西へ振りながら築造されている。その間にSZ06も築造される。そのため、SZ01の次の方形周溝墓はSZ03を造り直すことにより、SZ04とする。その後、SZ04とSZ06の一部を利用しながら、SZ05が築造されたと考えるのが適当であろうと思われる。SZ03とSZ04を同じ墓と考えてもよいのであるが、ST03がSZ03の西北溝が埋まった後に掘削されていること、SZ04の西北溝がST03の外側をまわること等から単純に溝を清掃して、利用したのではなく、別の墓として造り替えたと考えた。

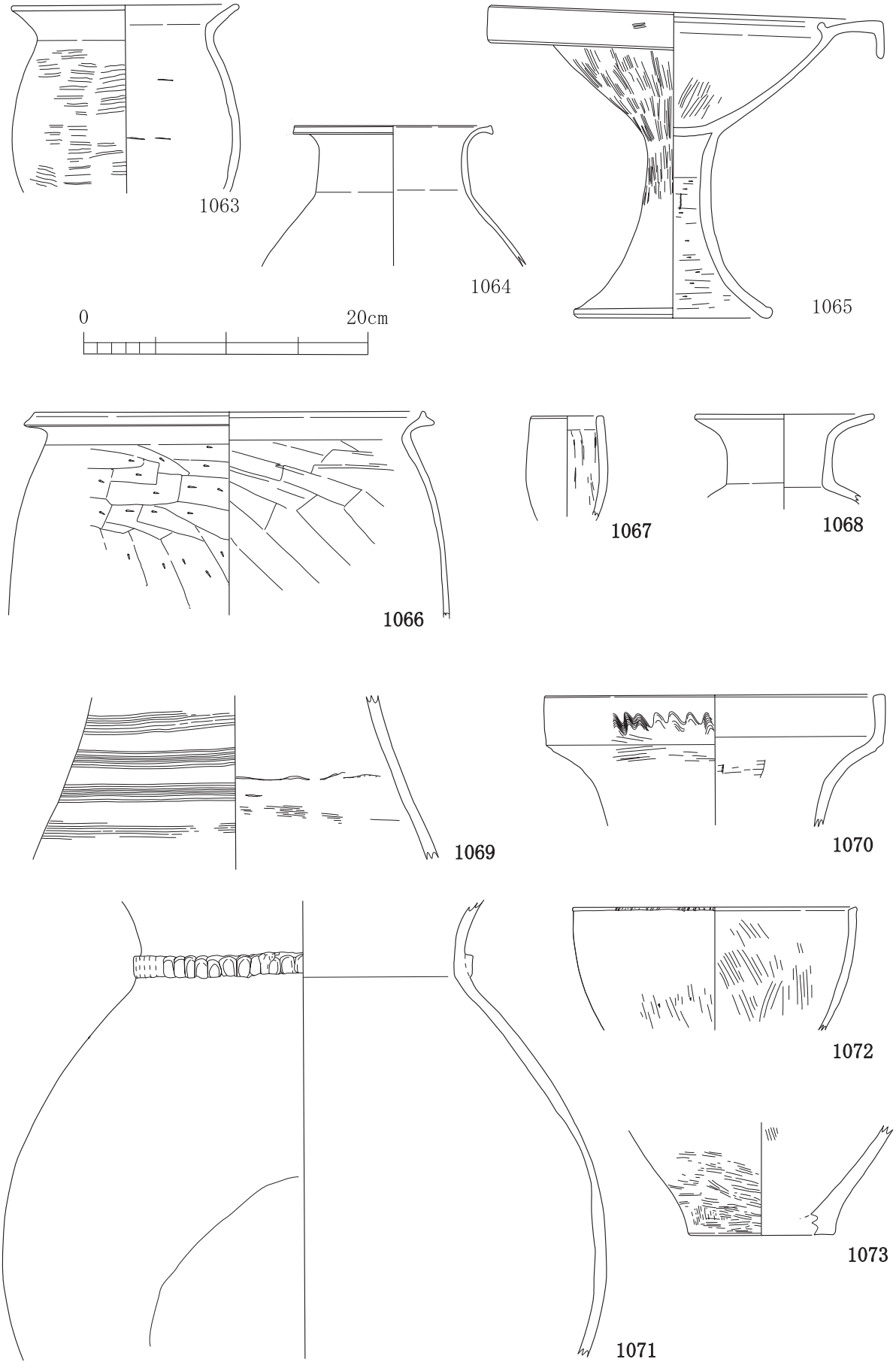
SZ01東南溝・SZ02西北溝、SZ02東南溝・SZ03・04西北溝、SZ03・04東南溝・SZ05西北溝はそれぞれ溝を共有することから、出土遺物がどの方形周溝墓に伴うのか明確にできていないので出土状況等から以下のように考えた。

SZ01東南溝・SZ02西北溝の遺物は1024 ～ 1029の６点である。溝の中央部分からSZ02寄りに出土しており、SZ01に近いところにはない。共有する部分の溝の形状は、SZ01の東南溝南端部よりも幅が約0.5m広くなっている。SZ02の西南溝から続くようにSZ01を抉っている。築造順序でも述べたようにSZ02が先にSZ01が後に築造されたのである。SZ02の西北溝の外端部を埋めてSZ01が築造されたのである。それはNR11があったために、築造場所にゆとりがなかったためと考えられる。築造順序の逆は考えにくい状況である。となると共有する溝の中から出土した遺物は最下層からではなく、中・上層からであることから､SZ01に伴う遺物と考えるのが適当であろう。ただ、第52図の1025・1027、第53図の1024・1029は溝の中央部分であるとするとSZ01に伴う遺物であろう。第53図の1028は溝の中央部分と考えると溝幅が広くなるため、1026はSZ02の肩部に近いため、SZ02の遺物と考えてもよいのかもしれない。

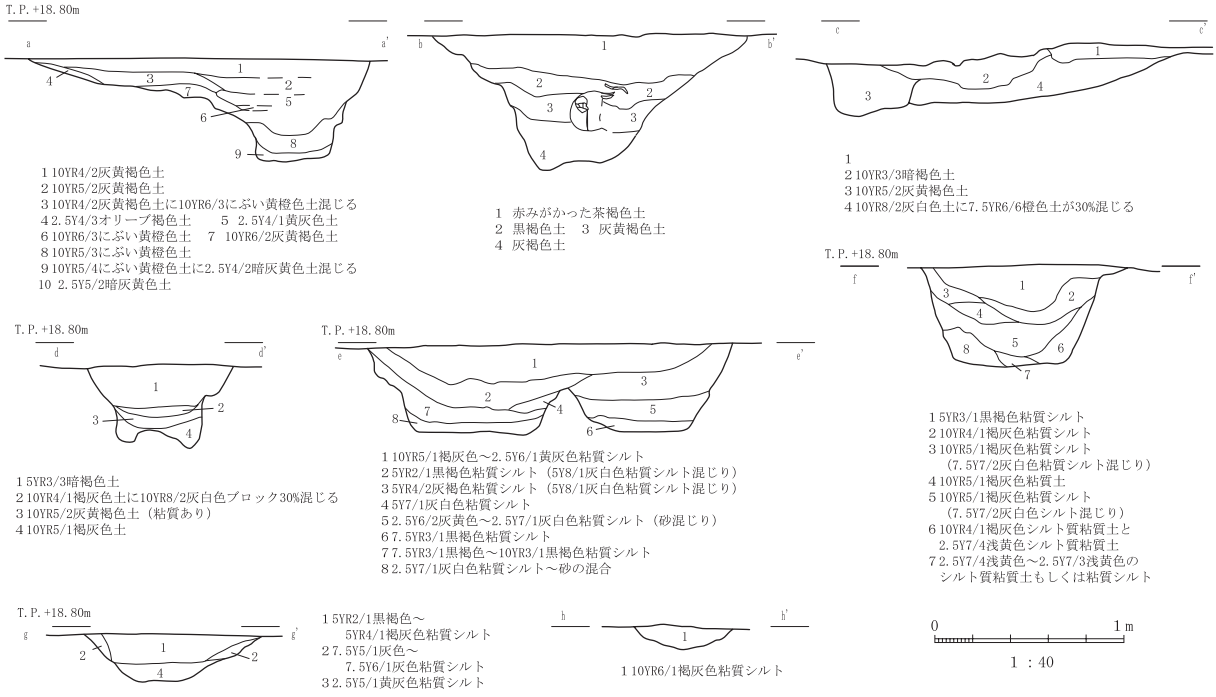


第69図　SZ06 東南溝遺物出土状況
（S=1/20）

SZ02東南溝・SZ03・04西北溝出土遺物は基本的にはそれぞれの溝から出土している。第62図の右の遺物（第64図　1061・1062）はSZ03の西北溝内出土遺物と考えてよい。第62図の左の一群はSZ02の東南溝の上にあるが、SZ03・02の溝が埋まってから、掘りなおされたSZ04の溝の上に掘り残した状態で検出してい



第70図　SZ05、SZ06、02020調査－１・２・３区、03017調査出土遺物（S=1/4）

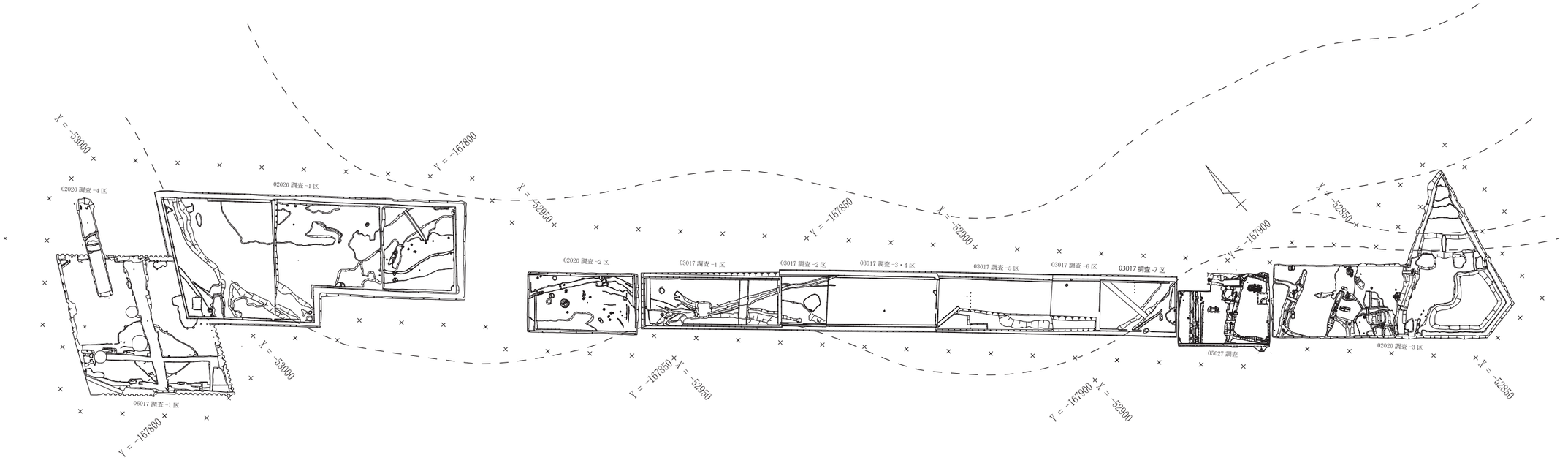


第71図　周溝埋土断面（S=1/4）

る。調査で任意に掘残した部分に遺物があることから、SZ02の東南溝内よりもSZ04の西北溝内出土と考えたほうが適当であろう。第63図の遺物は掘削しなおされたSZ04の西北溝内にある。この部分の遺物はSZ04の遺物と考えるのが適当であろう。

SZ03・04東南溝・SZ05西北溝出土遺物は第66 ～ 68図の17点であるが、第68図の1060は他の16点からは離れた位置での出土である。大きく２層に分けられ、大型壷１点・壷２点・高杯２点・台付鉢１点・水差１点・甕３点の10点が下層から出土した。上層から大型壷１点・壷３点・甕２点、少し離れた地点で台付鉢１点を出土した。下層から出土した10点の内甕（1053）１点が上層出土大型壷（1044）の下から出土しており、位置的にSZ05の溝とは考えにくい。残りの９点は位置的にはSZ05の溝内と考えられなくもないが､甕（1053）と同一層からの出土であることから、SZ03もしくはSZ04に伴う遺物と考えるのが適当であろう。下層では大型壷・壷・甕・高杯・台付鉢・水差、上層は高杯・水差は欠落しているが大型壷・壷・甕・台付鉢の主だった機種が揃って供献されている。下層の土器の組み合わせが弥生時代中期後半の府中遺跡での葬送儀礼に伴って供献された物の種類と量を明らかにしてくれることになるのかもしれない。

（伊藤文彦・亀島重則・藤澤眞依）



第72図　02020調査、03017調査、05027調査　遺構平面図、航空写真（S=1/750）

第５節　弥生時代後期から古墳時代の遺構と遺物

中近世の生活面から0.2 ～ 0.3m下がった、06区ではT.P.17.5m、02020－１区、２区ではやや低く12.3m、00173－１区では17.8m前後の面で弥生時代後期から古墳時代の遺構が検出される。02020－１区、２区では弥生時代前期頃の河道の上に遺構が形成されるため、やや低くなっているが03017－１区では周囲よりやや高くなった砂混り土の上で遺構が見つかったため、02020－２区に比べるとレベルが高くなったのであろう。

06017－１区（第73 ～ 75図）

中世～近世初頭の遺構面を掘削し除去したT.P.17.5m付近で４基の遺構を確認したため、遺構面として認識した。当遺構面は調査区の北東側から南西側に向けて低くなる地形である。

当遺構面のベースは灰色砂礫層と灰黄褐色砂質シルト層からなる。灰色砂礫層は06017－１区北側（第73図の灰色部分）に厚さ0.3 ～ 0.4mほど堆積しており、かつての自然流路であろう。それより南側では砂が多く混ざり、層の厚さも減じる。この砂礫層を覆うように灰黄褐色砂質シルトが堆積し、遺構が掘削されていた。

SD06、SD07は調査区北東部で検出された遺構で、SD06はその形状から北流する溝と思われる。SD07は西側肩部のみが検出されただけであり、全容は不明である。深さは両方とも約0.2mであっ

第73図　06017－１区　古墳時代の遺構平面図

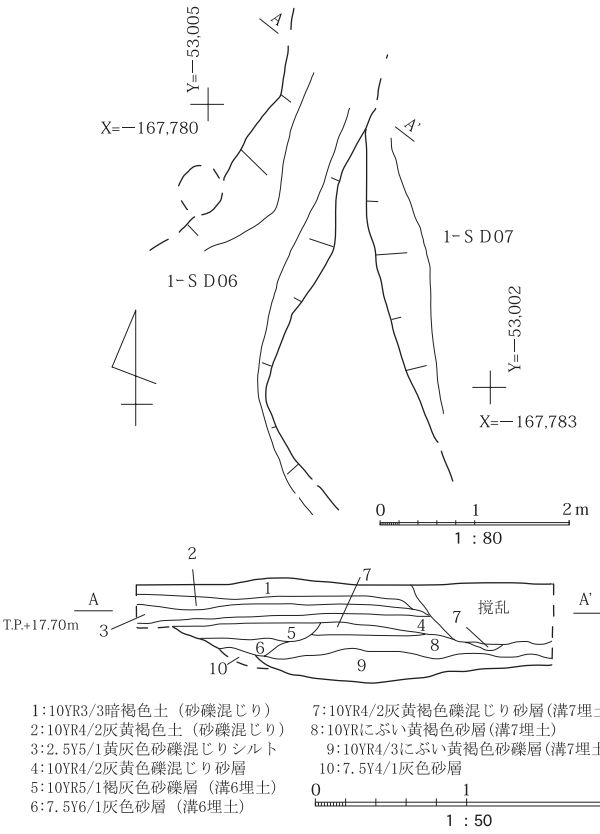
た。SD07は土層観察から幅1.7m以上の遺構であったことがわかる。埋土はともに砂礫層であり、SD07から土器体部の小片が出土した。

SD08、SD37は調査区南側で検出された２条の溝である。SD08は南東から北西方向に検出された長さ８ｍ幅１ｍ深さ0.2ｍの溝である。SD32はやや湾曲する南北方向の溝で、検出された長さ約4.5ｍ幅0.8ｍ深さ0.1ｍである。その北端は残りが悪く断定できないが、SD08と重複しているように観察された。

両遺構の埋土はいずれも黄褐色の砂礫混じり土あるいはシルトで、SD08より土器の小片が出土したが、時期は特定できない。

これら遺構埋土より出土した遺物から直接時期を知ることは難しいが、灰色砂礫層の底付近より小型丸底土器（第75図1082）が出土している。

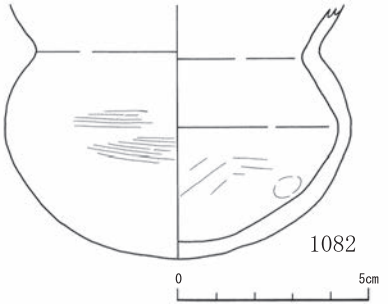
また、06017－２区でも同時期と思われる灰色砂礫層と灰黄褐色砂質シルト層を確認している。06017－２区では灰黄褐色砂質シルト層から古墳時代中期後半と思われる須恵器が出土しており、その成果から当遺構面の上限を古墳時代後期頃としておく。



第74図　06017－１区　SD06、SD07平面図・断面図

02020－１区（第76、77図）

この調査区では耕土を除去し、黄灰色土を約0.3～0.4ｍ掘り下げた面、南東でT.P.17.5m、約45ｍ離れた西端でT.P.17.25ｍを測る砂質土上面で、弥生時代後期から古墳時代の土器を含む河道や溝、土坑を検出した。



第75図　06017－１区
砂礫層出土土器実測図

SK11は調査区の西端で検出した歪な土坑である。西側が調査区外に延びているが、大きさは南北1.4ｍ、東1.15ｍ以上、深さは0.2ｍを測る。弥生時代後期末から古墳時代はじめ頃の土器片が出土している。

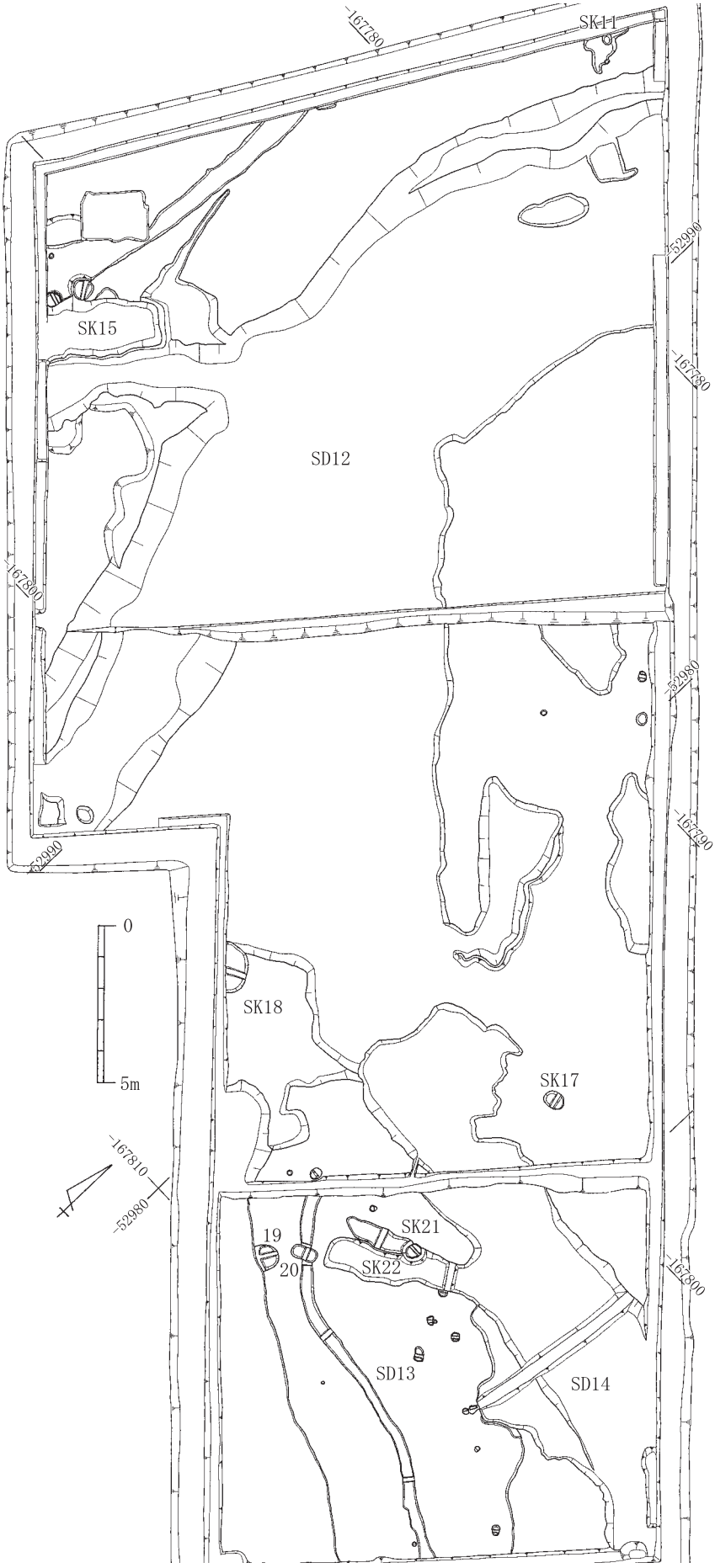
SD12は調査区西部で南北に流路を持つ自然流路で、幅は南端で５ｍ、北端で約８ｍ、深さは

約１ｍを測る。埋土は上層が灰色シルト、下層が黒褐色シルト、最下層は青灰色粘土である。上層埋土から弥生時代後期末から古墳時代前期頃の土器が出土しているが、小破片のみで、図化できるものは無かった。

SD13は調査区南部、X=－167813m付近で検出した幅0.4m、深さ約0.08mを測る溝である。この調査区は３分割して調査を行ったが、南西端の長さ12mの範囲のみで確認できた。それ以西では削平されたのか、浅くなって消滅したのか遺構を確認できなかった。

埋土からサヌカイト片が出土した。

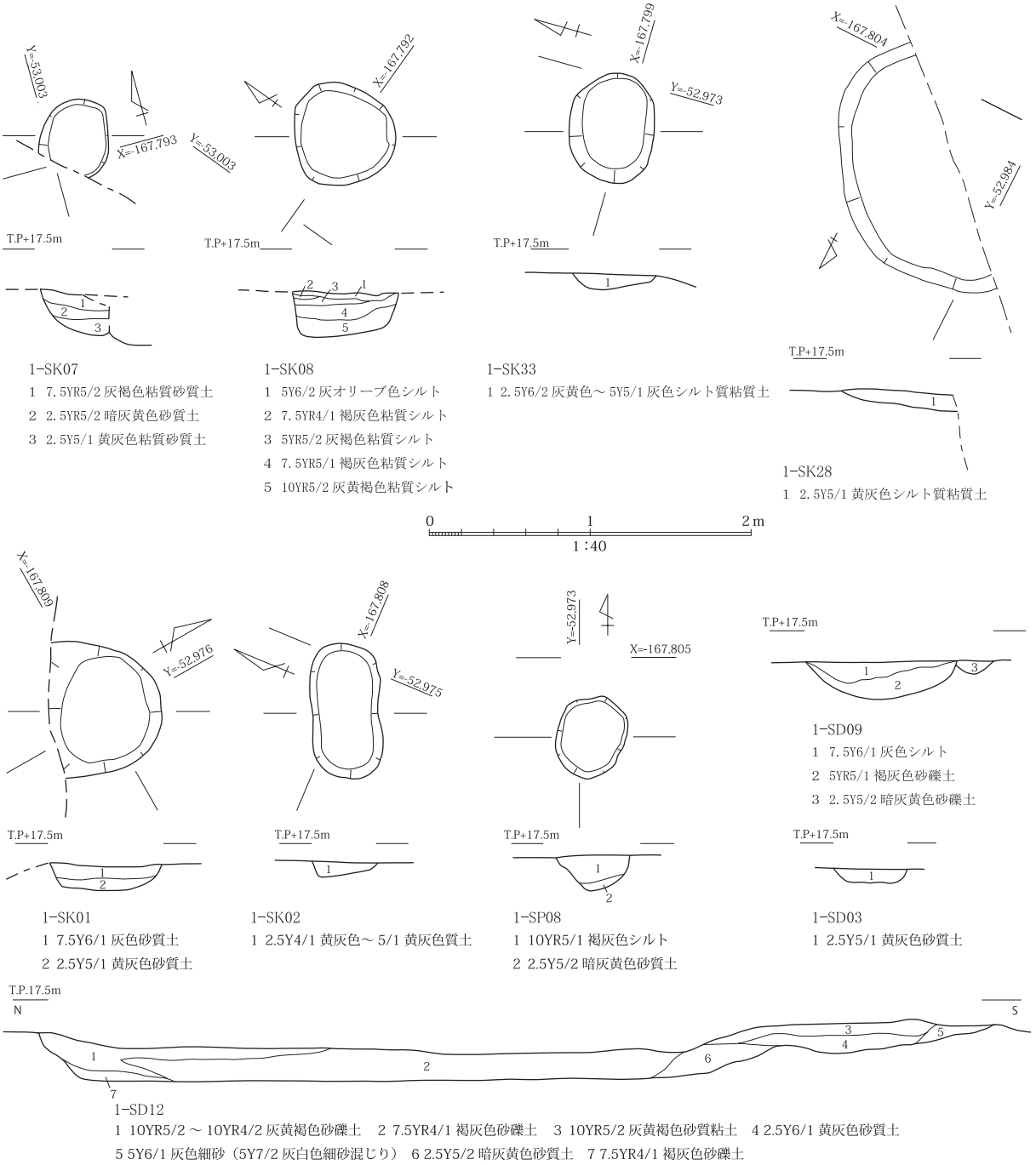
SD14はSD13の北側で検出した東西方向の河道である。幅5.9m、深さ0.2mを測る。西側は浅くなり、SD12に合流する。埋土は灰黄褐色砂礫、褐灰色砂礫などで、洪水により短期間で埋没した河道であろう。土器小片が



第76図　02020－１区　弥生時代後期から古墳時代の遺構平面図

出土しているが、時期は特定できない。

SK15は西北端近くで検出した土坑で、南側は調査区外に広がる。大きさは0.4m×0.4m以上、深さ0.2mを測る。SK16はSK15の北側で検出した丸みを持った三角形の土坑で、大きさは0.65m×0.65m、深さ0.3mを測る。埋土は褐灰色粘質シルトである。SK17は調査区中央の北よりにある楕円形土坑で、長径0.7m，短径0.5m、深さ0.1mを測る。SK18は調査区中央南西側にある土坑で、南側は調査区外に広がっているが、1.6m×0.7m以上、深さ0.1mを測る。SK19は調査区の南部、X=－167809m付近で検出した土坑で、西南は河道により切られているが、規模は0.85m×0.7m以上、深さ0.2mを測る。埋土は黄灰色砂質土と灰色砂質土の２層に別れる。



第77図　02020－１区　弥生時代後期から古墳時代の遺構平面図・断面図

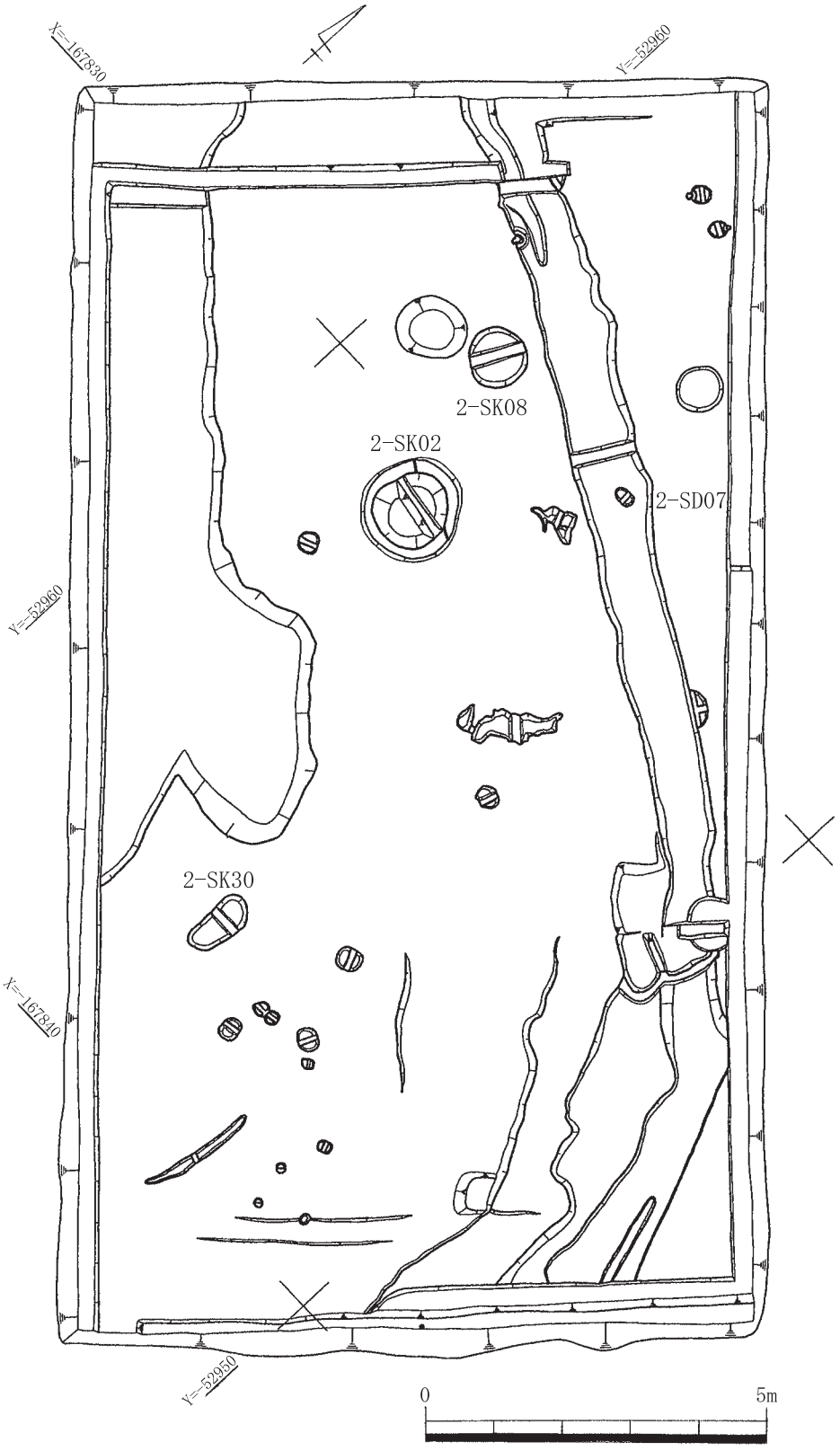
SP20はSD13埋没後に掘られた長径0.85m、短径0.4mの楕円形土坑で、深さは0.05mを測る。

埋土は黄灰色土である。SK21はSD14の西側で検出した小土坑で、SD22を切って掘られている。長径0.45m，短径0.4m、深さ0.25mを測る。埋土は褐灰色土ある。

SD22はSD14から西に走る幅1.0 ～ 1.2mの溝で、約５mで途切れる。深さは0.2mを測る。

この面で検出した遺構から弥生時代後期末頃から古墳時代後期頃までの土器が出土しているが、小片のみで、時期を絞れない。

ここでは弥生時代後期から古墳時代後期と幅を持たせて報告しておく。



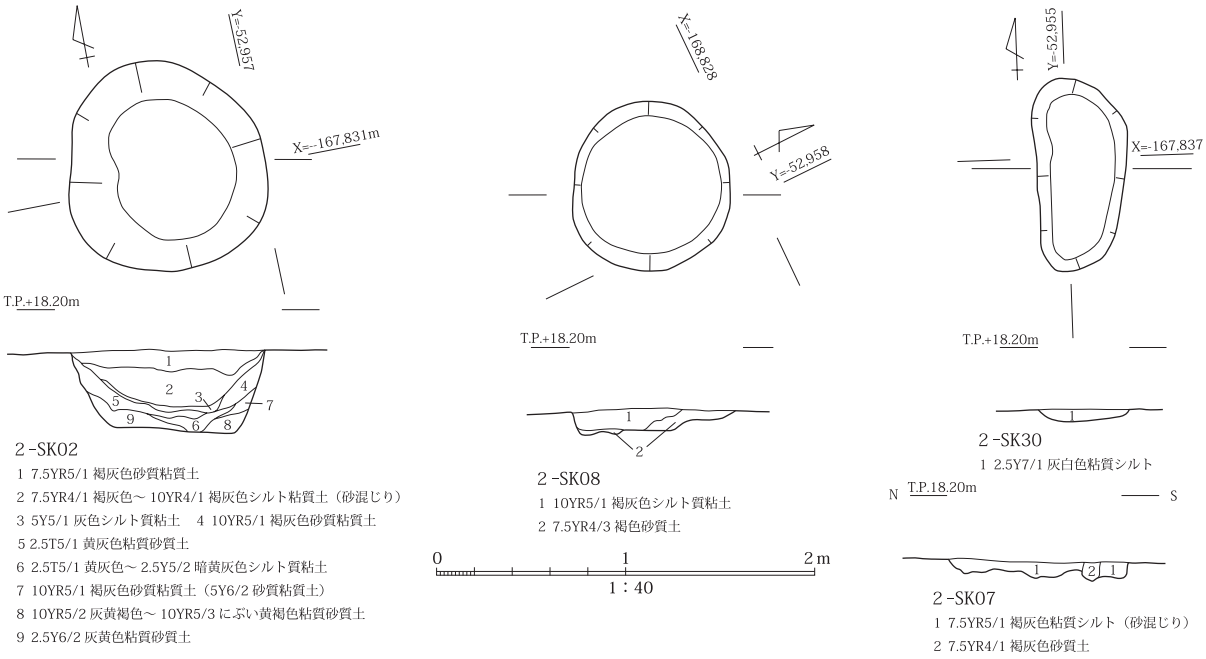
第78図　02020－２区　弥生時代後期から古墳時代の遺構平面図

02020－２区

〈第78図〉

02020－１区と幅約４mの里道を挟んで東南側の調査区である。旧耕作土、床土の下に薄く黄灰色土が堆積するが、この下面、T.P.17.8m 付近で弥生時代後期から古墳時代の遺構を検出した。

SD07は調査区北東側を弧を描くように掘られた溝で、幅1.0m、深さ



第79図　02020－２区　SK02、SK08、SK30、SD07平面図・断面図

0.15mを測る。埋土は褐灰色シルト～粘質土である。03017－１区との関係から、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と考える。

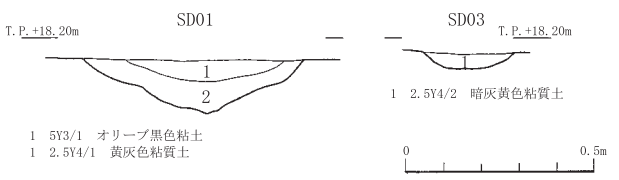
SK08はSK20の北２mにあるほぼ円形の土坑で、直径0.8m、深さ0.15mを測る。埋土は褐灰色シルト質粘土である。SK30は調査区南東部、X=－67837m、Y=－52955mで検出した長径1.0m、短径0.5m、深さ0.08mを測る楕円形の土坑で、埋土は灰白色粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

03017－１～３区の遺構（第82図）

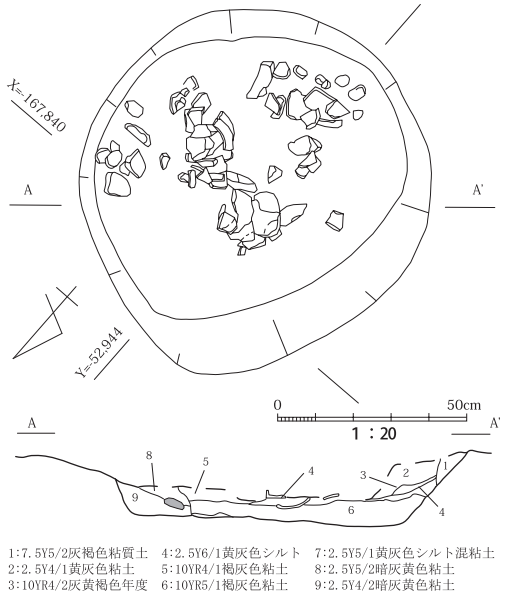
03017調査では、03017－１区でT.P.18.2m前後の堆積する耕土を除去すると須恵器や土師器の小片を含む黄橙色～灰黄色砂礫層や褐灰色砂質土～シルト層が約0.2mの厚さで観察されるが、この土を除去した面で弥生時代後期から古墳時代前期の細かく砕かれた土器を多く含む灰褐色砂混粘質土が堆積している。土器は脆弱で土壌と変わらない固さだったので、注意深く徐々に掘り下げて行く過程で、周囲より灰色粘土が多く堆積した溝が観察された。また、この遺構が途切れた北側約２mの所で、弥生時代後期の土坑を検出した。

また、03017－２、３区では旧耕土、褐灰色粘土を除去した灰色粘土（NR11の埋土）の上面で溝SD01の続きが観察できた。

SD01（第80図）は３区北西端の北東端、X=－167860、Y=－52920から北北西方向に走る溝で、１区中央で西に屈曲し浅くなっている。溝の幅は北東端で0.85m、１区で1.25m、深さは0.3mを測る。埋土は暗灰色溝の上層に弥生時代後期末から古墳時代前期頃の土器が出土したが、非常に脆弱で硬さが土壌と変わず、また、



第80図　03017－２区　SD01、SD03断面図



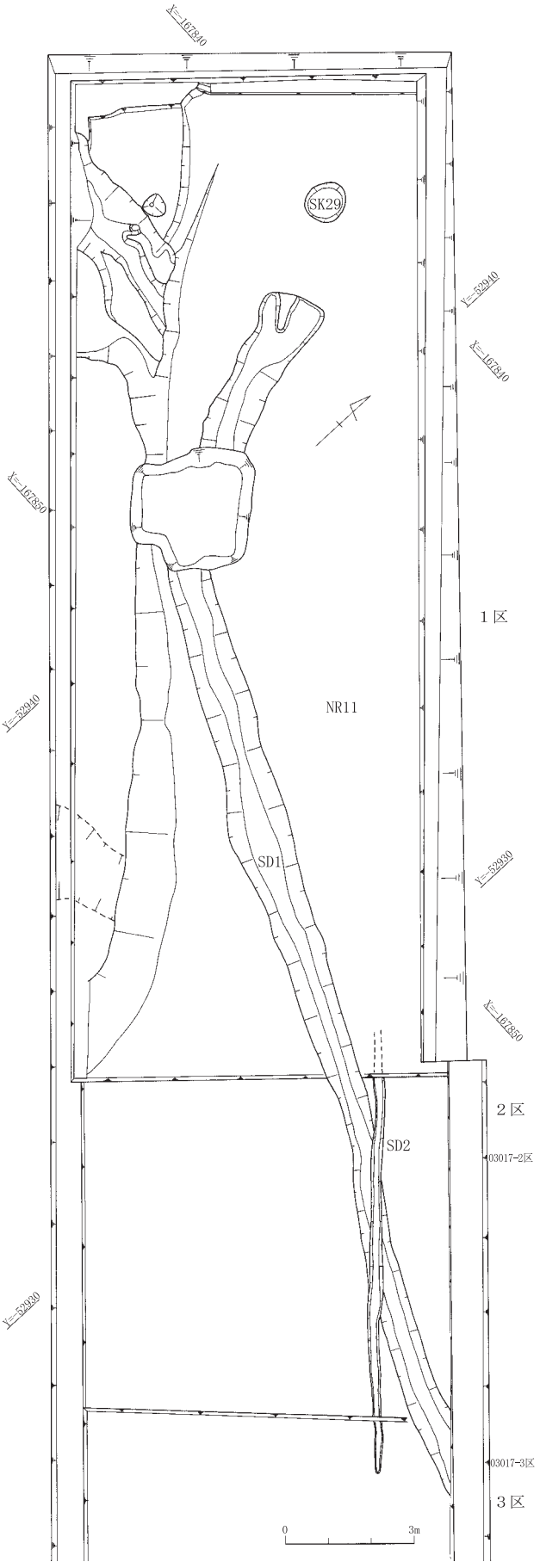
第81図　03017－１区　SK29平面図･断面図

意図的に砕いて投棄されたのか、良好な破片は殆ど無かった。

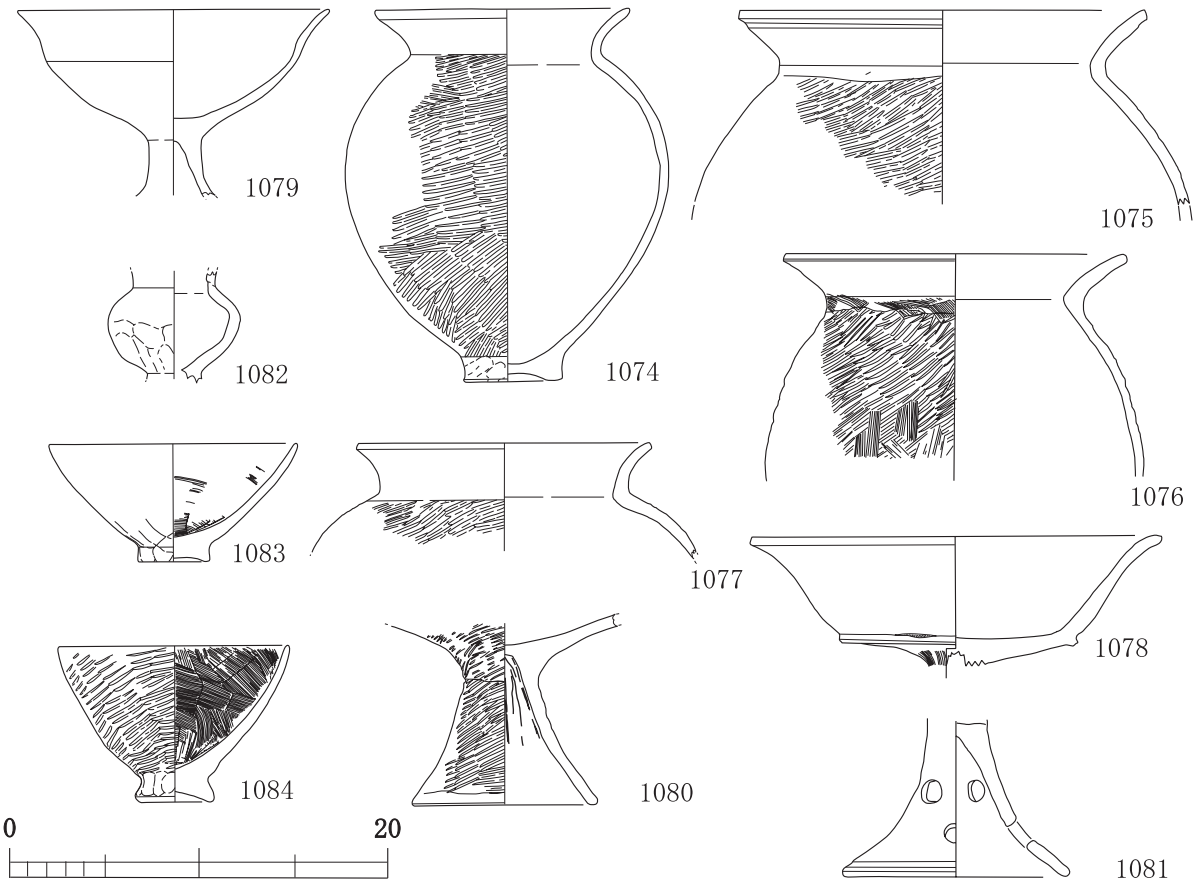
SD03は06017－２～３区で検出した幅0.3m、深さ0.05mを測る小溝である。３区から始まり、１区では検出面を下げすぎたのか、確認することはできなかった。遺物は出土していない。短い溝であるが、この付近の条里地割りと同方向で、中世遺構の可能性もある。

SK29は１区の後述するSD01が途切れた北約２mの砂質土上で検出した円形を呈する土坑である。SD01は調査区北部Y=－52927m付近で掘形を追いかけられなくなるが、後期の土器片は幅３～４mの範囲内で帯状に散らばっていた。SK29はこの土器廃棄帯の下層で検出した。遺構の輪郭を把握するのが遅れ、上層断面を残すことはできなかった。土坑の平面形はわずかに楕円形で、長径0.95m、短径0.90m、深さは0.15mを測る。下層埋土は主に砂混りの灰褐色粘土で、掘削断面は浅い椀状である。

出土土器



第82図　03017－１～３区　平面図



第83図　03017－１区　SK29出土土器実測図

1074 ～ 1077は甕。1074は全形が分かるもので、最大径は体部上半にあり、やや窄まる頸部から外反する口縁部をつくり、口縁端部は丸く収める。外面のタタキは底部と上半部の２分割で施している。1075は外反する口縁端部に垂直の面をつくる。1077は肩部近くに最大径を持つもので、短く外反する口縁の端部は僅かに外傾する面をつくる。1076は体部中央に最大径を持つもの。口縁端部は丸く収める。

1078 ～ 1081は高坏。1078は平らな杯部で、口縁部は開いて立ち上がり、端部は外反して丸く収める。1079脚裾部は欠失している。杯部は椀状で、緩く外反して立ち上がる口縁部をつける。1080は脚部で、タタキ目で成形するものは珍しい。1081は脚部で、屈折して広がり、端部を丸く収める。２段に透かしを穿つ。

1082は小型壷。体部は球形で、底部に指頭痕が残る。頸部より上は欠失している。

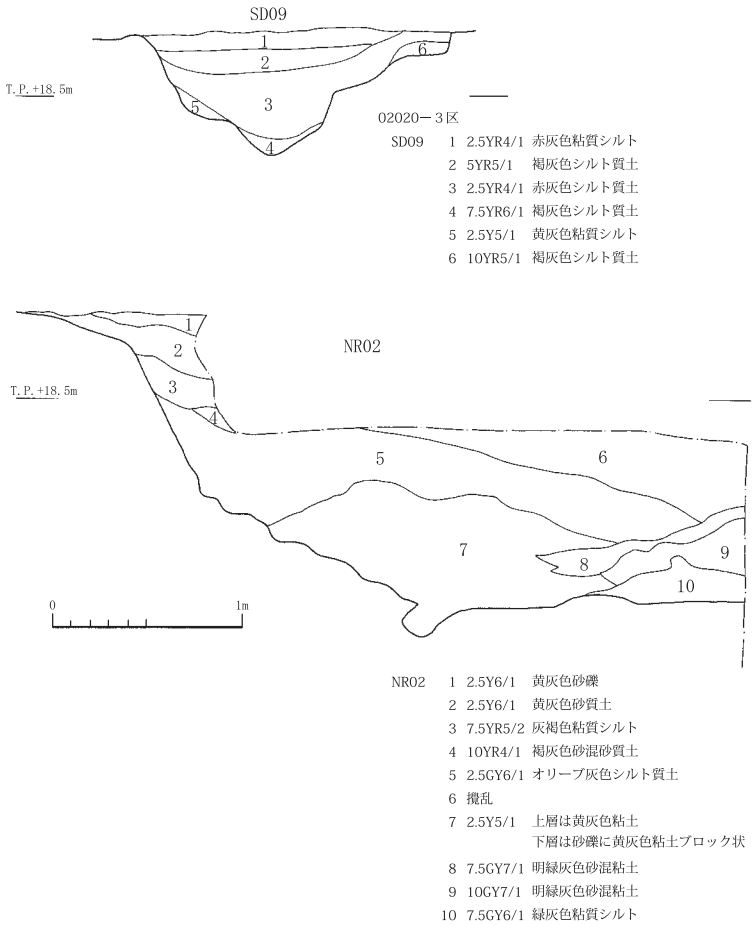
1083、1084は斜めに開く体部をもつ鉢で、底部は指オサエでつくる。1084は螺旋状のタタキで成形する。

02020－３区（付図３）

02020－３区は耕作土を除去したT.P.18.7m前後の面で、縄文時代から中世の各時代の遺構が検出される。

NR02は古墳時代の河道で、幅約4m、深さ1.8mを測る。埋土は砂礫やシルト、粘土層で、上層から土師器片が出土している。府道を挟んだ東側で1984年度に実施した調査でもこの河道が検出されており、北東側の肩は調査区外であったが、幅６ｍ以上、深さ1.5m前後で、上層埋土から古墳時代中期頃の韓式土器や土師器、須恵器が出土している。

SD09は方形周溝墓SZ05の東南約６ｍで検出した溝である。SZ05から南東に延びる溝が方形墓の周溝であれば、周溝墓より新しくなる。溝の幅は南西端で1.8m、北東端で3.2m、深さ0.8mを測る。埋土は上層が主に砂質土、下層が灰オリーブ色～灰白色砂礫である。



02020－３区

SD09
1 2.5YR4/1 赤灰色粘質シルト
2 5YR5/1 褐灰色シルト質土
3 2.5YR4/1 赤灰色シルト質土
4 7.5YR6/1 褐灰色シルト質土
5 2.5Y5/1 黄灰色粘質シルト
6 10YR5/1 褐灰色シルト質土

NR02
1 2.5Y6/1 黄灰色砂礫
2 2.5Y6/1 黄灰色砂質土
3 7.5YR5/2 灰褐色粘質シルト
4 10YR4/1 褐灰色砂混砂質土
5 2.5GY6/1 オリーブ灰色シルト質土
6 攪乱
7 2.5Y5/1 上層は黄灰色粘土
下層は砂礫に黄灰色粘土ブロック状
8 7.5GY7/1 明緑灰色砂混粘土
9 10GY7/1 明緑灰色砂混粘土
10 7.5GY6/1 緑灰色粘質シルト

第84図　02020－３区　SD09、NR02断面図

第６節　中近世の遺構

今回の調査では、表土、旧耕土、床土を除去した高さで遺構が検出される。

06017－１区　中世後半～近世初頭の遺構面（第85 ～ 87図）

近現代の盛土層を除去したT.P.+17.8m付近で遺構が４基確認された。

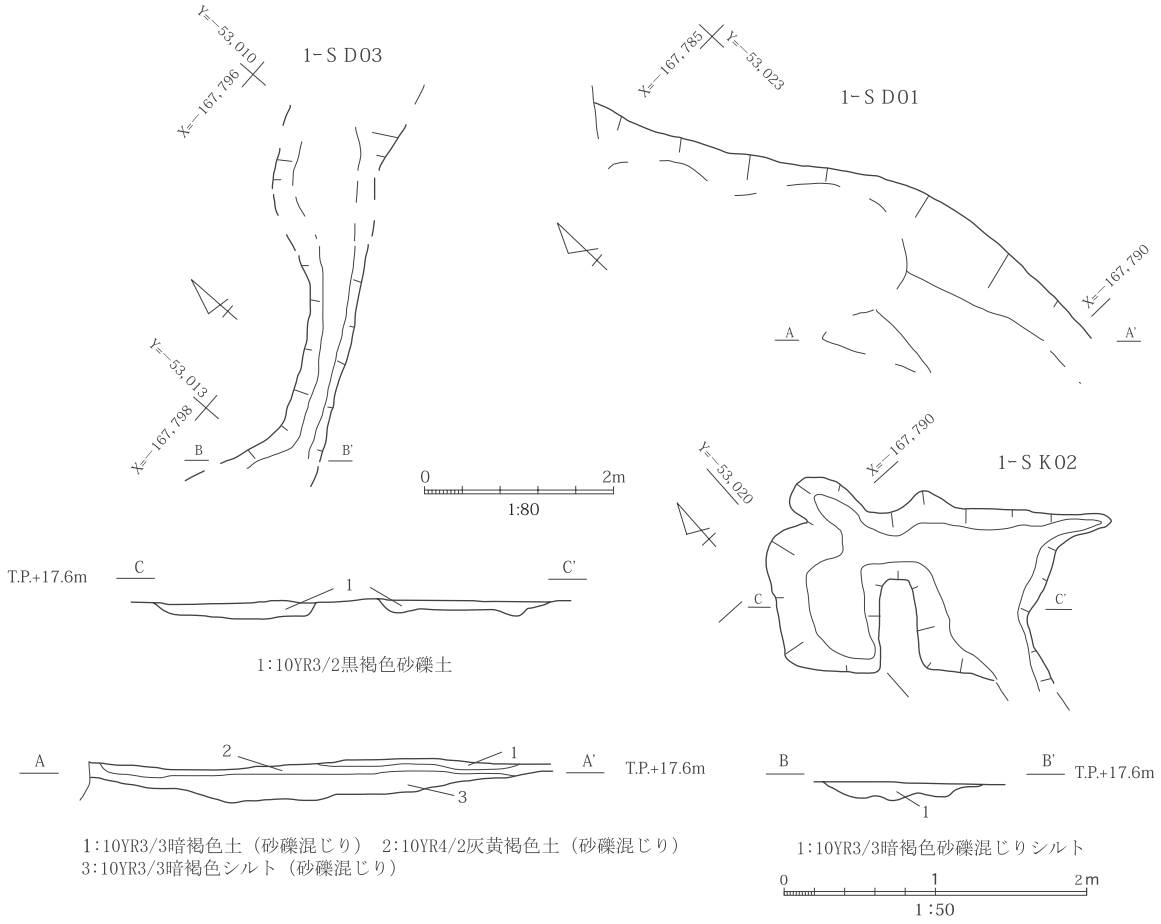
SD01は調査区西端で検出され、撹乱により破壊されている。長さ約5.8m、深さ約0.3m、検出幅1.3mである。埋土は暗褐色砂礫混じりのシルトで、少量の土器片が出土した。

SK02はSK01の東側で検出された不定形の浅い遺構である。長軸は3.5m、短軸は約２m、深さ0.1mである。埋土は黒褐色の砂礫土である。

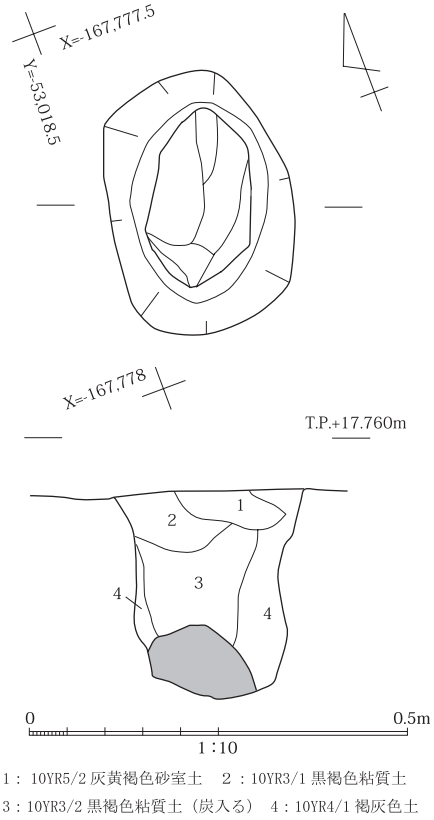
SD03は調査区の南で検出された溝状遺構で、幅１～２m、深さ0.15m、長さ４mである。埋土は暗褐色砂礫混じりシルトであり、遺構底のレベルは南西が低く北東が高い。

SK04は、調査区西側で検出された長軸0.4mの土坑で、そこから人頭台の石が出土した。礎石とも考えたが、周囲で遺構が検出できなかったため、性格は断定できない。

SK36は調査区東側で検出された、長径8.0m短径4.0m深さ0.2mの土坑状の遺構である。埋土は２層に区分され、上層が暗褐色の粘質シルト、下層が黄褐色のシルトであった。

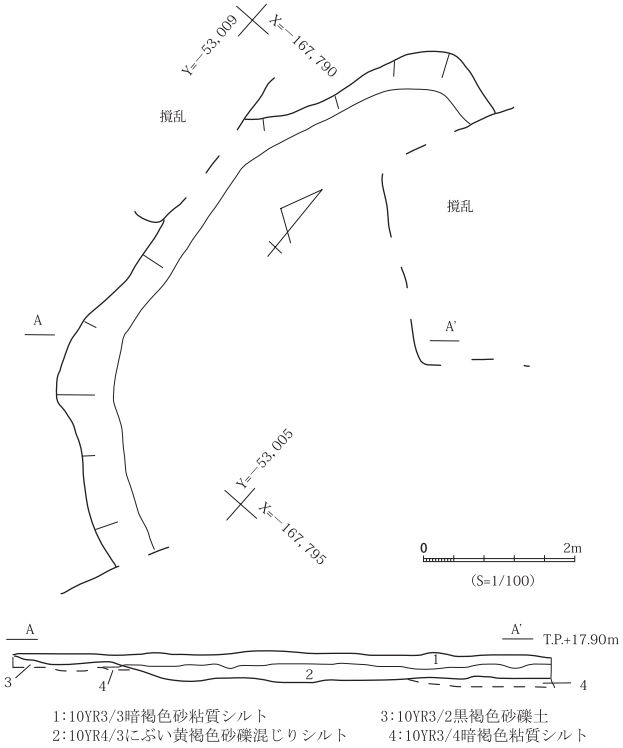


第85図　06017－１区　SD01、SK02、SD03平面図（S=1/80）・断面図（S=/50）



1： 10YR5/2 灰黄褐色砂室土　2 ：10YR3/1 黒褐色粘質土
3：10YR3/2 黒褐色粘質土（炭入る）　4：10YR4/1 褐灰色土

第86図　06017－１区　SK04平面図･断面図



1:10YR3/3暗褐色砂粘質シルト　　3:10YR3/2黒褐色砂礫土
2:10YR4/3にぶい黄褐色砂礫混じりシルト　　4:10YR3/4暗褐色粘質シルト

第87図　06017－１区　SK36平面図･断面図

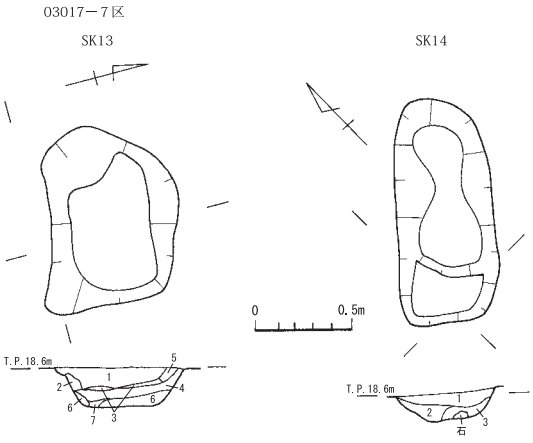
検出した遺構は埋土が互いに酷似しており廃絶時期が近いと考える。また、埋土より少量の遺物が出土しているが、時期を決定できない。遺構面ベース土から陶磁器片や近世に属する土器類が出土していることから、中世後半から近世初頭にかけての遺構面と考える。

03017－７区（第88図）

耕土を除去したT.P.19.0m前後で弥生時代から中近世までの遺構を検出した。弥生時代と中近世の遺構は埋土が異なるので峻別できる。

SK13は７区南端で検出した。方形に近い歪な土坑で長辺0.9m、短辺0.7m、深さ0.25mを測る。埋土は灰黄色土や黄灰褐色土で、上層から瓦器や土師器片が出土している。SK14はSK13の３m東にある土坑で、長径1.2m、短径0.55m、深さ0.2mを測る。埋土は灰黄色土、灰黄褐色土で遺物は出土していない。

SKで13で瓦器が出土し、SK14も埋土が近似していることからら中世の遺構と判断した。



1　10YR4/2　灰黄褐色土
2　2.5Y4/1　黄灰色土
3　2.5Y4/2　暗灰黄色土
4　10YR4/1　灰褐色土
5　2.5Y5/2　暗灰黄色土
6　2.5Y5/3　黄褐色土
7　5Y4/2　灰オリーブ色土

1　5Y4/2　灰オリーブ色土
2　2.5Y5/1　黄灰色土
3　2.5Y4/2　暗灰黄色土

第88図　03017－７区　SK13、SK14平面図・断面図

第７節　各地区出土の石器

土屋　みづほ

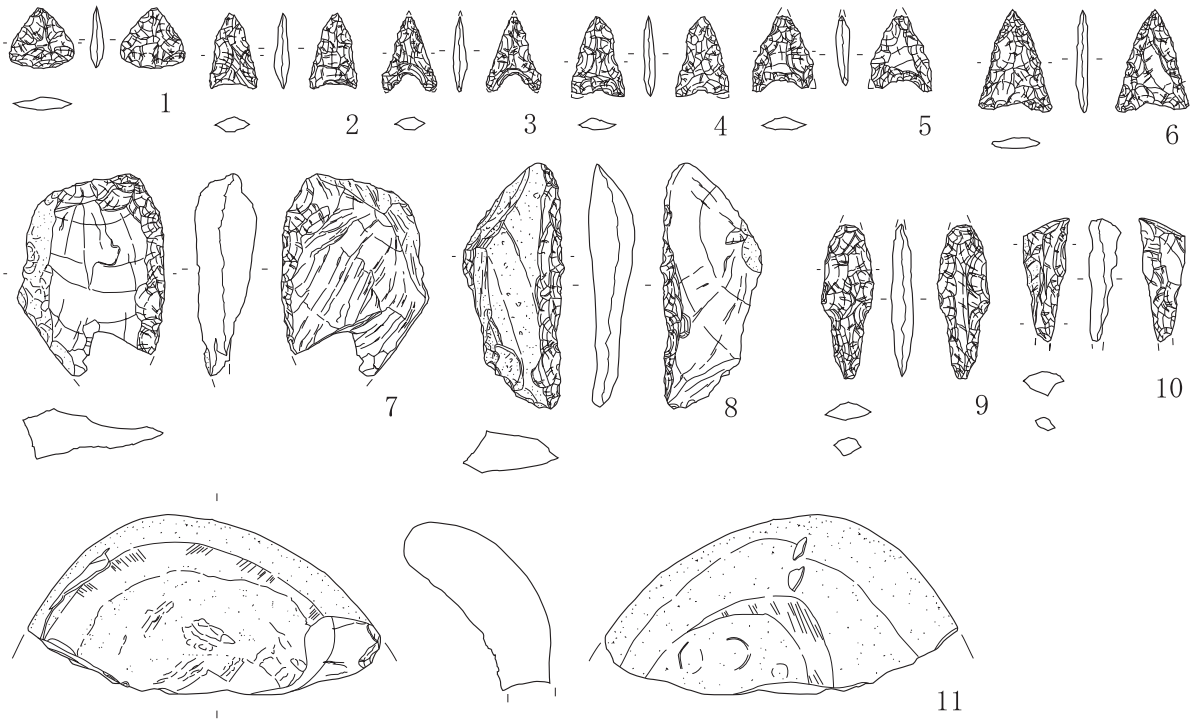
石器は、加工痕、使用痕の明瞭なものを中心に、18点を図化した。法量、石材、色調、出土位置については、観察表に記した（表４）。図化したもののほか、サヌカイトのRF、剥片が出土している。

１～６は打製石鏃である。１は完形、基部は外側にやや湾曲する形状である。基部の調整剥離が最後に施されている。２は完形、凹基無茎で、基部の抉りは浅い。調整剥離は粗く、剥離順序も一定しない。３は先端部と基部両端をわずかに欠損する。凹基無茎で、基部の抉りは深く、脚部端は丸みを帯びる形状である。基部の調整剥離が最後に施されている。４は基部の一端を欠損する。凹基無茎で、基部の抉りは浅い。調整剥離は粗い。５は先端部と基部の一端を欠損する。凹基無茎で、基部の抉りはやや浅い。調整剥離はやや粗く、主剥離面が残存する。基部の調整剥離が最後に施されている。６は完形、凹基無茎で、基部の抉りは浅い。平面形は左右やや非対称で、側縁は鋸歯状となる。調整剥離の順序はあまり一定しないが、基部の調整剥離が最後に施されている。

７、８はスクレイパーである。７は一端を欠損する。側面に自然面が残存し、素材剥片の打面も自然面である。調整剥離は背面から腹面、腹面から背面の順に施されている。刃縁に微細剥離がみとめられ、使用によるものである可能性が考えられる。８は完形で、主に腹面から背面に調整剥離が施されている。自然面が大きく残存し、素材剥片の打面も自然面である。

９、10は打製石錐である。９は頭部を欠損する。摩滅痕などの使用痕は確認できず、形状からは石鏃の可能性も考えられる。しかし、出土層から所属時期と考えられる縄文時代中期末には大阪府内で有茎石鏃の出土例がほとんどないことから、ここでは錐として報告する。10は先端部を欠損する。調整剥離は粗く、頭部に自然面を残す。先端部の一部に摩滅痕のような痕跡が確認できるが、不明瞭である。

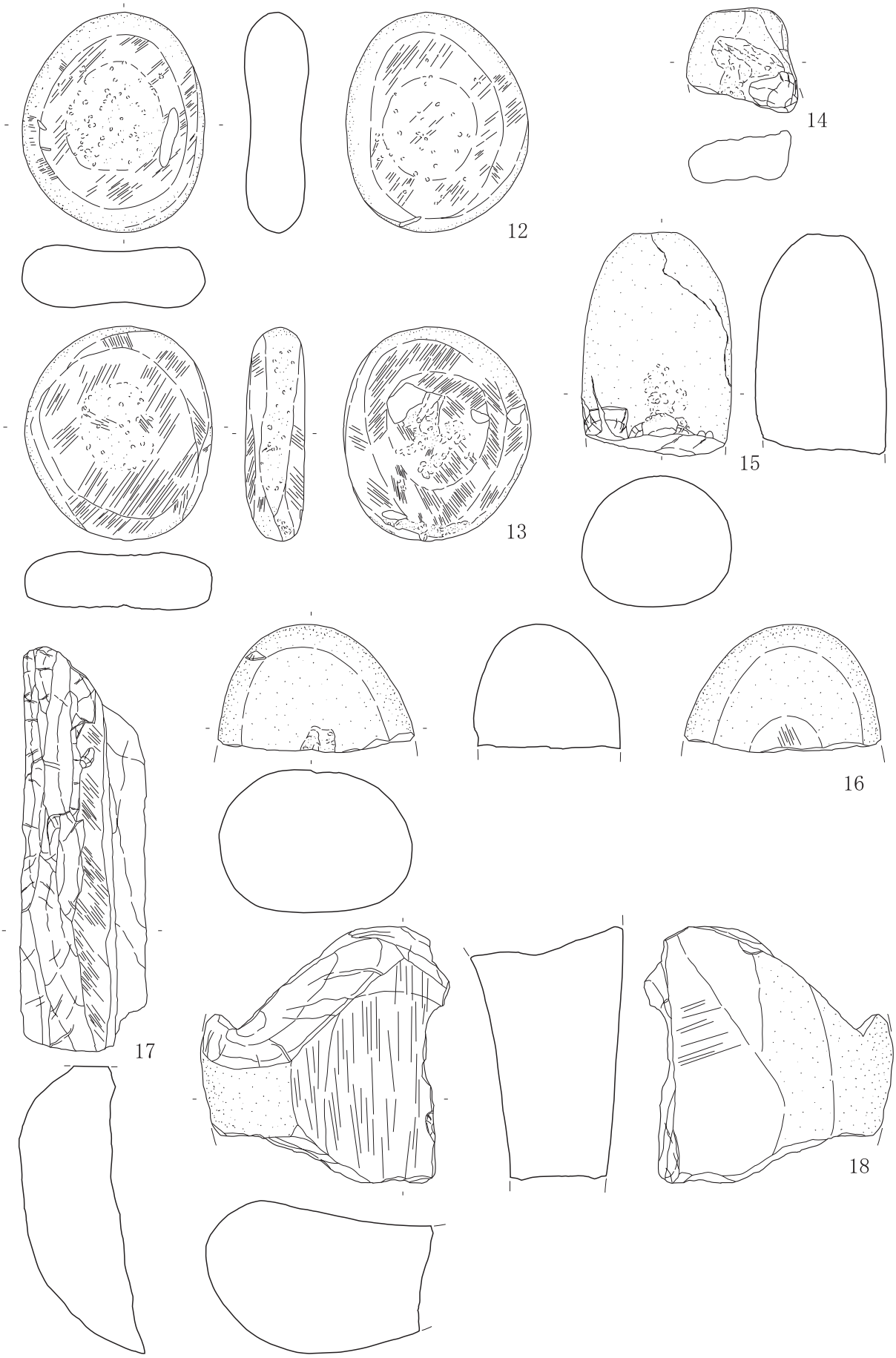
11は一端を欠損する。円礫素材である。一方の面が大きく窪み､椀状を呈する。窪みの内側は、全体にざらついており、加工痕跡は不明瞭である。また、幅1.0 ～ 1.5mmの溝状の痕跡が、特に最深部付近に顕著にみとめられ、使用痕と考えられる。窪みの周縁には擦痕がみとめられ、成形時の研磨痕と考えられる。もう一方の面は、部分的に擦痕がみとめられる。手持ちあるいは置いて使用した際の使用痕であろう。側面は黒化しており、被熱によるものと考えられる。以上の使用痕からは、窪み内に対象物を入れ、スル、ツブスなどの作業を行ったものであることが想定できる。一方、窪みが非常に深く椀状となる点は、縄文時代の一般的な石皿にはあまりみられない特徴といえよう。類例として、縄文時代後期の資料であるが、長野県北村遺跡出土のもの（町田1993　図版141－28）が挙げられる。窪みの断面形がV字状である点は異なっているが、窪みの深い形状、法量は類似しており、管見では数少ない類例である。この深い窪みが、加工により形成されたものであるかについては、窪みの周縁については研磨痕がみとめられるものの、内部の



第89図　出土石器実測図１

明瞭な加工痕は確認できない。仮に、自然現象により窪みのある形状をもつ素材を利用したとするなら、ポットホールが候補として挙げられる。ポットホールが遺跡から出土した例として、近畿地方では、和歌山県かつらぎ町丁の町・妙寺遺跡出土資料、奈良県五條市上島野遺跡採集資料などが挙げられる。丁の町・妙寺遺跡の資料は、縄文時代後期初頭、中津式期の大型の土坑から出土したものである。石材は、やや軟質であるが、府中遺跡出土資料と同様、頁岩･ホルンフェルス系の石材を用いており、色調、粒度にも共通点がみとめられる。また、椀状ではないものの、片面が大きく窪む点、窪み内に敲打痕などの加工痕がみとめられない点でも類似する。奈良県五條市上島野遺跡の資料は採集品であり、詳細な時期は不明である。「異形研磨石製品」として報告されているが、写真、図面からは同じく未加工、未使用のポットホールの可能性が高い。府中遺跡出土の11についても、このような、自然現象によるポットホールの形状を活かし、石器として利用した可能性が考えられる。

12、13は凹石である。12は完形、円礫素材である。両面とも中央部が凹み、擦痕、敲打痕がみとめられる。敲打痕は中心付近ほど集中してみとめられ、右面に比べ左面に特に顕著である。また、敲打痕はいずれも擦痕を切っており、スル用途で用いた後に、タタク用途で使用したものと考えられる。また、側縁にも部分的に敲打痕がみとめられるようであるが、不明瞭である。13は、円礫素材である。両面とも中央部が凹み、擦痕、敲打痕がみとめられる。敲打痕は中心付近ほど集中してみとめられる。また、敲打痕はいずれも擦痕を切っており、スル用途で用いた後に、タタク用途で使用したものと考えられる。側面にも部分的に敲打痕がみとめられる。



第90図　出土石器実測図２

14 ～ 16は、敲石である。14は、一端を欠損し、亜角礫素材である。片面に敲打痕がみとめられる。一部が黒化しており、被熱によるものと思われる。15は、一端を欠損する。風化が激しく不明瞭であるが、細長い形状の円礫素材であると考えられる。片面の一部に敲打痕がみとめられる。もう一方の面も中央部が面状となっており磨石としても使用した可能性が考えられるが、風化も激しく、擦痕は確認できない。16は、一端を欠損し、円礫素材である。片面に敲打痕がみとめられる。もう一方の面も中央部がやや滑らかとなっており、擦痕は不明瞭であるが、磨石としても使用された可能性がある。

17は砥石である。砥面１面のみが残存する。左側面の一部に自然面がみとめられることから、剥離はしているものの、左側面は本来の形状をほぼ保っている可能性がある。擦痕は一方向で、砥面は平坦面を呈し湾曲しない。置砥であろう。18は石皿である。両面と左側面が残存し、円礫素材である。左面は擦痕が顕著で、断面形は縦、横とも大きく湾曲する。右面は、部分的に滑らかになるが、擦痕はわずかにみとめられるのみで、断面形も湾曲しない。

以上の石器の所属時期については、出土層位、遺構から、５、７、９、12 ～ 14、17は、縄文時代中期末に、３は縄文時代後期に、10、11は、縄文時代晩期に位置づけられる。１、４、８、16、18については、弥生時代中期後半の遺構から出土しているが、小形の打製石鏃１、４などは、縄文時代のものと考えられる。出土遺構の周辺、下層からは縄文時代の遺構、遺物もみられることから、縄文時代の遺物も混入している可能性が高い。

【参考文献】

田中元浩2008「丁の町・妙寺遺跡の発掘調査」『財団法人和歌山県文化財センター年報2007』

町田勝則1993「石器」（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14
『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11―明科町内―北村遺跡』

大下　明2004「Ⅳ〔１〕（４）石器」
『市立五條文化博物館資料目録Ⅰ―堤昭二氏収集考古資料を中心に―』市立五條文化博物館

【謝辞】

本報告の作成にあたっては、下記の機関、方々にご指導をいただいた。記して感謝する次第である。
財団法人和歌山県文化財センター、長野県立歴史館
竹村恵二、佐藤智之、田中元浩、土屋積　町田勝則　（順不同、敬称略）

表４　石器観察表

報告番号	器　種	石　材	色　調	全長（残存長）（cm）	幅（最大幅）（cm）	厚さ（最大厚）（cm）	重量（g）	調査番号	調査区名	出土層	遺　構	時期
1	打製石鏃	サヌカイト	灰色	1.60	1.70	0.35	0.8	02020	3区			弥生中期後半
2	打製石鏃	サヌカイト？	灰色	1.95	1.25	0.40	0.6	03017			NR11（河川）下層褐色粘質土	
3	打製石鏃	サヌカイト	灰色	(2.00)	1.45	0.35	0.5	05027		縄文包含層第3層	第5層土器付近	縄文後期？
4	打製石鏃	サヌカイト	黒灰色	2.10	1.40	0.30	0.7	05027			主体部2掘方埋土	弥生中期後半
5	打製石鏃	サヌカイト	黒灰色	(2.00)	(1.60)	0.35	0.9	06017	1区	T.P.17.25m前後 にぶい黄褐色 砂礫混じりシルト		縄文中期末
6	打製石鏃	サヌカイト	灰色	2.70	1.95	0.30	1.3	03017			NR11（河川）下層褐色粘質土	
7	スクレイパー	サヌカイト	灰色	(5.35)	3.90	1.55	23.8	06017	1区	T.P.17.25m前後 にぶい黄褐色 砂礫混じりシルト		縄文中期末
8	スクレイパー	サヌカイト	灰色	6.50	2.70	1.20	16.6	05027			SZ3北東周溝 周溝内埋土下層	弥生中期後半
9	打製石錐	サヌカイト	灰色	(4.05)	1.40	0.55	2.9	06017	1区	T.P.17.3m前後 灰褐色砂礫 混じりシルト		縄文中期末
10	打製石錐	サヌカイト	灰色	(3.25)	1.20	0.85	2.4	02020	3区		3区 SK21	縄文晩期
11	石皿	頁岩？	灰色	(4.70)	(9.30)	2.50	168.8	02020	3区		3区 SK20下層東部	縄文晩期
12	凹石	砂岩	灰色	11.80	9.75	3.40	592.8	06017	1区	T.P.17.0m前後 暗灰黄褐色砂		縄文中期末
13	凹石・磨石・敲石	砂岩	淡灰色	11.45	10.00	3.20	559.4	06017	1区	T.P.17.0m前後 暗灰黄褐色砂		縄文中期末
14	敲石	砂岩	淡褐色	(5.60)	(6.00)	2.85	110.1	06017	1区	T.P.17.1m前後 灰黄褐色砂質土		縄文中期末
15	敲石	砂岩	灰色	(12.00)	8.00	7.00	985.1	06017	1区		砂礫層	
16	敲石（・磨石）	砂岩	淡灰色	(6.90)	(10.50)	7.95	703.0	05027			SZ03周溝 周溝内埋土	弥生中期後半
17	砥石	砂岩	淡灰色	(21.60)	(6.80)	(15.40)	2429.2	06017	1区	T.P.17.1m前後 灰黄褐色砂質土		縄文中期末
18	石皿	砂岩	淡灰色	(13.65)	(13.30)	8.70	1921.0	05027			SZ02、SZ03周溝 周溝内埋土	弥生中期後半

第４章　02020 － １，２，３区の花粉分析

川崎地質株式会社　西日本支社

栃本　泰浩

目　　次

１．分析試料の数量 …… 140
２．分析試料について …… 140
　２－１．　調査区の配置および試料採取地点 …… 140
　２－２．　試料の採取層準 …… 140
３．花粉分析方法 …… 142
４．花粉分析結果 …… 143
５．考察 …… 155
　５－１　　花粉分帯 …… 155
　５－２　　花粉化石の含有量の少ない原因について …… 155
　５－３　　古環境推定 …… 155
６．まとめ …… 157
７．引用文献 …… 157

第 91 図 調査区の配置及び試料採取地点 ……140
第 92 図 02020－1 区北壁断面図及び採取位置……141
第 93 図 02020－2 区北壁断面図及び採取位置……141
第 94 図 02020－3 区南壁 (1) 断面図及び採取位置……141
第 95 図 02020－3 区南壁 (2) 断面図及び採取位置……141
第 96 図 02020－3 区南壁 (3) 断面図及び採取位置……141
第 97 図 花粉分析処理フロー ……143
第 98 図 イネ科花粉の粒径比較 (中村、1974) ……145
第 99 図 02020－1 区北壁の花粉ダイアグラム …… 147･148
第100図 02020－2 区北壁の花粉ダイアグラム …… 149･150
第101図 02020－3 区南壁 (1, 3) の花粉ダイアグラム ……152
第102図 02020－3 区南壁 (2) の花粉ダイアグラム……154
顕微鏡写真…… 161･163

表５ 分析試料数量表 …… 140
表６ 検出花粉の種類一覧表…… 144
表７ 02020－1 区北壁の花粉化石組成表 …… 146
表８ 02020－2 区北壁の花粉化石組成表 …… 151
表９ 02020－3 区南壁 (1, 3) の花粉化石組成表… … 153
表10 02020－3 区南壁 (2) の花粉化石組成表 …… 153
表11 02020－1 区北壁検出花粉化石数量表 …… 158
表12 02020－2 区北壁花粉化石数量表…… 159
表13 02020－3 区南壁 (1, 3) 検出花粉化石数量表… 160
表14 02020－3 区南壁 (2) 検出花粉化石数量表 …… 160

１．分析試料の数量

分析試料は、大阪府教育委員会により採取・保管されていたものである。各調査区の析処理数量と分析試料数量を表５に示す。

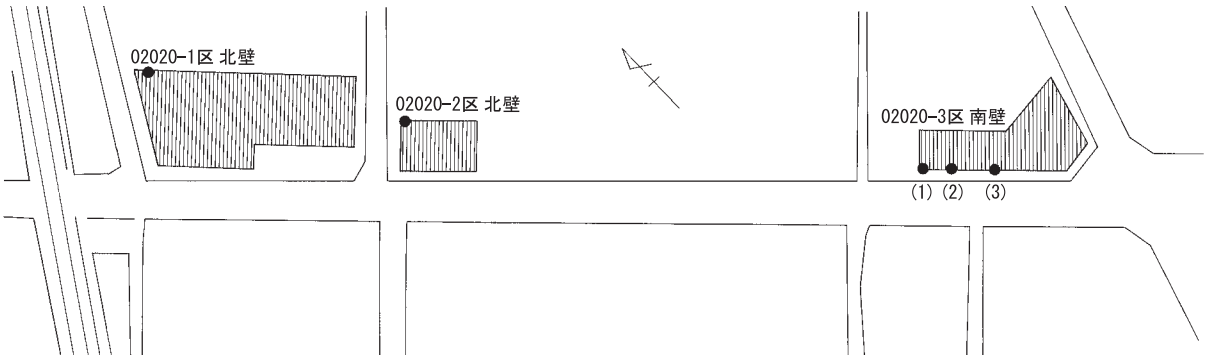
表５　分析試料数量表

	花　粉
02020－１区	9
02020－２区	8
02020－３区	7
実施合計	24
計 画 数	24

２．分析試料について

２－１．調査区の配置および試料採取地点

第91図に調査区の配置及び試料採取地点を示す。



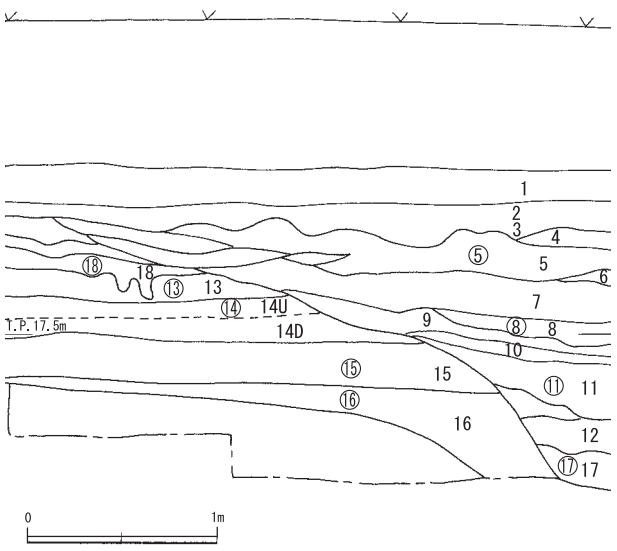
第91図　調査区の配置および試料採取地点

２－２．試料の採取層準

以下に示す平面図、土層図は、調査担当者提供図を加筆したものである。また、次項の土層図の説明は、調査担当者が記したものをそのまま使用している。

（１）第02020－１区北壁

第92図に試料採取地近辺の土層図を示す。⑤、⑧、⑪、⑬～⑱が試料採取位置である。



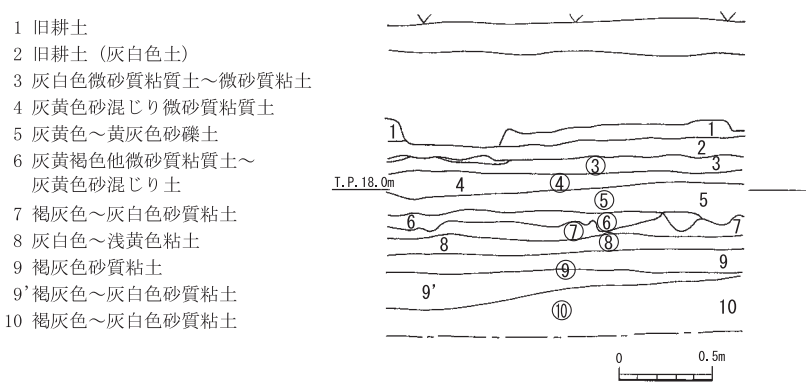
1 旧耕土
2 旧耕土
3 緑灰色～灰オリーブ色微砂質粘質土の混じった土
4 黄灰色微砂質土
5 黄灰色微砂質土
6 灰色微砂質土
7 灰色粘質微砂質土～微砂質土
8 灰色微砂質土
9 微砂質粘質土～粘質微砂質土
10 粘質微砂質土
11 黒褐色粘土
12 灰色粘土
13 灰色粘質微砂質土
14 暗灰黄色微砂質粘質土
14下 灰～灰オリーブ色微砂質粘質土
15 灰～灰オリーブ色微砂質粘質土
16 緑灰色粘質微砂質土
17 微砂と粘土が混じった層
18 灰色粘質微砂質土

第92図　02020－１区　北壁断面図および採取位置

（２）　第02020－２区北壁

第93図に試料採取地点の土層図を示す。

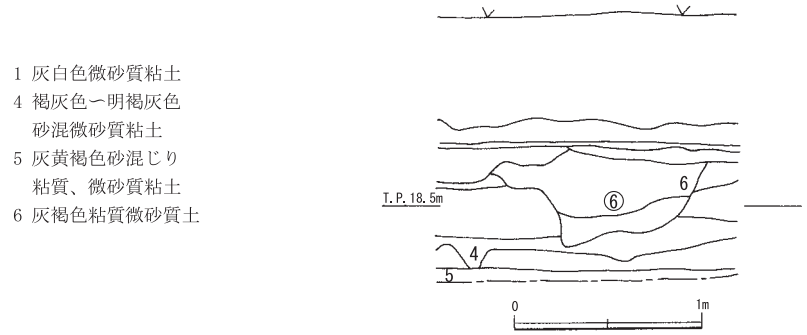
③～⑩が試料採取位置である。



第93図　02020－２区　北壁断面図および採取位置

（３）第02020－３区南壁

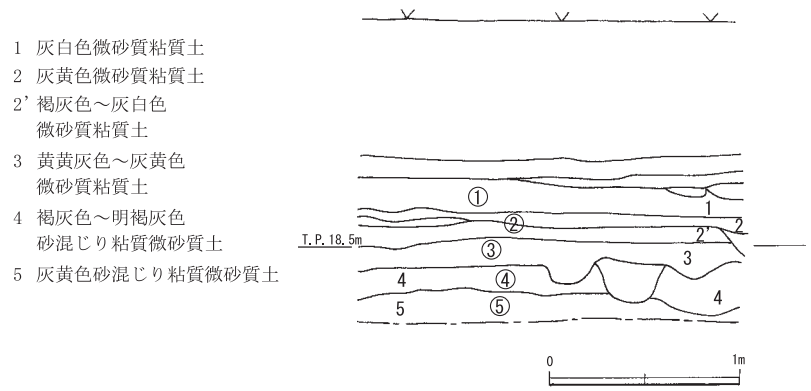
第94図に試料採取地近辺の土層図を示す。試料は、弥生時代中期の方形周溝墓（溝１）の埋土⑥である。試料採取層準（第６層）の他、１、４、５層の記載があった。



第94図　02020－３区　南壁(1)断面図および採取位置

（４）第02020－３区南壁(2)

第95図に試料採取地点の土層図を示す。①～⑤が試料採取位置である。

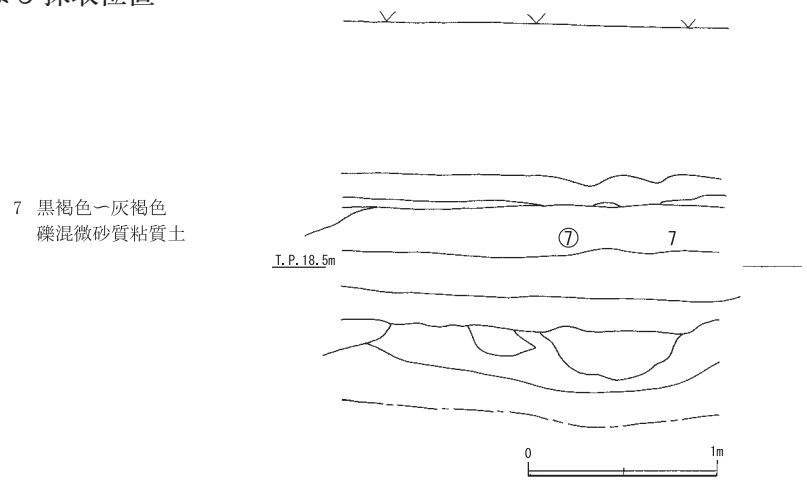


第95図　02020－３区　南壁(2)断面図および採取位置

（５）第02020－３区南壁(3)および採取位置

第96図に試料採取地点の、土層図を示す。⑦が採取位置で、縄文時代晩期の土坑の埋土である。

試料採取層準（７層）のみ地層の記載があった。



第96図　第02020－３区　南壁(3)断面図および採取位置

３．花粉分析方法

（１）原理

粘土層などの堆積物や遺跡の土壌には、動物性もしくは植物性の微小な化石（＝微化石）が含まれており、それらを物理･化学的処理によって抽出し、顕微鏡で化石の種類や数を検定し、種々の目的にそった調査を行う方法が微化石分析であって、花粉分析はそのひとつである。

堆積物に含まれる花粉化石は、その堆積当時陸上に生育した樹木や草が生産した花粉が、水系や大気系を経由して堆積物粒子とともに埋積したものである。

陸上に生育する樹木や草、つまり、“植生”は気候の変化や時代とともに変化し、その変化が堆積物中の花粉化石の構成や量の変化として反映する。

従って、花粉構成や消長データは地層の識別や対比、古植生の復元に利用することができる。

（２）分析処理方法

①分析試料

分析に供する試料は、シルト又は粘土で、その量は10 ～ 200ｇ（湿潤重量）である。試料は花粉化石の形状を保持するため湿潤状態のまま使用する。

分析に供する試料の採取間隔は、堆積層の状態と目的によって数センチメートルから数メートルと異なるが、遺跡調査の場合は、一般に遺物に基づく土層区分に対応した採取間隔をとることが多い。

②分析処理

分析処理の手順は第97 図に示す分析フローの通りである。1ミクロン振動マイクロフィルターを使用することによって、粒径処理を確実にするとともに、処理過程の再現性を高めている。

分析処理に要する薬品・器具設備の概要は以下の通りである。

１）処理薬品　　：水酸化カリウム、硫酸、フッ化水素、塩化亜鉛、他

２）処理器具、設備：遠心分離器、振動マイクロフィルター、他一般分析器具

③顕微鏡による検定・計数

抽出した花粉化石はグリセリンゼリーと混合してスライドグラス上に滴下し、カバーグラスをかけて封入してプレパラートとする。各試料につき２～３枚のプレパラートを作成する。プレパラートを顕微鏡により400―1000倍率で観察し、メカニカルステージによる帯分析で、通常木本花粉で100個から250個の検定、計数を行い、同時に出現する草本花粉の検定、計数も行う。

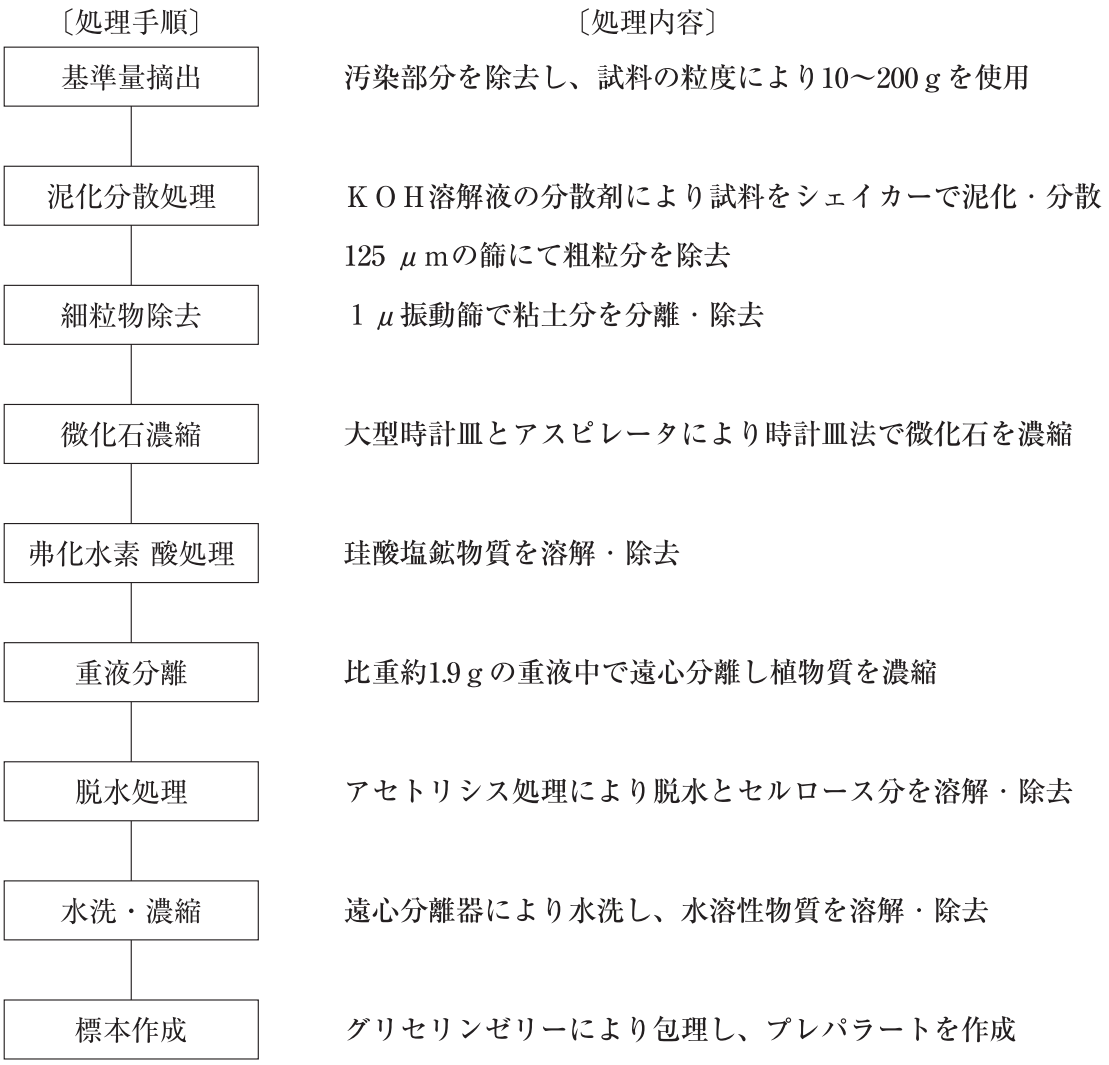
（３）解析法

花粉分析の解析は以下の手順で進める。

１）各花粉種類の出現率（パーセント表示）計算と花粉ダイアグラムの作成

２）各地点における花粉消長パターンの読み取りと花粉帯分帯

３）地層対比や古植生・古気候の復元



第97図　花粉分析処理フロー

４．花粉分析結果

（１）花粉化石の含有状況

24試料の花粉分析を行った結果、すべての試料から花粉化石を検出できたが、いくつかの試料では統計処理に充分な量の木本花粉化石を検出できなかった。

（２）検出された花粉化石の種類

検出された花粉化石は表６に示す53種類であった。この他､胞子化石が検出されている。また、以下に示すような種類が各試料で特徴的に検出できた。

①　卓越木本花粉

マツ属（複維管束亜属)、コウヤマキ属、スギ属、アカガシ亜属

②　卓越草本花粉（栽培の可能性のあるものを除く）

カヤツリグサ科、イネ科（40ﾐｸﾛﾝ未満)、ヨモギ属

③　栽培植物（栽培の可能性のあるものを含む）

イネ科（40ﾐｸﾛﾝ以上）

表６　検出花粉化石の種類一覧表

〔樹木花粉種類〕

No.	学　　名	日　本　名
8	*Abies*	モミ属
12	*Picea*	トウヒ属
13	*Pinus(Diploxylon)*	マツ属：複維管束亜属
15	*Pinus(Haploxylon)*	マツ属：単維管束亜属
23	*Tsuga*	ツガ属
24	*Sciadopitys*	コウヤマキ属
26	*Cryptomeria*	スギ属
27	*Cupressceae*	ヒノキ属
28	*Podocarpus*	マキ属
44	*Myrica*	ヤマモモ属
45	*Carya*	カリヤ属
46	*Juglans-Pterocarya*	クルミ属―サワグルミ属
50	*Alnus*	ハンノキ属
51	*Betula*	カバノキ属
53	*Carpinus-Ostrya*	クマシデ属―アサダ属
54	*Corylus*	ハシバミ属
56	*Castanea*	クリ属
58	*Castanopsis-Pasania*	シイノキ属―マテバシイ属
59	*Fagus*	ブナ属
61	*Cyclobalanopsis*	アカガシ亜属
62	*Quercus*	コナラ亜属
65	*Aphananthe-Celtis*	ムクノキ属―エノキ属
66	*Ulmus-Zelkova*	ニレ属―ケヤキ属
69	*Moraceae-Urticaceae*	クワ科―ラクサ科
71	*Salix*	ヤナギ属
95	*Phellodendron*	キハダ属
97	*Phus*	ウルシ属
98	*Acer*	カエデ属
99	*Aesculus*	トチノキ属
100	*Ilex*	モチノキ属
103	*Oleaceae*	モクセイ科
110	*Elaeagunus*	グミ属
130	*Symplocos*	ハイノキ属

〔草本花粉種類〕

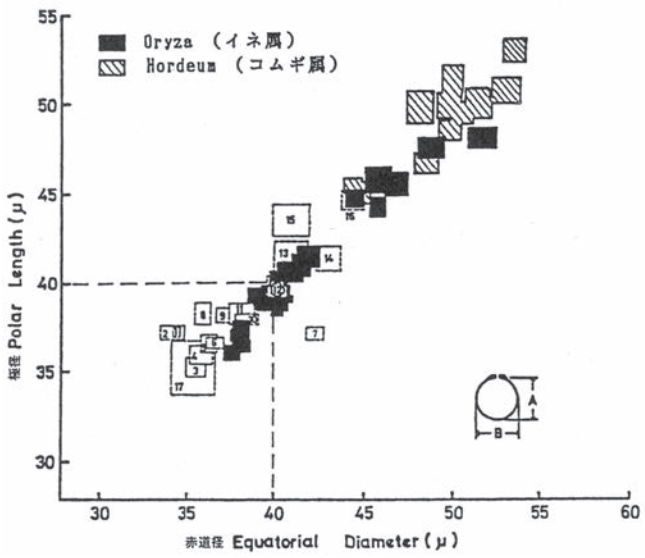
203	*Sagittaria*	オモダカ属
207	*Typha*	ガマ属
230	*Cyperaceae*	カヤツリグサ科
232	*Gramineae*(<40)	イネ科：40ミクロン未満
233	*Gramineae*(>40)	イネ科：40ミクロン以上
255	*Ranunculaceae*	キンポウゲ科
263	*Cruciferae*	アブラナ科
269	*Caryophyllaceae*	ナデシコ科
270	*Chenopodiaceae-Amaranthaceae*	アカザ科―ヒユ科
279	*Echinocaulon-Persicaria*	ウナギツカミ節―サナエタデ節
282	*Rumex*	ギシギシ属
288	*Sanguisorba*	ワレモコウ属
289	*Fabaceae*	マメ科
298	*Umbelliferae*	セリ科
300	*Rotala*	キカシグサ属
327	*Trachelospermum*	テイカカズラ属
347	*Carduoidaceae*	キク亜科
348	*Ambrosia-Xanthium*	ブタグサ属―オナモミ属
349	*Artemsia*	ヨモギ属
350	*Cichorioideae*	タンポポ亜科

（3）イネ科の細分について

イネ科花粉を粒径から、40ミクロン以上と40ミクロン未満に区分した。

稲作が行われる前の自然堆積物では、イネ科（40ミクロン未満）花粉が高率となることはあるが、イネ科（40ミクロン以上）花粉が高率となることはほとんどない。これに対し、稲作が広範に行われ出したと考えられる弥生時代以降においては、自然堆積物でもイネ科（40ミクロン以上）花粉が高率となることが多くなる。さらに、稲作遺構での分析結果では、ほとんどの場合イネ科（40ミクロン以上）花粉はイネ属（Oriza）を含んでいるが、すべてイネ属であるわけではない。

これらの状況証拠と事実から、弥生時代以降に高率で検出されるイネ科（40ミクロン以上）花粉について、すべてがイネ属に由来するわけではないが、その多くはイネ属に由来すると推測される。



〔図中のイネ・コムギ以外のイネ科〕

1．Zizania latifolia（マコモ）
2．Imperata cylindrica var.koenigii（チガヤ）
3．Trisetum bifidum（カニツリグサ）
4．Arthraxon hispidus（コブナグサ）
5．Digitaria adscendens（メヒシバ）
6．Echinochioa crusgalli subsp.edulis
7．Polypogen monspeliensis（ヒエガエリ）
8．Phalaris arundinacea（クサヨシ）
9．Beckmannia syzigachne（カズノコグサ）
10. Echinochloa crusgalli var.longiseta
11. Alopecurus aequalis var.amurensis（スズメノテッポウ）
12. Echinochioa crusgalli
13. Paspalum thunbergii
14. Alopecurus japonicus
15. Echinochioa crusagalli var.orizicola
16. Agropyron ciliare var.minus（アオカモジグサ）
17. Phragmites communis（アシ）

第98図　イネ科花粉の粒径比較（中村、1974）

（4）花粉分析結果

花粉分析結果を下記の花粉ダイアグラムと花粉化石組成表に示す。花粉ダイアグラムでは計数した木本花粉を基数にし、各々の木本花粉、草本花粉について百分率で表した。また、右端の花粉総合ダイアグラムでは木本花粉を針葉樹花粉、広葉樹花粉に細分し、これらに草本花粉、胞子の総数を加えたものを基数として、それぞれの分類群毎に累積百分率として示した。

また、花粉化石の含有量のが少ないため木本花粉の検出量が少なく、統計処理に耐えられない試料については、検出できた種類を「＊」で示した。

表７　02020－１区北壁の花粉化石組成表

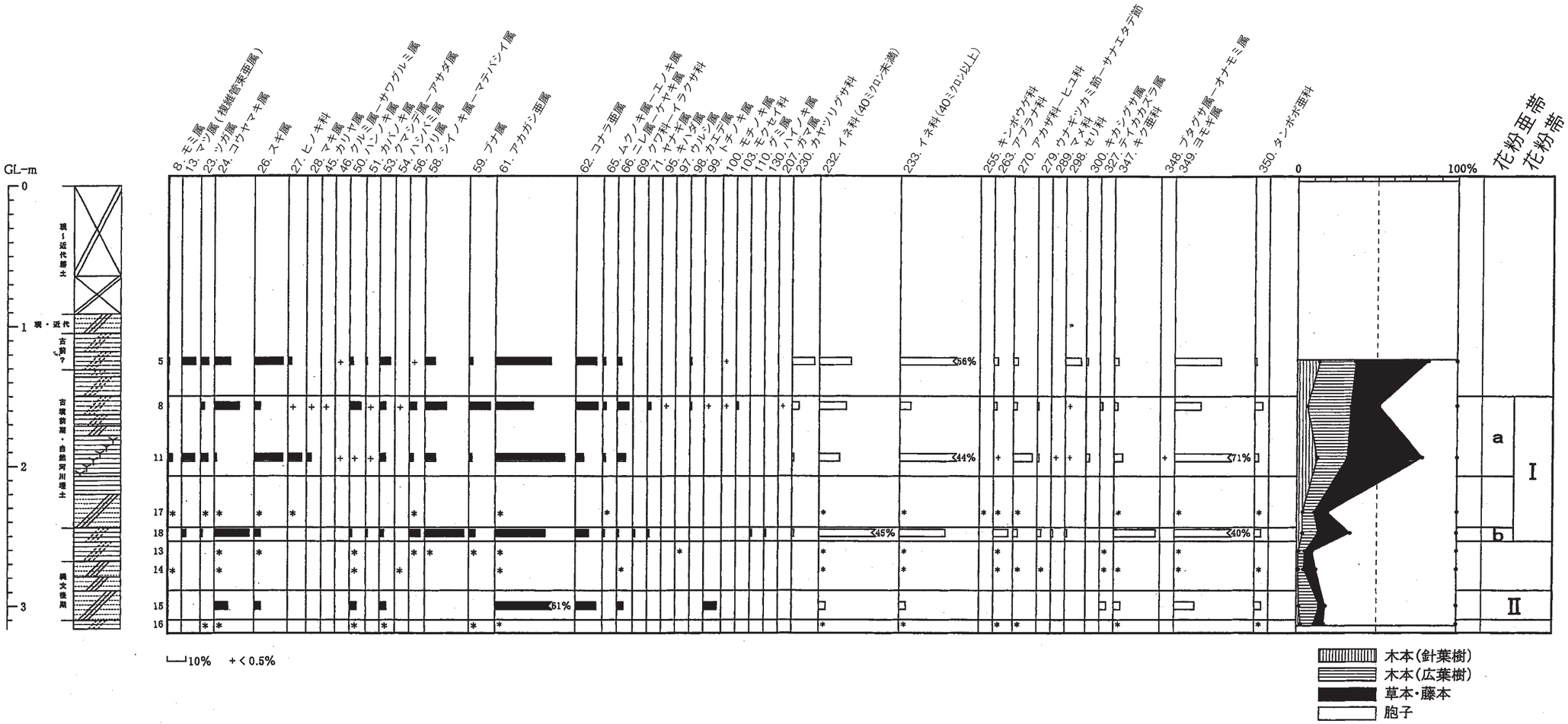
No.	DEP,U	DEP,L	8	13	23	24	26	27	28	45	46	50	51	53	54	56
5	1.22	1.28	2	16	9	18	33	4	－	－	1	4	2	12	－	1
			(1)	(7)	(4)	(8)	(15)	(2)	－	－	(0)	(2)	(1)	(6)	－	0
8	1.54	1.60	－	－	4	28	7	1	1	1	－	13	1	7	1	8
			－	－	(2)	(13)	(3)	(0)	(0)	(0)	－	(6)	(0)	(3)	0	(4)
11	1.90	1.98	5	14	8	2	31	15	5	－	1	1	1	6	－	4
			(2)	(7)	(4)	(1)	(15)	(7)	(2)	－	(0)	(0)	(0)	(3)	－	(2)
17	2.30	2.37	1	－	1	4	4	1	－	－	－	－	－	－	－	1
			(3)	－	(3)	(12)	(12)	(3)	－	－	－	－	－	－	－	(3)
18	2.45	2.51	－	2	1	16	3	－	－	－	－	1	1	2	－	5
			－	(2)	(1)	(18)	(3)	－	－	－	－	(1)	(1)	(2)	－	(6)
13	2.58	2.64	－	－	－	2	2	－	－	－	－	1	－	－	－	1
			－	－	－	(12)	(12)	－	－	－	－	(6)	－	－	－	(6)
14	2.71	2.78	1	－	－	4	－	－	－	－	－	1	－	－	1	－
			(5)	－	－	(21)	－	－	－	－	－	(5)	－	－	(5)	－
15	2.97	3.03	－	－	－	2	1	－	－	－	－	1	－	1	－	－
			－	－	－	(7)	(4)	－	－	－	－	(4)	－	(4)	－	－
16	3.10	3.16	－	－	1	2	－	－	－	－	－	2	－	1	－	－
			－	－	(8)	(17)	－	－	－	－	－	(17)	－	(8)	－	－

No.	DEP,U	DEP,L	58	59	61	62	65	66	69	71	95	97	98	99	100	103
5	1.22	1.28	11	4	63	23	3	5	－	－	－	－	2	－	1	－
			(5)	(2)	(29)	(11)	(1)	(2)	－	－	－	－	(1)	－	(0)	－
8	1.54	1.60	24	24	43	25	4	13	－	4	1	－	2	1	1	3
			(11)	(11)	(20)	(12)	(2)	(6)	－	(2)	(0)	－	(1)	(0)	(0)	(1)
11	1.90	1.98	11	3	74	8	3	9	－	－	－	－	－	－	－	－
			(5)	(1)	(37)	(4)	(1)	(4)	－	－	－	－	－	－	－	－
17	2.30	2.37	－	－	20	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－
			－	－	(61)	－	(3)	－	－	－	－	－	－	－	－	－
18	2.45	2.51	18	3	23	6	1	1	1	1	－	－	－	－	－	－
			(21)	(3)	(26)	(7)	(1)	(1)	(1)	(1)	－	－	－	－	－	－
13	2.58	2.64	1	1	8	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－
			(6)	(6)	(47)	－	－	－	－	－	－	(6)	－	－	－	－
14	2.71	2.78	－	－	11	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－
			－	－	(58)	－	－	(5)	－	－	－	－	－	－	－	－
15	2.97	3.03	－	－	17	3	－	1	－	－	－	－	－	2	－	－
			－	－	(61)	(11)	－	(4)	－	－	－	－	－	(7)	－	－
16	3.10	3.16	－	2	4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
				(17)	(33)											

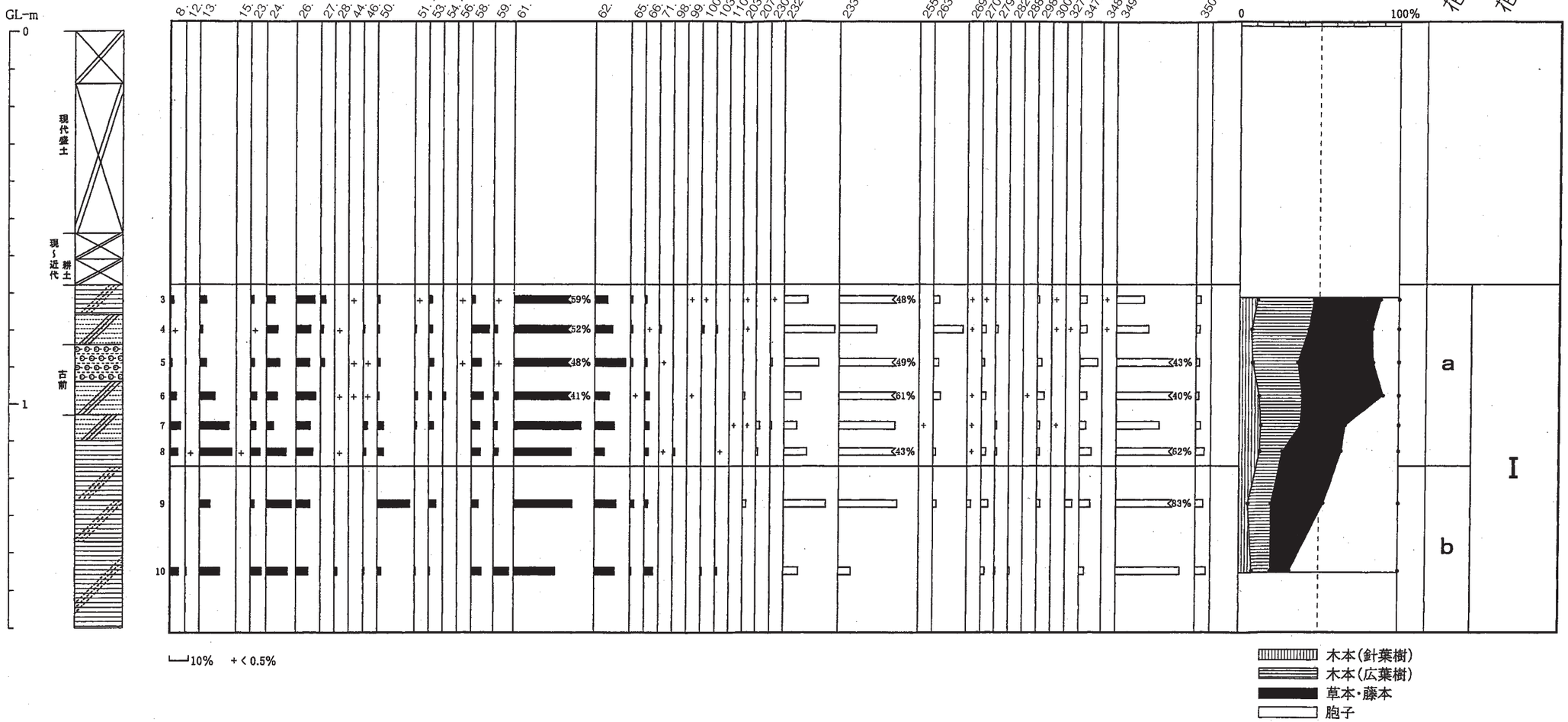
No.	DEP,U	DEP,L	110	130	207	230	232	233	255	263	270	279	289	298	300	327
5	1.22	1.28	－	－	－	26	36	120	－	5	5	－	－	18	2	－
			－	－	－	(12)	(17)	(56)	－	(2)	(2)	－	－	(8)	(1)	－
8	1.54	1.60	－	－	1	8	31	13	－	4	4	2	－	1	－	3
			－	－	(0)	(4)	(14)	(6)	－	(2)	(2)	(1)	－	(0)	－	(1)
11	1.90	1.98	－	－	－	2	22	89	－	1	20	2	1	1	4	－
			－	－	－	(1)	(11)	(44)	－	(0)	(10)	(1)	(0)	(0)	(2)	－
17	2.30	2.37	－	－	－	－	1	1	2	1	2	－	－	－	－	－
			－	－	－	－	(3)	(3)	(6)	(3)	(6)	－	－	－	－	－
18	2.45	2.51	1	1	－	1	39	21	－	7	2	2	1	1	－	－
			(1)	(1)	－	(1)	(45)	(24)	－	(8)	(2)	(2)	(1)	(1)	－	－
13	2.58	2.64	－	－	－	－	1	3	－	2	－	－	－	－	－	2
			－	－	－	－	(6)	(18)	－	(12)	－	－	－	－	－	(12)
14	2.71	2.78	－	－	－	－	4	2	－	2	1	1	－	－	－	3
			－	－	－	－	(21)	(11)	－	(11)	(5)	(5)	－	－	－	(16)
15	2.97	3.03	－	－	－	－	1	1	－	－	－	－	－	－	－	1
			－	－	－	－	(4)	(4)	－	－	－	－	－	－	－	(4)
16	3.10	3.16	－	－	－	－	1	1	－	1	2	－	－	－	－	－
			－	－	－	－	(8)	(8)	－	(8)	(17)	－	－	－	－	－

No.	DEP,U	DEP,L	347	348	349	350	402	403
5	1.22	1.28	5	－	52	2	75	29
			(2)	－	(24)	(1)	(35)	(14)
8	1.54	1.60	4	－	30	9	222	93
			(2)	－	(14)	(4)	(102)	(43)
11	1.90	1.98	9	1	142	4	90	47
			(4)	(0)	(71)	(2)	(45)	(23)
17	2.30	2.37	3	－	11	4	132	115
			(9)	－	(33)	(12)	(400)	(348)
18	2.45	2.51	19	－	35	3	328	104
			(22)	－	(40)	(3)	(377)	(120)
13	2.58	2.64	－	－	8	－	90	218
			－	－	(47)	－	(529)	(1282)
14	2.71	2.78	9	－	9	3	240	151
			(47)		(47)	(16)	(1263)	(795)
15	2.97	3.03	1	－	3	1	104	59
			(4)	－	(11)	(4)	(371)	(211)
16	3.10	3.16	1	－	－	1	66	25
			(8)	－	－	(8)	(550)	(208)

上段数字は化石種類コード、（　）内は％



第99図　02020－1区　北壁の花粉ダイアグラム



第100図　02020－２区　北壁の花粉ダイアグラム

表８　02020－２区北壁の花粉化石組成表

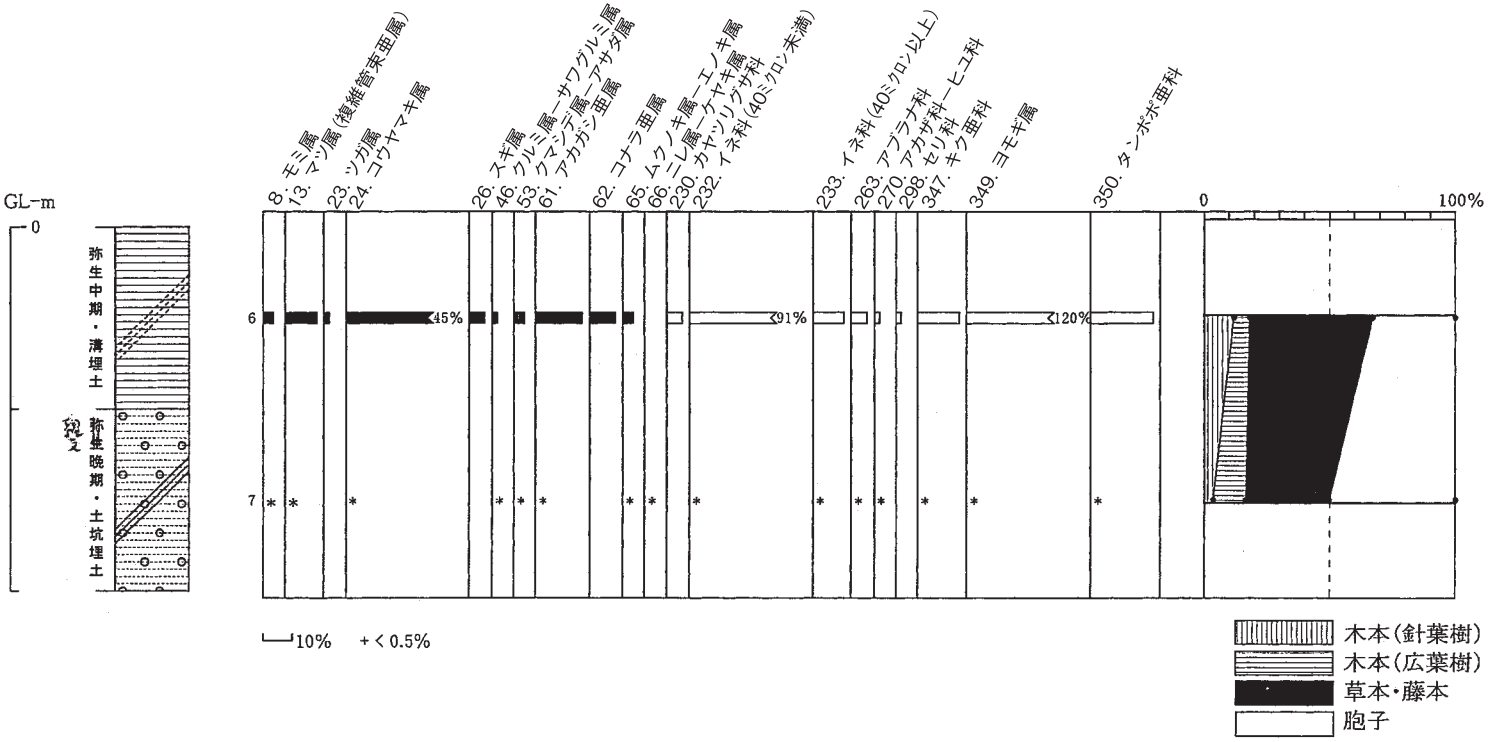
No.	DEP, U	DEP, L	8	12	13	15	23	24	26	27	28	44	46	50	51	53
3	0.68	0.76	4	－	8	－	4	10	22	6	－	1	－	3	1	4
			(2)	－	(4)	－	(2)	(5)	(10)	(3)	－	(0)	－	(1)	(0)	(2)
4	0.76	0.84	1	－	3	－	1	13	17	3	1	－	2	2	2	4
			(0)	－	(1)	－	(0)	(6)	(8)	(1)	(0)	－	(1)	(1)	(1)	(2)
5	0.85	0.93	2	－	7	－	4	14	15	4	－	1	1	3	－	5
			(1)	－	(3)	－	(2)	(7)	(7)	(2)	－	(0)	(0)	(1)	－	(2)
6	0.95	1.01	7	－	17	－	7	12	22	－	1	1	1	2	3	3
			(3)	－	(8)	－	(3)	(6)	(11)	－	(0)	(0)	(0)	(1)	(1)	(1)
7	1.03	1.10	12	－	33	－	6	8	16	－	－	－	5	7	2	5
			(6)	－	(16)	－	(3)	(4)	(8)	－	－	－	(2)	(3)	(1)	(2)
8	1.10	1.17	9	1	36	1	11	22	19	－	1	－	3	7	－	－
			(4)	(0)	(17)	(0)	(5)	(11)	(9)	－	(0)	－	(1)	(3)	－	－
9	1.24	1.31	－	－	3	－	1	7	4	－	－	－	－	9	－	2
			－	－	(6)	－	(2)	(13)	(8)	－	－	－	－	(17)	－	(4)
10	1.42	1.49	7	1	16	－	9	17	10	－	2	－	1	3	1	1
			(5)	(1)	(11)	－	(6)	(12)	(7)	－	(1)	－	(1)	(2)	(1)	(1)

No.	DEP, U	DEP, L	54	56	58	59	61	62	65	66	71	98	99	100	103	110
3	0.68	0.76	－	1	4	1	127	15	2	2	－	－	1	1	－	－
			－	(0)	(2)	(0)	(59)	(7)	(1)	(1)	－	－	(0)	(0)	－	－
4	0.76	0.84	－	－	20	4	113	20	2	1	2	－	－	3	2	－
			－	－	(9)	(2)	(52)	(9)	(1)	(0)	(1)	－	－	(1)	(1)	－
5	0.85	0.93	－	1	10	1	96	33	2	2	1	－	－	－	－	－
			－	(0)	(5)	(0)	(48)	(16)	(1)	(1)	(0)	－	－	－	－	－
6	0.95	1.01	3	－	13	5	85	16	1	5	－	－	1	－	－	－
			(1)	－	(6)	(2)	(41)	(8)	(0)	(2)	－	－	(0)	－	－	－
7	1.03	1.10	－	－	9	4	74	22	－	5	－	－	－	－	－	1
			－	－	(4)	(2)	(35)	(11)	－	(2)	－	－	－	－	－	(0)
8	1.10	1.17	－	－	10	5	63	11	－	4	1	2	－	－	1	－
			－	－	(5)	(2)	(30)	(5)	－	(2)	(0)	(1)	－	－	(0)	－
9	1.24	1.31	－	－	2	－	16	6	1	1	－	－	－	－	－	－
			－	－	(4)	－	(31)	(12)	(2)	(2)	－	－	－	－	－	－
10	1.42	1.493	－	－	8	12	32	16	1	7	－	－	－	1	2	－
			－	－	(5)	(8)	(22)	(11)	(1)	(5)	－	－	－	(1)	(1)	－

No.	DEP, U	DEP, L	203	207	230	232	233	255	263	269	270	279	282	288	298	300
3	0.68	0.76	1	－	1	23	105	－	7	1	1	－	－	－	2	1
			(0)	－	(0)	(13)	(48)	－	(3)	(0)	(0)	－	－	－	(1)	(0)
4	0.76	0.84	1	－	－	59	43	－	34	1	5	3	－	－	－	1
			(0)	－	－	(27)	(20)	－	(16)	(0)	(2)	(1)	－	－	－	(0)
5	0.85	0.93	－	－	2	38	98	－	6	－	3	－	－	－	5	－
			－	－	(1)	(19)	(49)	－	(3)	－	(1)	－	－	－	(2)	－
6	0.95	1.01	2	－	－	19	126	－	8	1	5	－	－	1	8	－
			(1)	－	－	(9)	(61)	－	(4)	(0)	(2)	－	－	(0)	(4)	－
7	1.03	1.10	1	4	2	15	62	1	－	1	－	2	－	－	3	1
			(0)	(2)	(1)	(7)	(30)	(0)	－	(0)	－	(1)	－	－	(1)	(0)
8	1.10	1.17	－	2	－	26	88	－	3	1	5	2	－	－	3	－
			－	(1)	－	(13)	(43)	－	(1)	(0)	(2)	(1)	－	－	(1)	－
9	1.24	1.31	1	－	－	12	16	－	1	1	2	－	－	－	1	－
			(2)	－	－	(23)	(31)	－	(2)	(2)	(4)	－	－	－	(2)	－
10	1.42	1.493	－	－	－	12	10	－	－	－	3	1	1	－	－	－
			－	－	－	(8)	(7)	－	－	－	(2)	(1)	(1)	－	－	－

No.	DEP, U	DEP, L	327	347	348	349	350	402	403
3	0.68	0.76	－	8	1	32	5	37	17
			－	(4)	(0)	(15)	(2)	(17)	(8)
4	0.76	0.84	1	8	1	37	4	58	25
			(0)	(4)	(0)	(17)	(2)	(27)	(12)
5	0.85	0.93	－	19	－	86	3	51	39
			－	(9)	－	(43)	(1)	(25)	(19)
6	0.95	1.01	－	8	－	83	3	28	24
			－	(4)	－	(40)	(1)	(14)	(12)
7	1.03	1.10	－	7	－	48	5	117	67
			－	(3)	－	(23)	(2)	(56)	(32)
8	1.10	1.17	－	13	－	129	9	137	140
			－	(6)	－	(62)	(4)	(66)	(68)
9	1.24	1.31	2	3	－	43	2	70	52
			(4)	(6)	－	(83)	(4)	(135)	(100)
10	1.42	1.493	－	4	－	50	8	297	205
			－	(3)	－	(34)	(5)	(202)	(139)

上段数字は化石種類コード、（　）内は%



第101図　02020－３区　南壁(1, 3)の花粉ダイアグラム

表９　02020－３区南壁(1,3)の花粉化石組成表

No.	DEP,U	DEP,L	8	13	23	24	26	46	53	61	62	65	66	230	232	233
6	0.00	0.10	2	6	1	25	3	1	2	9	5	2	－	3	51	6
			(4)	(11)	(2)	(45)	(5)	(2)	(4)	(16)	(9)	(4)	－	(5)	(91)	(11)
7	0.10	0.20	1	1	－	3	－	1	1	9	－	5	2	－	6	5
			(4)	(4)	－	(13)	－	(4)	(4)	(39)	－	(22)	(9)	－	(26)	(22)

No.	DEP,U	DEP,L	263	270	298	347	349	350	402	403
6	0.00	0.10	3	1	1	8	67	12	51	50
			(5)	(2)	(2)	(14)	(120)	(21)	(91)	(89)
7	0.10	0.20	1	9	－	2	16	7	46	23
			(4)	(39)	－	(9)	(70)	(30)	(200)	(100)

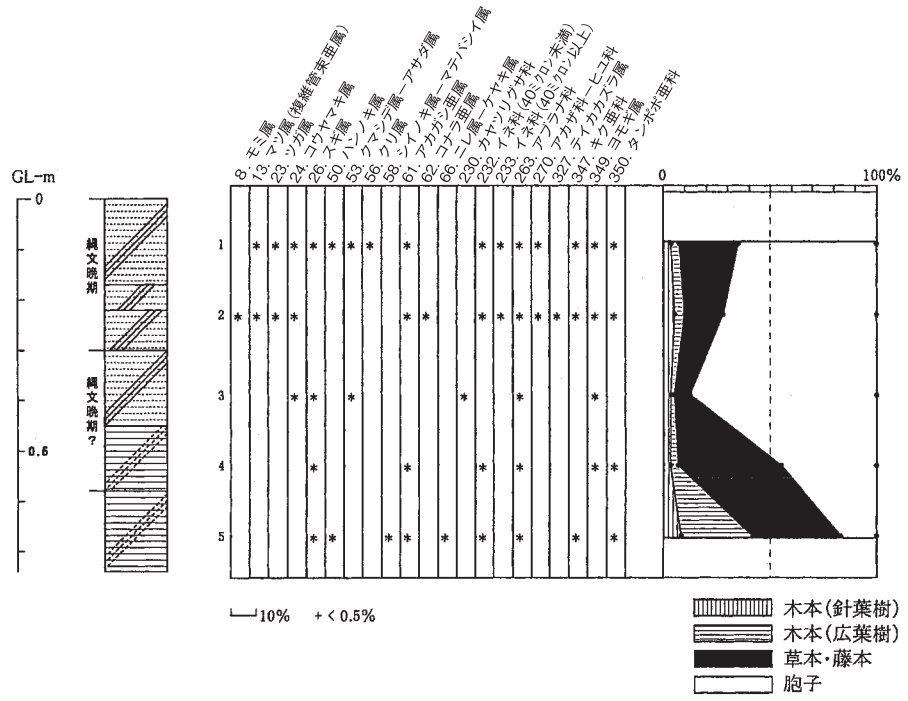
上段数字は化石種類コード、（　）内は%

表10　02020－３区南壁(2)の花粉化石組成表

No.	DEP,U	DEP,L	8	13	23	24	26	50	53	56	58	61	62	66	230	232
1	0.06	0.12	－	1	2	3	2	1	1	1	－	5	－	－	－	2
			－	(6)	(13)	(19)	(13)	(6)	(6)	(6)	－	(31)	－	－	－	(13)
2	0.20	0.26	1	1	3	7	－	－	－	－	－	9	1	－	－	9
			(5)	(5)	(14)	(32)	－	－	－	－	－	(41)	(5)	－	－	(41)
3	0.36	0.43	－	－	－	1	1	－	1	－	－	－	－	－	1	－
			－	－	－	(33)	(33)	－	(33)	－	－	－	－	－	(33)	－
4	0.50	0.56	－	－	－	－	1	－	－	－	－	1	－	－	－	1
			－	－	－	－	(50)	－	－	－	－	(50)	－	－	－	(50)
5	0.64	0.70	－	－	－	－	1	1	－	－	1	1	－	1	－	1
			－	－	－	－	(20)	(20)	－	－	(20)	(20)	－	(20)	－	(20)

No.	DEP,U	DEP,L	233	263	270	327	347	349	350	402	403
1	0.06	0.12	5	38	1	－	6	4	3	78	61
			(31)	(238)	(6)	－	(38)	(25)	(19)	(488)	(381)
2	0.20	0.26	2	2	1	2	6	14	3	105	52
			(9)	(9)	(5)	(9)	(27)	(64)	(14)	(477)	(236)
3	0.36	0.43	－	1	－	－	－	2	－	23	26
			－	(33)	－	－	－	(67)	－	(767)	(867)
4	0.50	0.56	－	5	－	－	－	6	2	5	8
			－	(250)	－	－	－	(300)	(100)	(250)	(400)
5	0.64	0.70	－	1	－	－	2	－	1	1	1
			－	(20)	－	－	(40)	－	(20)	(20)	(20)

上段数字は化石種類コード、（　）内は%



第102図　第02020－３区南壁(2)の花粉ダイアグラム

５．考察

５－１　花粉分帯

花粉組成の特徴から以下のように地域花粉分帯を設定した（木本花粉の検出量が少なく、統計処理に耐えられない試料については、花粉分帯の対象から除いた。）。以下に各花粉帯の特徴を示す。また、本文中では花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料№も下位から上位に向けて記した。

(1) Ⅱ帯（１区試料№15）

アカガシ亜属が卓越する。胞子の割合が高く、草本花粉の割合が低い。

(2) Ⅰ帯（１区試料№18、11、８、５、２区試料№10～３）

アカガシ亜属が卓越傾向にあり、マツ属（複維管束亜属）、コウヤマキ属、スギ属などの温帯針葉樹種が伴う。また、上部では草本花粉の割合が高くなる。特にイネ科（40ミクロン以上）が高率となる。

このことから、イネ科（40ミクロン以上）が高率になる上部をａ亜帯（１区試料№11、８、５、２区試料№８～３）、低率である下部をｂ亜帯（１区試料№18、２区試料№10、９）とした。

５－２　花粉化石含有量の少ない原因について

花粉化石の含有量の少ない原因について、通常は以下のようなことが考えられている。

１．堆積速度が速いため、堆積物中に花粉化石が含まれない。

２．花粉化石の平均的な粒径（数～100μ）と堆積物の粒度が著しく異なり、堆積物中に花粉化石が含まれない。

３．土壌生成作用にともなう堆積物で、堆積速度がきわめて遅く、堆積した花粉化石が紫外線により消滅した。

４．花粉化石が本来含まれていたが、堆積後の化学変化により花粉化石が消滅した。

５．有機物に極めて富む堆積物で花粉以外の有機物も多く、処理の過程で花粉化石が回収できなかった。

今回の分析試料の多くは砂質であり、粒径が花粉化石に比べて大きかったことが、花粉化石含有量の少なかった主原因と考えられる。また、堆積物の粒径が粗く堆積速度が速かったために花粉化石が含まれなかった可能性、花粉粒の花粉膜が薄くなり、同定不能の個体が多かったことから、土壌化に伴う紫外線による劣化を受けた可能性なども原因の一つと考えられる。

５－３　古環境推定

花粉帯毎に、遺跡周辺の古植生を中心とした古環境を推定する。

出土遺物との関係から、Ⅱ帯が縄文時代後期、Ⅰ帯が古墳時代前期頃の植生を示すと考えられる。

（１）Ⅱ帯期（縄文時代後期）

①既知の結果との比較

大阪府南部地域（大和川以南）の遺跡では、縄文時代後期以前を対象とした花粉分析がほとんどされていない。このような中で、大和川以南に立地する西大井遺跡では、渡辺（1995）により縄文時代後期の連続した試料が分析されており、代表的な資料ととらえることが可能である。

渡辺（1995）で報告された花粉組成は、今回同様にアカガシ亜属花粉の卓越で特徴づけられており、スギ属などの温帯針葉樹種、コナラ亜属などの落葉広葉樹種を付随している。

②森林植生

背後に迫る泉北丘陵から金剛・葛城山地にかけてはカシ類が広く分布していたと考えられる。現在の潜在植生から推定すると、シイノキ属―マテバシイ属やクスノキ科の花粉は検出されていないが、これらの樹木を伴って照葉樹林を形成していたと考えられる。わずかに検出できたコナラ亜属やクマシデ属―アサダ属は、泉北丘陵に小規模遷移林（二次林）を形成していた可能性がある。スギ属は同時に検出される針葉樹種と共に金剛･葛城山地で温帯針葉樹林を形成していた、あるいは広葉樹とともに暖温帯針広混淆林を形成していた可能性がある。

（２）Ⅰ帯期（古墳時代前期頃）

①既知の結果との比較

縄文時代に比べ、古墳時代の花粉分析資料は飛躍的に多くなる傾向がある。このような中で、渡辺・古谷（1997）を対象とした陶邑北部での分析結果は、弥生時代から現代にいたる周辺のいくつかの遺跡の分析結果をまとめたものであり、代表的な資料ととらえることができる。

渡辺・古谷（1997）で得られた古墳時代における花粉組成の特徴は、地点毎に大きく異なる傾向にある。人間活動の形跡が豊富な遺跡（地点）ではマツ属（複維管束亜属）花粉の出現率が高く、アカガシ亜属やスギ属他の温帯針葉樹花粉の出現率が低い傾向にある。一方、人間活動の形跡に乏しい遺跡ではマツ属（複維管束亜属）花粉の出現率は低く、アカガシ亜属花粉が卓越し、スギ属他の温帯針葉樹種花粉を伴う傾向にある。今回の分析結果では、マツ属（複維管束亜属）の花粉出現率は低く、アカガシ亜属花粉、温帯針葉樹種花粉が高率を示す傾向にあった。人間活動を示唆するイネ科（40ミクロン以上）花粉はｂ亜帯では低いものの、ａ亜帯では高率を示す傾向にあった。これらのことは、陶邑での開発が窯業のための森林破壊に直接結びついたのに対し、府中遺跡では水田開発が森林破壊に直接結びつかなかったためと考えられる。

②遺跡周辺の古植生

イネ科（40ミクロン以上）花粉が高率を示すのは､古墳時代前期の堆積物であるａ亜帯以降である。一方古墳時代前期以前の堆積物であるｂ亜帯ではイネ科（40ミクロン以上）花粉は低率であり、弥生時代中期の方形周溝墓の周溝埋土からもイネ科（40ミクロン以上）花粉はほとんど検出されていない。したがって、遺跡近辺で水田耕作が行われたのは、弥生時代中期から古墳時代前期の間であったと考えられる。

また、イネ科（40ミクロン以上）花粉の出現率は高いものの、ヨモギ属などの乾燥地に生育する傾向が強い植物の花粉も高率で出現している。このことから試料採取層準が耕作土であったとは

言い難い状況である。あるいは何らかの理由で生産性が低い、あるいは短期間で放棄されるような状況であった可能性も指摘できる。

③森林植生

Ⅱ帯からⅠ帯への花粉組成の変化は、いわゆる「弥生の小海退」に伴う気候の冷涼化に起因すると考えられる。従って、この冷涼化に伴い、温帯針葉樹林あるいは照葉樹林に混淆していた温帯針葉樹は拡大していったと考えられる。

一方、Ⅰ帯下部から上位でのアカガシ亜属の増加、温帯針葉樹種の減少傾向は、その後の温暖化に起因すると考えられる。これに伴い古墳時代前期には温帯針葉樹林あるいは照葉樹林に混淆していた温帯針葉樹林は縮小していったと考えられる。

古墳時代以降は、人為による植生破壊に起因した花粉組成の変化が顕著になる時期であり、自然現象に基づく花粉組成変遷が認められなくなる時期でもある。したがって、今回得られた花粉組成の変化が予想通り温暖化に起因するとすれば大変貴重な現象であり、今後類例を求めていく必要があろう。

6．まとめ

府中遺跡で花粉分析を行い、以下のことを考察した。

（1）花粉分析結果から、Ⅰ、Ⅱ帯の2花粉帯を設定した。さらにⅠ帯をa、b亜帯に細分した。

（2）花粉分析結果をもとに、縄文時代以降の遺跡周辺の古環境を推定した。特筆すべき点は以下の事柄である。

① 遺跡周辺で水田耕作が行われたのは、Ⅰ帯期a亜帯（古墳時代以降）以降であろう。

② 古墳時代前期以降、遺跡近辺で水田耕作が行われた可能性があるが、雑草の生い茂る生産性の低い田であったか、短期間で放棄されるような状況であった可能性も指摘できる。

③ 水田開発と森林の開発は一致せず、古墳時代前期以降に温暖化傾向が認められた。今後、類例を求めていく必要があろう。

7．引用文献

中村 純（1974）「イネ科花粉について、とくにイネを中心として」『第4紀研究』13 187－197

渡辺正巳（1995）「西大井遺跡（93年度調査）における花粉・珪藻分析」
『西大井遺跡―大和川下流東部流域下水道事業大井処理場建設に伴う発掘調査報告書―』
（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書1 149－174

渡辺正巳・古谷正和（1997）「陶邑北部における縄文時代以降の植生変遷」
『野々井遺跡Ⅱ―近畿自動車道松原すさみ線建設に伴う発掘調査報告書―』
（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書 20－2 124－141

表11　02020－1区北壁検出花粉化石数量表

試料No.	No.5		No.8		No.11		No.17		No.18		No.13		No.14		No.15		No.16	
総　数	214		217		201		33		87		17		19		28		12	
深　度	1.22m～1.28m		1.54m～1.60m		1.90m～1.98m		2.30m～2.37m		2.45m～2.51m		2.58m～2.64m		2.71m～2.78m		2.97m～3.03m		3.10m～3.16m	
TAXA CODE & NAME	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
8　モミ属	2	1	0	0	5	2	1	3	0	0	0	0	1	5	0	0	0	0
13　マツ属（複維管束亜属）	16	7	0	0	14	7	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0
23　ツガ属	9	4	4	2	8	4	1	3	1	1	0	0	0	0	0	0	1	8
24　コウヤマキ属	18	8	28	13	2	1	4	12	16	18	2	12	4	21	2	7	2	17
26　スギ属	33	15	7	3	31	15	4	12	3	3	2	12	0	0	1	4	0	0
27　ヒノキ属	4	2	1	0	15	7	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
28　マキ属	0	0	1	0	5	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
45　カリヤ属	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
46　クルミ属－サワグルミ属	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
50　ハンノキ属	4	2	13	6	1	0	0	0	1	1	1	6	1	5	1	4	2	17
51　カバノキ属	2	1	1	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
53　クマシデ属－アサダ属	12	6	7	3	6	3	0	0	2	2	0	0	0	0	1	4	1	8
54　ハシバミ属	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5	0	0	0	0
56　クリ属	1	0	8	4	4	2	1	3	5	6	1	6	0	0	0	0	0	0
58　シイノキ属－マテバシイ属	11	5	24	11	11	5	0	0	18	21	1	6	0	0	0	0	0	0
59　ブナ属	4	2	24	11	3	1	0	0	3	3	1	6	0	0	0	0	2	17
61　アカガシ亜属	63	29	43	20	74	37	20	61	23	26	8	47	11	58	17	61	4	33
62　コナラ亜属	23	11	25	12	8	4	0	0	6	7	0	0	0	0	3	11	0	0
65　ムクノキ属－エノキ属	3	1	4	2	3	1	1	3	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
66　ニレ属－ケヤキ属	5	2	13	6	9	4	0	0	1	1	0	0	1	5	1	4	0	0
69　クワ科－イラクサ科	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
71　ヤナギ属	0	0	4	2	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
95　キハダ属	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
97　ウルシ属	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	6	0	0	0	0	0	0
98　カエデ属	2	1	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
99　トチノキ属	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	7	0	0
100　モチノキ属	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
103　モクセイ科	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
110　グミ属	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
130　ハイノキ属	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
207　ガマ属	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
230　カヤツリグサ科	26	12	8	4	2	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
232　イネ科（40ミクロン未満）	36	17	31	14	22	11	1	3	39	45	1	6	4	21	1	4	1	8
233　イネ科（40ミクロン未満）	120	56	13	6	89	44	1	3	21	24	3	18	2	11	1	4	1	8
255　キンポウゲ科	0	0	0	0	0	0	2	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
263　アブラナ科	5	2	4	2	1	0	1	3	7	7	2	12	2	11	0	0	1	8
270　アカザ科－ヒユ科	5	2	4	2	20	10	2	6	2	2	0	0	1	5	0	0	2	17
279　ウナギツカミ節－サナエタデ節	0	0	2	1	2	1	0	0	2	2	0	0	1	5	0	0	0	0
289　マメ科	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
298　セリ科	18	8	1	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0
300　キカシグサ属	2	1	0	0	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
327　テイカカズラ属	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	2	12	3	16	1	4	0	0
347　キク亜科	5	2	4	2	9	4	3	9	19	22	0	0	9	47	1	4	1	8
348　ブタグサ科－オナモミ属	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
349　ヨモギ属	52	24	30	14	142	71	11	33	35	40	8	47	9	47	3	11	0	0
350　タンポポ亜科	2	1	9	4	4	2	4	12	3	3	0	0	3	16	1	4	1	8
402　単条孔胞子	75	35	222	102	90	45	132	400	328	377	90	529	240	1263	104	371	66	550
403　三条孔胞子	29	14	93	43	47	23	115	348	104	120	218	1282	151	795	59	211	25	208

表12　02020－2区北壁検出花粉化石数量表

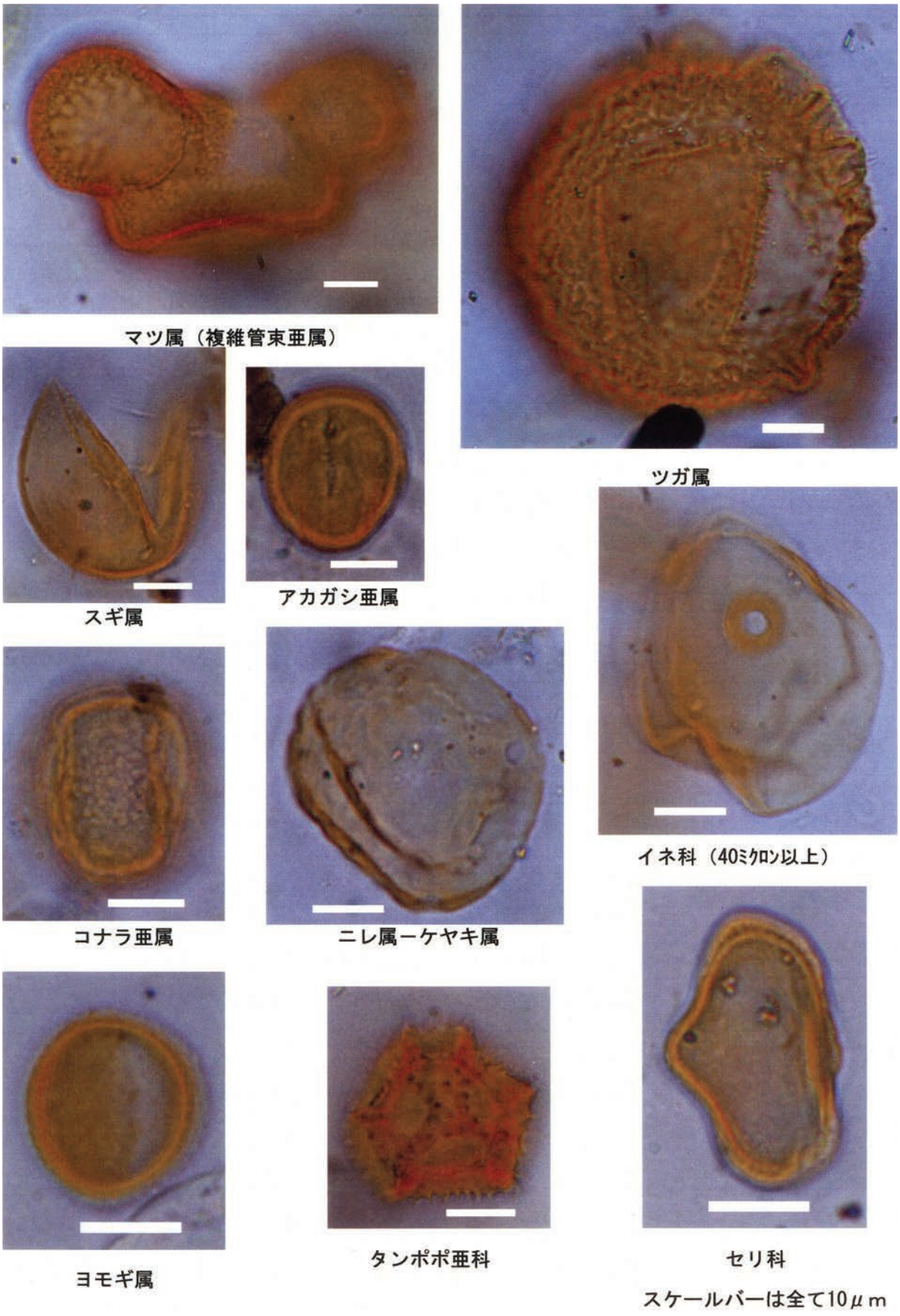
試料No.	No.3		No.4		No.5		No.6		No.7		No.8		No.9		No.10	
総　数	217		216		202		205		209		207		52		147	
深　度	0.68m～0.76m		0.76m～0.84m		0.85m～0.93m		0.95m～1.01m		1.03m～1.10m		1.10m～1.17m		1.24m～1.31m		1.42m～1.49m	
TAXA CODE & NAME	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
8　モミ属	4	2	1	0	2	1	7	3	12	6	9	4	0	0	7	5
12　トウヒ属	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1
13　マツ属（複維管束亜属）	8	4	3	1	7	3	17	8	33	16	36	17	3	6	16	11
15　マツ属（単維管束亜属）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
23　ツガ属	4	2	1	0	4	2	7	3	6	3	11	5	1	2	9	6
24　コウヤマキ属	10	5	13	6	14	7	12	6	8	4	22	11	7	13	17	12
26　スギ属	22	10	17	8	15	7	22	11	16	8	19	9	4	8	10	7
27　ヒノキ属	6	3	3	1	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
28　マキ属	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2	1
44　ヤマモモ属	1	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
46　クルミ属－サワグルミ属	0	0	2	1	1	0	1	0	5	2	3	1	0	0	1	1
50　ハンノキ属	3	1	2	1	3	1	2	1	7	3	7	3	9	17	3	2
51　カバノキ属	1	0	2	1	0	0	3	1	2	1	0	0	0	0	1	1
53　クマシデ属－アサダ属	4	2	4	2	5	2	3	1	5	2	0	0	2	4	1	1
54　ハシバミ属	0	0	0	0	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0
56　クリ属	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
58　シイノキ属－マテバシイ属	4	2	20	9	10	5	13	6	9	4	10	5	2	4	8	5
59　ブナ属	1	0	4	2	1	0	5	2	4	2	5	2	0	0	12	8
61　アカガシ亜属	127	59	113	52	96	48	85	41	74	35	63	30	16	31	32	22
62　コナラ亜属	15	7	20	9	33	16	16	8	22	11	11	5	6	12	16	11
65　ムクノキ属－エノキ属	2	1	2	1	2	1	1	0	0	0	0	0	1	2	1	1
66　ニレ属－ケヤキ属	2	1	1	0	2	1	5	2	5	2	4	2	1	2	7	5
71　ヤナギ属	0	0	2	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
98　カエデ属	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0
99　トチノキ属	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
100　モチノキ属	1	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
103　モクセイ科	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	1
110　グミ属	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
203　オモダカ属	1	0	1	0	0	0	2	1	1	0	0	0	1	2	0	0
207　ガマ属	0	0	0	0	0	0	0	0	4	2	2	1	0	0	0	0
230　カヤツリグサ科	1	0	0	0	2	1	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0
232　イネ科（40ミクロン未満）	28	13	59	27	38	19	19	9	15	7	26	13	12	23	12	8
233　イネ科（40ミクロン未満）	105	48	43	20	98	49	126	61	62	30	88	43	16	31	10	7
255　キンポウゲ科	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
263　アブラナ科	7	3	34	16	6	3	8	4	0	0	3	1	1	2	0	0
269　ナデシコ科	1	0	1	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1	2	0	0
270　アカザ科－ヒユ科	1	0	5	2	3	1	5	2	0	0	5	2	2	4	3	2
279　ウナギツカミ節－サナエタデ節	0	0	3	1	0	0	0	0	2	1	2	1	0	0	1	1
282　ギシギシ属	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
288　ワレモコウ属	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
298　セリ科	2	1	0	0	5	2	8	4	3	1	3	1	1	2	0	0
300　キカシグサ属	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
327　テイカカズラ属	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	4	0	0
347　キク亜科	8	4	8	4	19	9	8	4	7	3	13	6	3	6	4	3
348　ブタグサ科－オナモミ属	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
349　ヨモギ属	32	15	37	17	86	43	83	40	48	23	129	62	43	83	50	34
350　タンポポ亜科	5	2	4	2	3	1	3	1	5	2	9	4	2	4	8	5
402　単条孔胞子	37	17	58	27	51	25	28	14	117	56	137	66	70	135	297	202
403　三条孔胞子	17	8	25	12	39	19	24	12	67	32	140	68	52	100	205	139

表13　02020－3区南壁（1，3）検出花粉化石数量表

試料No.		No.6		No.7	
総　数		56		23	
深　度		0.00m～0.10m		0.00m～0.10m	
TAXA CODE & NAME		数量	%	数量	%
8	モミ属	2	4	1	4
13	マツ属（複維管束亜属）	6	11	1	4
23	ツガ属	1	2	0	0
24	コウヤマキ属	25	45	3	13
26	スギ属	3	5	0	0
46	クルミ属－サワグルミ属	1	2	1	4
53	クマシデ属－アサダ属	2	4	1	4
61	アカガシ亜属	9	16	9	39
62	コナラ亜属	5	9	0	0
65	ムクノキ属－エノキ属	2	4	5	22
66	ニレ属－ケヤキ属	0	0	2	9
230	カヤツリグサ科	3	5	0	0
232	イネ科（40ミクロン未満）	51	91	6	26
233	イネ科（40ミクロン未満）	6	11	5	22
263	アブラナ科	3	5	1	4
270	アカザ科－ヒユ科	1	2	9	39
298	セリ科	1	2	0	0
347	キク亜科	8	14	2	9
349	ヨモギ属	67	120	16	70
350	タンポポ亜科	12	21	7	30
402	単条孔胞子	51	91	46	200
403	三条孔胞子	50	89	23	100

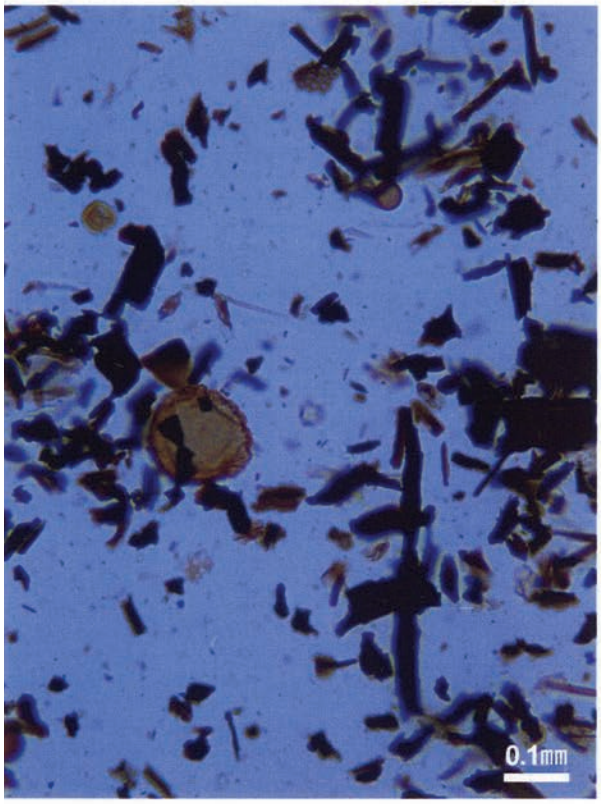
表14　02020－3区南壁(2)検出花粉化石数量表

試料No.		No.1		No.2		No.3		No.4		No.5	
総　数		16		22		3		2		5	
深　度		0.06m～0.12m		0.20m～0.26m		0.36m～0.43m		0.50m～0.56m		0.64m～0.70m	
TAXA CODE & NAME		数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
8	モミ属	0	0	1	5	0	0	0	0	0	0
13	マツ属（複維管束亜属）	1	6	1	5	0	0	0	0	0	0
23	ツガ属	2	13	3	14	0	0	0	0	0	0
24	コウヤマキ属	3	19	7	32	1	33	0	0	0	0
26	スギ属	2	13	0	0	1	33	1	50	1	20
50	ハンノキ属	1	6	0	0	0	0	0	0	1	20
53	クマシデ属－アサダ属	1	6	0	0	1	33	0	0	0	0
56	クリ属	1	6	0	0	0	0	0	0	0	0
58	シイノキ属－マテバシイ属	0	0	0	0	0	0	0	0	1	20
61	アカガシ亜属	5	31	9	41	0	0	1	50	1	20
62	コナラ亜属	0	0	1	5	0	0	0	0	0	0
66	ニレ属－ケヤキ属	0	0	0	0	0	0	0	0	1	20
230	カヤツリグサ科	0	0	0	0	1	33	0	0	0	0
232	イネ科（40ミクロン未満）	2	13	9	41	0	0	1	50	1	20
233	イネ科（40ミクロン未満）	5	31	2	9	0	0	0	0	0	0
263	アブラナ科	38	238	2	9	1	33	5	250	1	20
270	アカザ科－ヒユ科	1	6	1	5	0	0	0	0	0	0
327	テイカカズラ属	0	0	2	9	0	0	0	0	0	0
347	キク亜科	6	38	6	27	0	0	0	0	2	40
349	ヨモギ属	4	25	14	64	2	67	6	300	0	0
350	タンポポ亜科	3	19	3	14	0	0	2	100	1	20
402	単条孔胞子	78	488	105	477	23	767	5	250	1	20
403	三条孔胞子	61	381	52	236	26	867	8	400	1	20

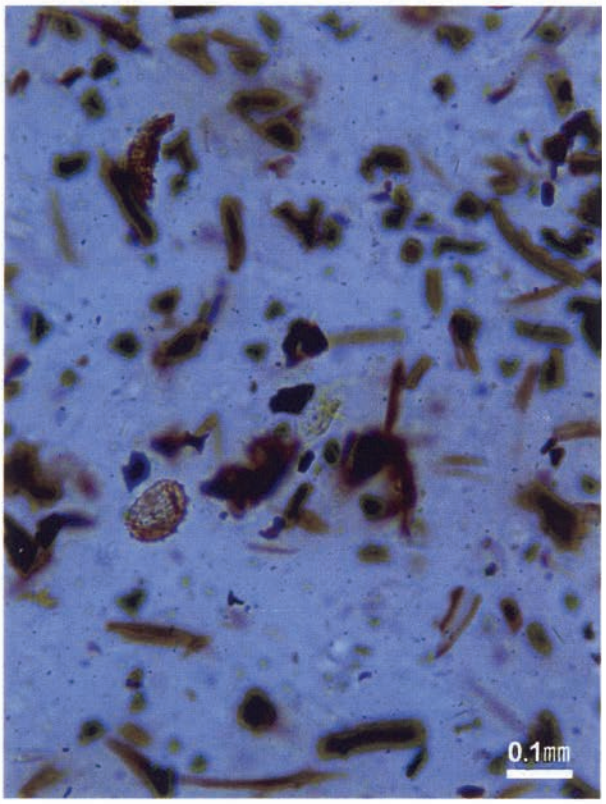


第103図　02020調査　花粉化石写真

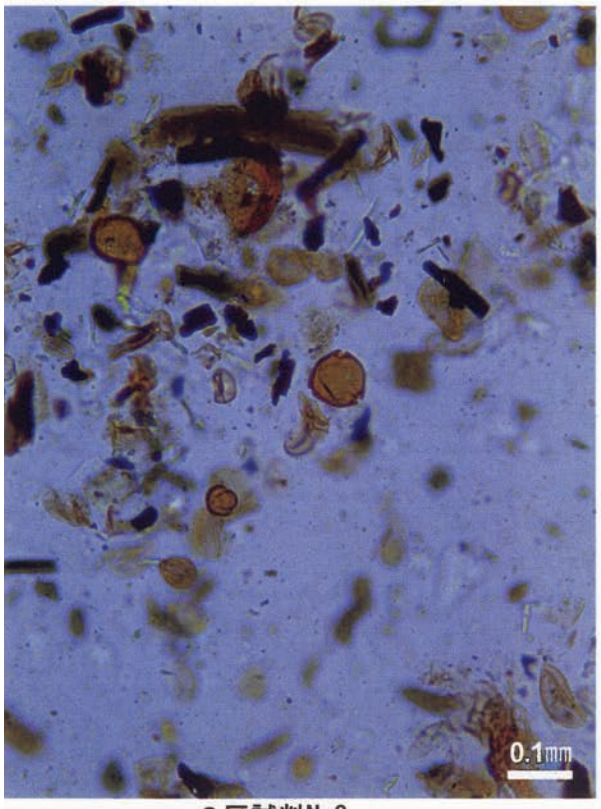
花粉化石検出状況



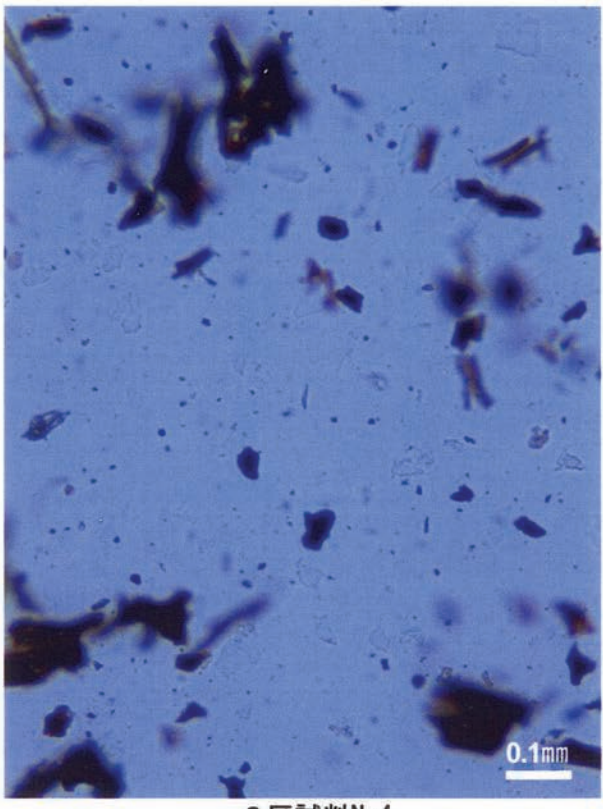
1区試料No.11



1区試料No.14



2区試料No.3



3区試料No.4

第104図　02020調査　花粉化石検出状況写真

第５章　まとめ

本書は平成14年度（02020調査）から平成18年度（06017調査）までの調査成果をまとめた。平成19年度以降の調査も追って報告する予定であり、ここでは簡単にまとめておく。

和泉地域でも縄文時代の遺物が出土する遺跡は徐々に増加しており、早期から中期前半までの遺物が出土した遺跡としては南東約３キロに所在する池田寺遺跡や山間部に立地する仏並遺跡、堺市の小阪遺跡、太平寺遺跡、平井遺跡などをあげられるが、この時期の遺構は報告されていないようである。

中期後半になると、先の仏並遺跡や小阪遺跡のほか、大津川（槇尾川）左岸側に岸和田市の軽部池西遺跡や春木八幡山遺跡で遺物が出土し、仏並遺跡や四ッ池遺跡、泉南の淡輪遺跡、向出遺跡では竪穴住居跡の検出が報告されてきた。

これまでにも府中遺跡や隣接する板原遺跡、要池遺跡で中期末から後期の土器が出土している。板原遺跡では溝状の遺構も確認されていたが、今回06017－１区で中期末頃の土器集積遺構（SU51）や屋外炉と推定される遺構（SX10）を検出した。次回の報告になるが、SU51の東約30ｍ地点で貯蔵穴を検出しており、中期末の遺物も多数出土している。

当遺跡におけるこれまでの調査では縄文時代晩期や弥生時代から中近世までの遺構が旧耕土を除去した高さ付近で検出されることから、この面より下層を調査することは殆ど無かったようである。また、縄文時代後期以前は弥生時代以後に比べて大地への働きかけが少なく、有機物排出等による土壌変化も小さいため、緊急調査では弥生時代の面で調査を終え、下層を調査対象としなかったためであろう。時間をかけた調査が望まれる。

また、03020－３区では縄文時代後期末と晩期の土坑を検出している。06017－１区とは約220ｍ離れており、約1000年の時間差があるが、大阪湾の海岸線から2 ～ 3kmの標高17ｍの安定した台地を生活の場として集落を営んでいた集団を想像させる。

弥生時代では、前期頃の河道（NR11）と中期の方形周溝墓群（SZ01 ～ SZ05）を検出した。NR11は遺物をほとんど含まないが、下層埋土から出土した流木の14Ｃ年代測定で、2420BPと3000BPの値を得ている。600年の差は大きいが、縄文時代晩期から弥生時代前期初頭頃の河道と考えて間違いないであろう。この河道は完全に埋積せず、弥生時代中期には周囲よりやや低くなっていたが、花粉分析から水田には適さなかったようである。調査地の北約150m北で和泉市教育委員会が行った調査でも弥生時代前期以前の埋没河川が確認されている。府中遺跡や池上曽根遺跡が立地する標高15 ～ 30ｍの低位段丘面では多数の埋没河川が確認されており、生活に欠かせない伏流水（湧水）や制御しやすい小河川沿いを選んで集落を営なんだのであろう。

弥生時代中期では東南端で６基の方形周溝墓（SZ01 ～ 06）を検出した。すぐ北に埋没河川があり、この地形に規制されてSZ03築造後軸を少しずつずらして築造されたことが明らかになっ

た。方形周溝墓は北西から南東に溝を共有して並んでいるが、SZ04はSZ02の南東溝が埋没後に溝を掘り直して築造されたもので、追葬のためにSZ03を拡大したのであろう。このことから、６基の方形周溝墓は溝を共有することから一家族の墓、もしくは同一家系など強いつながりを持つ複数世帯の墓地と理解して良いのではないか。

府中遺跡では、0202－３区と道路を挟んで東南の1984、1986年度調査で、中期の竪穴住居跡５基と弥生時代後期の住居跡２基、周溝墓（方形と円形）が５基検出されているが、５基周溝墓のうち３基は約10m間隔を開けて造営され、２基は溝を共有するが、周溝埋積土から前後関係が認められている。また、NR11が土器の廃棄場所にされているように府中遺跡では後期から古墳時代に入っても集落の継続性が認められる。池上曽根遺跡が中期には多重濠と大規模建物を有し，拠点集落として肥大化していたものが、弥生時代後期に急速に衰退するのと対比するとどこにその差があったのか、府中遺跡は環濠が確認されておらず、中期、後期の集落規模が判然としないので単純に比較できないが、それぞれの遺跡での今後の調査を待って改めて検討したい。

槇尾川右岸側の条里地割りでは、調査地は和泉国府推定地の１町南東になるが、古代や中近世の遺構は殆ど検出されない。予てから指摘されているように、室町時代になると和泉国の守護所が堺に移った後、熊野街道沿いの街道街に縮小するなかで、周囲より高かった国衙跡は西北への傾斜する自然地形を緩和し、耕作地化するため削り取られたのであろうか。